佐賀県文化財調査報告書第169集

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書1

幸津遺跡

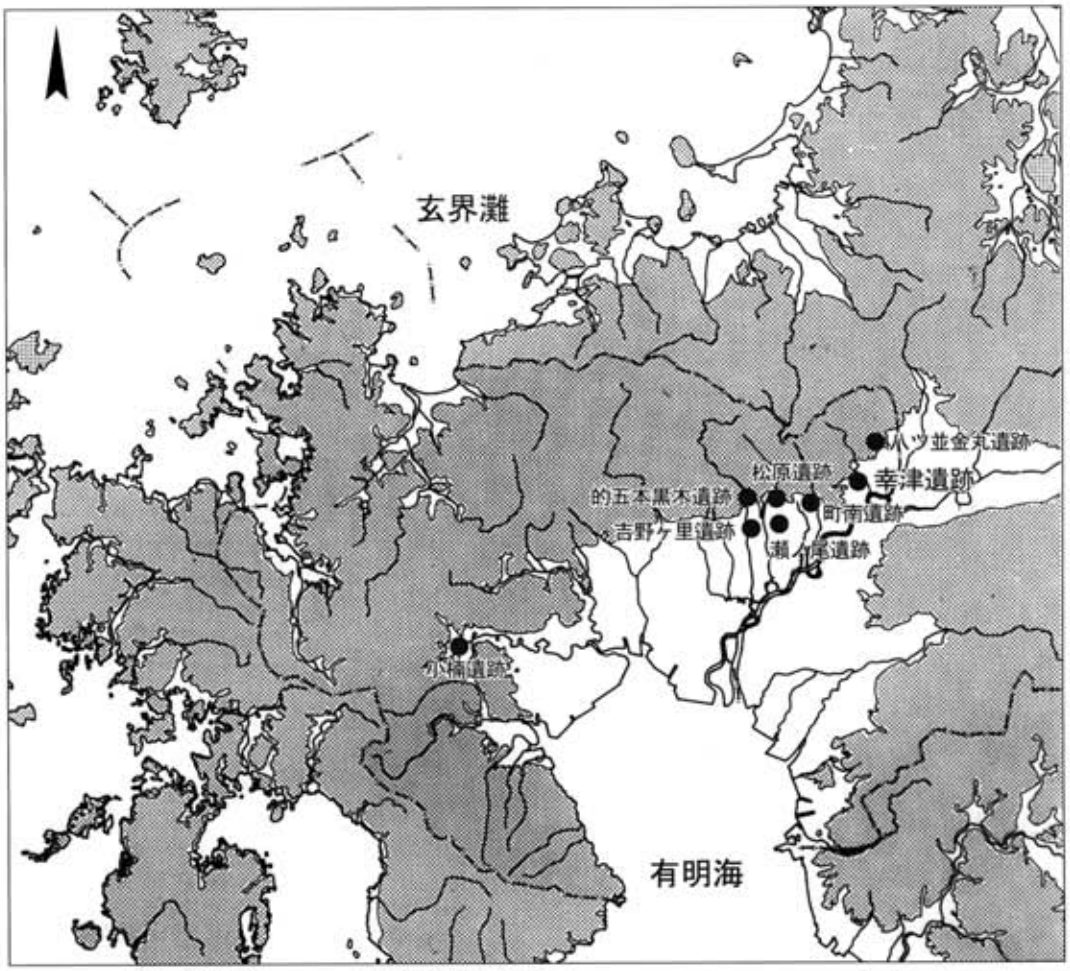
平成19年(2007)年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県文化財調査報告書第169集

九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化調査報告書１

幸津（さいつ）遺跡



平成19年（2007）年3月

佐賀県教育委員会

序

本調査報告書は、佐賀県教育委員会が独立行政法人鉄道建設・運輸整備支援機構の委託を受けて、平成16年度に実施した九州新幹線整備事業に伴う鳥栖市幸津遺跡の埋蔵文化財調査報告書です。

筑後川に流れ込む安良川の副堤（二線堤）の一部や弥生時代前期の環濠や弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴住居などの遺構を検出したほか、弥生時代前期から奈良時代頃の土器や石器が多数出土しました。その結果、鳥栖市朝日山南麓付近に立地する遺跡の調査例を新たに加えることになりました。

幸津遺跡の内容が本県の学術文化の向上に寄与するとともに、鳥栖市民のみならず県民の皆様に郷土の歴史を理解する上でその一助になれば幸いに存じます。

なお、刊行にあたり、発掘作業に従事していただいた地元の皆様を初めとする関係者や埋蔵文化財保護に御理解を賜りました独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構に対し心から厚く御礼申し上げます。

平成19年３月

佐賀県教育委員会
教育長　吉野健二

例　　言

1　本書は、九州新幹線建設に伴い平成16年度に発掘調査を実施した鳥栖市幸津遺跡に係る文化財調査報告書である。

2　発掘調査は、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構　鉄道建設本部　九州新幹線建設局の委託を受け、佐賀県教育委員会が実施した。

3　発掘調査にあたって、独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、鳥栖市教育委員会の協力を得た。

4　調査記録の整理と報告書作成作業は、佐賀県文化課、佐賀県文化財調査研究資料室で実施した。
遺構実測：渋谷　格、石田智子、渡辺尭志、渡邊　誠、株式会社埋蔵文化財サポートシステム、
遺物整理・実測・製図：渋谷　格、細川金也、田中健一郎、奥　知恵子、村里育子、江副朋子、百崎正子、鶴田啓子、増田好美、皆越弘子、馬場里美、石田智子、嘉村哲也、山口カズヨ、古賀弘美、中島文子、三好文子、上瀧光子、山口美佐子、江島恵美子、古賀美江、徳永美穂子、児玉洋志、岩橋由季、株式会社とっぺん

5　遺物の写真撮影は小森義尚が行い、一部について株式会社ダットに委託した。

6　報告書作成に関して下記の方に指導・助言・協力を頂いた。
田崎博之、中野　充、森田孝志、小松　譲、七田忠昭、兒玉洋志、能登原孝道、渡部芳久

7　本書の編集は、田中、馬場の協力を得て、細川が行なった。原稿執筆者は目次に記す。

凡　　例

1．幸津遺跡の略号はASIである。

2．遺跡の種別記号は、次のとおりである。
SH：竪穴住居跡、SB：掘立柱建物跡、SK：土坑、SD：溝・環濠、SX：不明遺構（粘土採掘坑、土器埋納土坑を含む。）

3．各遺構番号は、連番とし、発掘調査時の遺構番号をそのまま用いた。

4．本書に用いた方位は、国土座標第Ⅱ系の座標北である。

5．本書に掲載した遺物全てに県遺物登録番号を付け表に付記した。

6．遺構・遺物写真、遺構・遺物実測図は、佐賀県文化財調査研究資料室にて保管している。

本 文 目 次

第１章　はじめに（西田）……1
1　調査にいたる経過……1
2　調査体制……2
3　調査組織……4

第２章　遺跡の環境……5
1　位置と地理的環境（細川）……5
2　歴史的環境（田中）……7

第３章　調査の概要……15
Ⅰ　遺跡の概要（細川）……15
Ⅱ　出土遺構の内容（細川）……18
(1)　弥生時代の遺構……18
(2)　古墳時代以降の遺構……18
Ⅲ　出土遺物の内容……29
(1)　土器（細川）……29
イ　SD01環濠下層出土土器……29
ロ　SD01環濠中層出土土器……30
ハ　SD01環濠上層出土土器……35
ニ　住居跡・土坑等出土土器……38
ホ　包含層・検出面出土土器……40
(2)　石器（兒玉）……42
ヘ　SD01環濠中・下層出土石器……42
ト　SD01環濠上層出土石器……47
チ　その他の遺構・包含層出土石器……49

第４章　まとめ……55
1　幸津遺跡について（細川）……55
2　佐賀平野の前期環濠について（細川）……55
A　前期環濠の規模と立地……56
B　前期大型環濠の変遷……56
C　まとめ……58
3　幸津遺跡出土石器について（兒玉）……59
A　組成……59
B　磨製石器の型式……60
C　打製石器の諸問題……62
D　まとめ……62

挿　図　目　次

第１図　新幹線鹿児島ルート路線図 ……3
第２図　鳥栖市域周辺地形図 ……6
第３図　鳥栖市遺跡配置図 ……8
第４図　幸津遺跡調査位置図 ……16
第５図　幸津遺跡調査区地形図 ……17
第６図　幸津遺跡遺構配置図 ……19
第７図　SD01環濠土層断面図 ……21
第８図　SH07竪穴住居跡 ……22
第９図　SH05・08竪穴住居跡 ……23
第10図　SH09・06竪穴住居跡 ……24
第11図　土器埋納土坑 ……25
第12図　SX11土坑 ……26
第13図　SX12・13土坑 ……27
第14図　SX14・18土坑・SB19掘立柱建物跡 ……28
第15図　SD01環濠下層出土土器 ……29
第16図　SD01環濠中層出土土器① ……31
第17図　SD01環濠中層出土土器② ……32
第18図　SD01環濠中層出土土器③ ……33
第19図　SD01環濠中層出土土器④ ……34
第20図　SD01環濠中層出土土器⑤・SD01上層出土土器① ……36
第21図　SD01環濠上層出土土器② ……37
第22図　竪穴住居跡・土坑等遺構出土土器 ……38
第23図　包含層・検出面出土土器 ……41
第24図　SD01環濠出土石器① ……43
第25図　SD01環濠出土石器② ……45
第26図　SD01環濠出土石器③ ……46
第27図　SD01環濠出土石器④ ……48
第28図　包含層検出面出土石器 ……50
第29図　佐賀県内の弥生時代前期環濠 ……57

表　目　次

第１表　幸津遺跡遺構一覧表 ……25
第２表　幸津遺跡出土土器一覧表 ……51
第３表　幸津遺跡出土石器一覧表 ……54
第４表　佐賀平野の前期環濠 ……55
第５表　SD01環濠石器組成表 ……59
第６表　前期後半～中期初頭における石包丁の石材 ……61

写真図版目次

PL 1　幸津遺跡調査前風景（遠景）南から／幸津遺跡調査前風景（近景）南から……65
PL 2　幸津遺跡全景（北上空から）／幸津遺跡全景（上空から）……66
PL 3　SD01環濠全景（北西から）／SD01環濠土層A断面（南東から）……67
PL 4　SD01環濠土層B断面（南東から）／SH07竪穴住居跡全景（北東から）……68
PL 5　SH06・05竪穴住居跡全景（東から）SX11～15土坑（東から）……69
PL 6　SH08竪穴住居跡全景（北東から）／SX12土坑北壁（南から）／SX13土坑半裁状況（南東から）……70
PL 7　SX02土器埋納土坑（北から）／SX03土坑土器埋納土坑／SX04土器埋納土坑（北東から）……71
PL 8　SD01環濠出土土器①……72
PL 9　SD01環濠出土土器②／SX02～SX04土器埋納土坑出土土器……73
PL10　SH07竪穴住居跡／SX013土坑／包含層・検出面出土土器……74
PL11　SD01環濠出土石器①……75
PL12　SD01環濠出土石器②……76
PL13　SD01環濠出土石器③……77
PL14　その他の遺構・包含層出土土器……78

第１章　はじめに

１　調査にいたる経過

九州新幹線鹿児島ルート佐賀県内区間は11.7㎞、鳥栖市・基山町を通過するが、基山町部分はトンネル区間であるため、文化財の対象となる区間は全て鳥栖市部分にあたる。

九州新幹線鹿児島ルート建設計画に係る文化財調査との調整が始まったのは、昭和59年７月からである。７月25日に「九州新幹線（鹿児島ルート）計画に伴う自然環境検討会」、７月26日には「九州新幹線（鹿児島ルート）環境影響評価報告書案説明会」が開催され、「九州新幹線（鹿児島ルート）環境影響評価報告書案について」照会があっている。７月31日、11月２日、12月11日と回答を行い、その内容は、「発掘調査を行うものが３遺跡となっているが、他にも遺跡の存在が予想されるところもあり、これらについては路線決定後、路線内の再度の踏査あるいは確認調査が必要と考えられる。調査箇所・日程等、今後のことについては『日本国有鉄道の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書』に沿って協議を行うこと。」としている。12月22日には佐賀県知事から日本国有鉄道下関工事局長に「九州新幹線（福岡市・鹿児島市間）環境影響評価報告書案について」の意見書が提出されているが、この後昭和61年に「九州新幹線（鹿児島ルート）環境影響評価報告書に係る見解書について」やり取りがあったものの、平成に入ってしばらくは、文化財との調整は行われず、再開されるのは平成12年になってからである。

平成12年11月14日に「九州新幹線環境影響評価報告書案の更新に伴う資料提供について」の依頼があり、平成13年４月25日には九州新幹線鹿児島ルート博多～船小屋間40㎞の工事が認可されたことにより、調整は本格化する。５月16日に「九州新幹線鹿児島ルートに係る日本鉄道建設公団工事概要説明会」が佐賀県庁関係各課を対象に行われ、６月４日には日本鉄道建設公団九州新幹線建設局局長から佐賀県教育委員会教育長あてに「九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて」の照会があり、６月６日には日本鉄道建設公団・鳥栖市・鳥栖市教育委員会・佐賀県文化課で四者協議を行っている。九州新幹線鹿児島ルートに係る文化財調査では、鳥栖市教育委員会の協力は不可欠であるため、この照会に対して両者で対応していくことを確認し、６月13日には県教育長から市教育長あてに同様の照会をしている。６月14日には両者で文化財調査協議を行い、それまでに行った確認調査や本調査の結果を基に埋蔵文化財の状況を検討し、６月26日の「九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査における現地踏査について」の依頼を受け、７月４日に現地踏査を行っている。現地踏査の結果を基に９月４日に市教育長から県教育長あて「九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の有無及びその取扱いについて」の回答があり、９月18日に県教育長から日本鉄道建設公団九州新幹線建設局局長あてに同名で確認調査が必要な箇所を回答した。特に平成７年度から重要遺跡確認調査が行われている勝尾城下町遺跡については、「総構えの堀等重要な遺構が存在する可能性が高く、史跡指定も考えられる地区であり、詳細な確認調査を実施後、保存について協議するよう」求めている。

この間ルート内の用地買収も進んできたため、鳥栖市教育委員会により平成13年10月23日から30日まで筑紫トンネル出口付近及び工事ヤード7,371㎡を、11月７日には山浦地区の2,470㎡を対象に確認調査が行われた。平成14年度には、再度鳥栖市教育委員会に埋蔵文化財確認調査への業務支援を依頼し、６月４日～６日に山浦地区1,800㎡の確認調査が実施された。10月16日～29日及び平成15年２月18日には山浦・原古賀地区38,200㎡を対象に確認調査を実施したが、遺物が少量出土したものの明確な遺構は認められなかった。平成14年度までの確認調査結果

については、平成15年７月28日県教育長から日本鉄道建設公団九州新幹線建設局長あて「九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の試掘調査の結果について」で工事に支障はないことを回答している。平成15年度は、蔵上・幸津地区及び山浦地区の確認調査を実施している。蔵上・幸津地区は1,800㎡を対象に10月22日～28日までの期間に行っている。蔵上地区では遺構は確認されなかったが、幸津地区で遺構が確認された。幸津地区は近世の霞堤が丘陵部に取り付く部分にあたり、２箇所のトレンチから霞堤に関連すると考えられる盛土と盛土下層から小土壙・小穴を確認し、盛土中から弥生土器、８世紀の土師器が出土した。調査結果は11月19日に県教育長から独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局長あて「九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の試掘調査の結果について」で報告するとともに、鉄道建設・運輸施設整備支援機構と本調査の協議を行い、工事で影響を受ける400㎡を本調査対象とし、平成16年度に調査を実施することになった。また調査対象地点は遺跡の未周知地区であったため、幸津遺跡の範囲を拡大して登録するとともに、12月２日付けで鳥栖市教育長に「遺跡の発見について」通知している。山浦地区は新鳥栖変電所が計画されている地区で、14,000㎡を対象に平成16年３月１日から３月10日まで県・鳥栖市教育委員会で調査を行い、勝尾城下町遺跡関連の遺構を確認し、平成17年度から本調査を行っている。

２　調査の経過

幸津遺跡の調査は、平成16年11月４日に県知事と独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局長で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託」契約を締結し、12月13日に開始した。当初計画では400㎡の調査であったが、工事用道路が遺跡に影響を与えることが判明したため、平成17年１月24日に、調査面積の増と調査期間を延長する変更契約を締結した。

幸津遺跡調査日誌

平成12年12月13日（月）　幸津遺跡発掘作業開始。霞堤に関連する盛土の調査のためバックフォーによるトレンチ掘削。
12月14日（火）　発掘作業員によるトレンチ精査、溝確認。
12月17日（金）　溝掘り下げ。
12月22日（水）　溝掘り下げ、弥生時代前期の可能性大。
12月28日（火）　溝掘り下げ、断面Ｕ字形。平成16年の作業終了。
平成17年１月５日（水）　現場再開。
１月11日（月）　遺構検出作業、竪穴住居を確認。
１月12日（火）　竪穴住居４軒確認。
１月17日（月）　ＳＸ０２出土土師器実測、取上げ。
１月28日（金）　ＳＤ０１土層実測。
２月１日（火）　雪のため作業中止。
２月５日（土）　空中写真撮影。
２月14日（月）　現場作業終了。

第１図　新幹線鹿児島ルート路線図（S＝1/30000）

3　調査組織

調査主体　佐賀県教育委員会

発掘調査　平成16年12月13日～平成17年２月14日

総　　括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野　健二
		文化課長	初村　健二
		文化課副課長	天本　洋一
調査総括		文化課主幹	西田　和己
調査担当		文化課主査	渋谷　格
庶務会計		文化課係長	中原　吉朗
		文化課主査	野口佐智子
		文化課主査	島田　一幸
		文化課主査	碇　　一浩
		文化課主事	坂口　豪史

現場作業員　高田伊莫、中島トミ子、仁田利宣、原野國敏、松隈マチ子、山下重信、光安清勉、眞田匡宣、豊増英則、牛島愛介、飛松和憲、石田智子、渡辺尭志、渡邊誠、横尾裕一

整理・報告書作成（平成17年・18年度）

総　　括	佐賀県教育委員会	教育長	吉野　健二
		文化課長	初村　健二（平成17年度）
			松永　光生（平成18年度）
		文化課参事	東中川忠美
調査総括		文化課主幹	西田　和己
調査担当		文化課主査	細川　金也
		文化課嘱託	田中健一郎（平成17年10月～）
庶務会計		文化課係長	中原　吉朗（平成17年度）
		文化課主幹	佐伯　勇次（平成18年度）
		文化課主査	平尾　和子
		文化課主査	山口　徹也
		文化課主事	吉田　顕徳

調査補助員　石田智子、嘉村哲也、岩橋　由季

整理作業員　奥知恵子、村里育子、江副朋子、百崎正子、鶴田啓子、増田好美、皆越弘子、馬場里美、山口カズヨ、古賀弘美、中島文子、三好文子、上瀧光子、山口美佐子、江島恵美子、古賀美江、徳永美穂子

第２章　遺跡の環境

１　位置と地理的環境

幸津遺跡の所在する鳥栖市は、佐賀県の東端に位置する。行政区域としては、市域の北側を基山町と福岡県那珂川町、西側はみやき町（旧中原町・北茂安町・三根町）、東側は福岡県小郡市、南側は同県久留米市とそれぞれ接する。南は筑後川に流れ込む宝満川を県境とする。

鳥栖市の面積は71.37㎢、人口64,000人余り。県内10市のうち、面積は、もっとも小さいが、人口規模では県内第３番目の都市である。九州長崎本線と鹿児島本線が交わるＪＲ鳥栖駅のほか、九州自動車道と長崎自動車道が交わる鳥栖ジャンクションを持ち、古来交通の要所として栄える。

市の北側には、脊振山地の主峰の一つである九千部山（標高847m）を頂点として石谷山、権現山が東西に連なる。鳥栖市は、この脊振山地の東端部にあたり、北にある基山町及び福岡県筑紫野市・小郡市付近で途切れる。その脊振山地の東北部は、途中狭い平野を挟み、三郡山地が位置する。

この脊振山地は、白亜紀後期代に深く貫入した花崗岩を基盤としている。このため、脊振山地から延びる標高約100m以上の山地と丘陵は、ほぼ花崗岩である。この脊振山系から南及び南西側へ向けて大小様々な規模の高・中・低位段丘が延びているが、この段丘は、それぞれ更新世段階以降に形成された礫層及び火山灰層からなる。この段丘の間や市域の南東及び南側には、沖積地が広がり、広大な平野部を形成する。

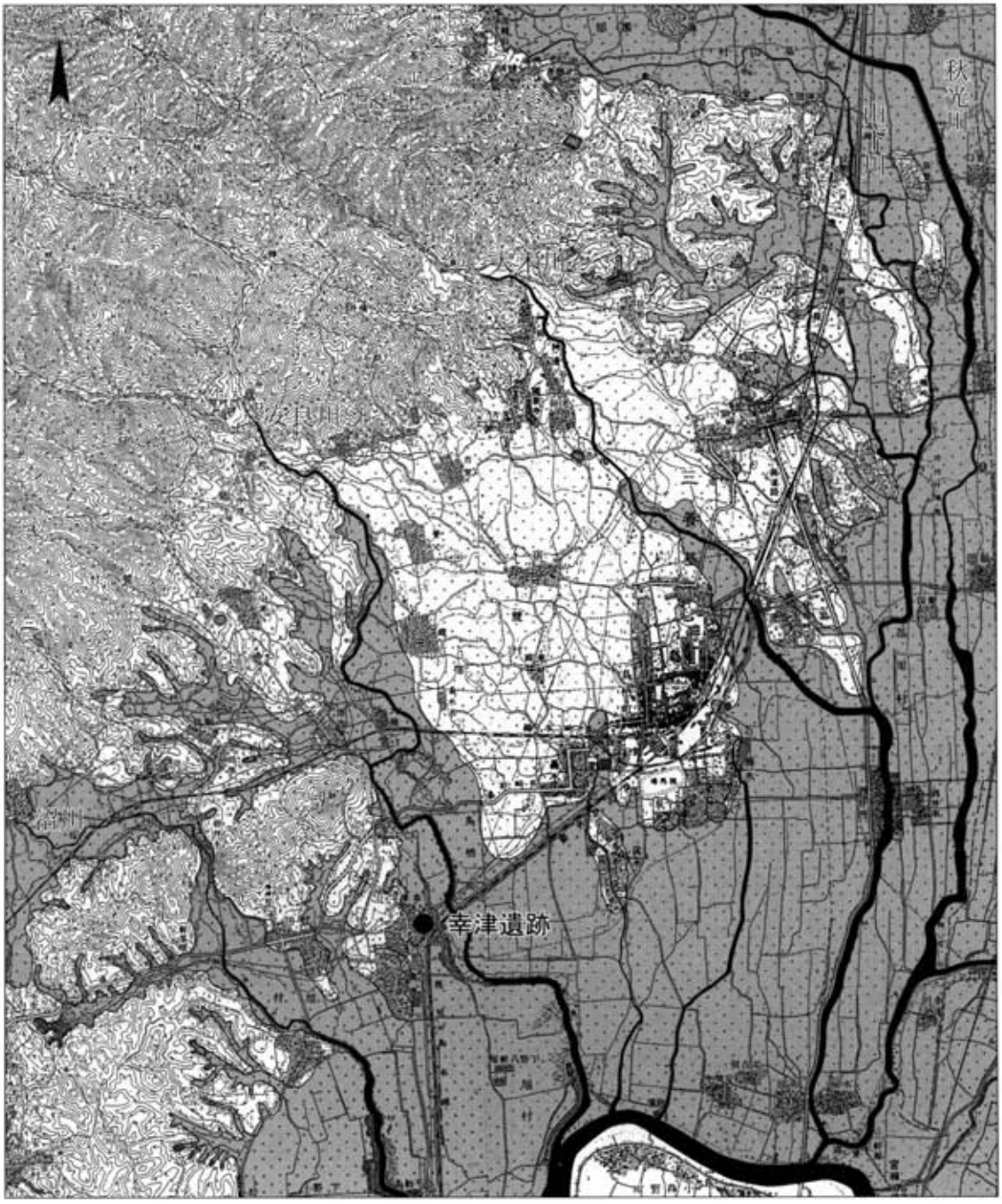
鳥栖市域を流れる代表的な河川には、西から順に秋光川、山下川、大木川、轟木川、安良川、沼川がある。これらの河川は、直接筑後川に流れ込む沼川を除き、その支流である宝満川へと流れ下る。これらの河川は段丘の間を流れることにより、それぞれの段丘が明瞭になる。

市域の北西域にある柚比丘陵群は、高位段丘が八手状に開析され、樹状支谷が明瞭に認められる。丘陵部は集落や森林として、谷部は水田として利用され、北部九州の農村の雰囲気を醸しだしていたが、近年の区画整理事業に伴いその大部分が消滅してしまった。各時代の遺跡はこの丘陵部やその斜面部付近にかけ分布する。この柚比丘陵群の南側も同様な雰囲気を示すが、大木川左岸に面した部分は、一部段丘を残すものの川筋に沿って扇状地形が広がる。なお、この段丘の東側は、田代町付近から姫方・曽根崎町付近にかけ細長い段丘がいくつも形成されていることが分かる。

大木川と安良川に挟まれた段丘は、群石山（標高201m）を頂点として南西部に広がる。丘陵と平野部の変換地点である神辺・牛原地区から鳥栖市街地・轟木付近まで扇状地形となる。丘陵の南端付近で、谷部も幾つか認められるが、市街地化が進んでおり旧地形の状況は不明な点が多い。

城山（標高501m)の西側から流れる安良川は、山浦新町付近で平野部に出て、大きく蛇行を繰り返しながら流れ下る。蔵ノ上から轟木付近の右岸には、氾濫原が形成される。これに対し、安良川左岸は、鳥栖市山浦町から立石町付近にかけ樹枝状の丘陵の発達が顕著に認められる。鳥栖市南西部の江島町からみやき町白壁地区付近にかけ広がる通称「白壁丘陵」においても認められるが、こちらは規模が大きい。

鳥栖市域の西側で独立丘陵状を呈する朝日山（標高132m）とその西に位置する所熊山（標高113m）は、三郡変成岩で構成されており、その起源は古生代まで遡る。この朝日山と所熊山の間を市域の西側である立石町付近から沼川が流れ下る。朝日山南麓には、中位・低位段丘が連なり、その南に延びる低位段丘上に幸津遺跡は位置する。



第２図　鳥栖市域周辺地形図（1/50000）

※　本図は、大日本帝国陸地測量部が大正15年に測図した『鳥栖』『中原』（1/25,000）を元に作図した。
アミカケ部分は、沖積地を示す。

2　歴史的環境

鳥栖市は、古くから交通の要衝として栄え、原始古代の遺跡が数多く知られている。特に弥生時代の安永田遺跡や柚比本村遺跡では、青銅器生産を示す銅鐸及び武器形青銅器の鋳型や赤漆玉鉋装銅剣等豪華な副葬品を持つ墳墓が発見され、当該地域の重要性を示す資料である。

以下、鳥栖市域における遺跡について概観する。

旧石器～縄文時代

旧石器時代の遺跡は、市域内の高位段丘や中位段丘上にみられる。牛原前田遺跡、本川原遺跡、本行遺跡、今町共同山遺跡等でナイフ形石器や角錐状石器、台形石器等が出土している。ただし、明確な遺構や包含層はまだ確認されていない。

縄文時代早期の遺跡には、今町共同山遺跡、西田遺跡、牛原原田遺跡、岸田南遺跡がある。柚比丘陵上に位置する今町共同山遺跡では、早期前葉の刺突文土器（柏原式）１点と早期の押型文土器６点が出土している。西田遺跡は、県内最大規模の集石遺構を持つ遺跡である。これまで集石遺構や配石遺構が62基検出され、集石の中には、花弁状の炉を持つもの６基が含まれており、注目される。この遺跡からは、多量の押型文土器（稲荷山式、早水台式、下菅生式、田村式）、条痕文土器、無文土器とともに撚糸文土器が出土している。牛原原田遺跡からも西田遺跡と同様な集石遺構２基が、押型文土器とともに検出されている。岸田南遺跡では、早期末に位置づけられる貝殻文系土器３点が出土している。

縄文時代前期の遺跡には、長ノ原遺跡、岸田南遺跡、牛原前田遺跡、西田遺跡がある。長ノ原遺跡からは、轟Ｂ式系土器と曽畑式土器が５個体程度出土している。前述の岸田南遺跡からは、まとまった数の曽畑式の土器が出土しているほか、爪形文土器も見つかっている。牛原前田遺跡からは、集石を伴い曽畑式の深鉢が倒置された状況で出土している。

縄文時代中期の遺跡である平原遺跡からは、集石遺構45基が検出され、早期に顕著であった集石遺構が中期段階まで残ることを示す資料として注目される。また、西北九州地域で出土例の限られる並木式土器が多量に出土した。岸田南遺跡では、貯蔵穴からイチイガシの種実が出土している。この種実のAMS法を用いた放射性炭素年代測定法では、4,090±40y.B.Pと3,730±40ｙ.B.Pの値が出ており、当該期の年代を知るうえで重要である。西田遺跡からは、瀬戸内系の船元式土器が単独で出土している。

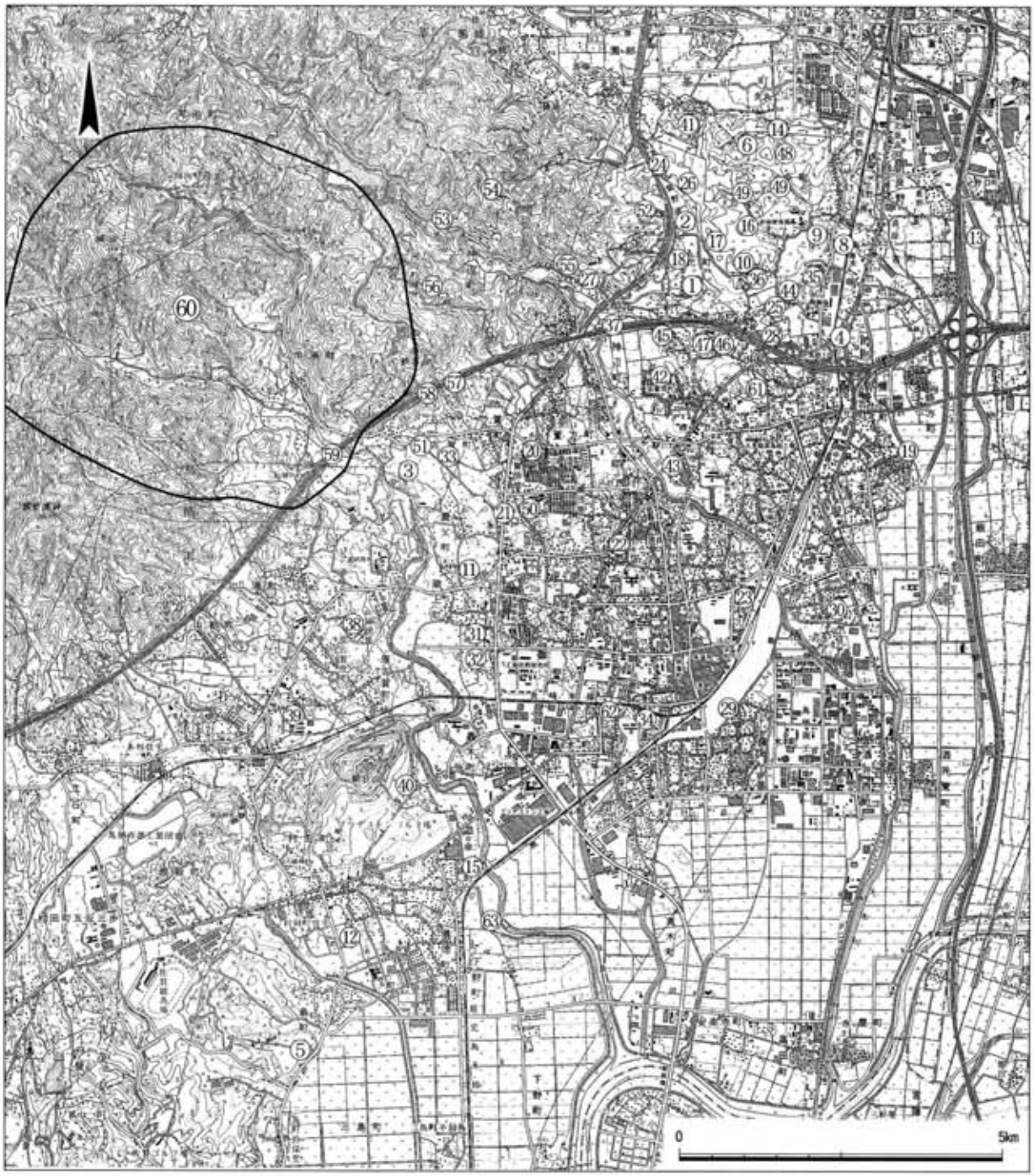
縄文時代後期前半は良好な資料に恵まれないが、後期後半に入ると、当該期の大規模な遺跡である蔵上遺跡が出現する。安良川左岸の河岸段丘の縁辺部に位置するこの遺跡は、竪穴住居10棟、土器棺墓41基、土壙墓とみられる土壙２基等が検出されており、県内では数少ない集落と墓の関係が分かる縄文時代の遺跡として重要である。

また、三万田式を中心に土器がコンテナ500箱以上だけでなく、石棒や十字型石器、十字型土製品、土偶、注口土器、装飾が施された土製円盤等、当該期の精神文化を窺う資料が多数出土している。

縄文時代晩期の遺跡には、本川原遺跡、平原遺跡、安永田遺跡がある。本川原遺跡からは黒川式期の貯蔵穴２基が、安永田遺跡からは土器棺墓１基が検出されている。平原遺跡では、包含層（泥炭層）から黒川式土器がまとまって出土している。村田三本松遺跡では、夜臼式の土器棺墓７基が検出され、弥生時代前期にかけて継続して営まれている。

弥生時代

鳥栖地域の特色である弥生時代の遺跡も、前期に限ると数は少ない。集落遺跡には、八ツ並金丸遺跡と今回報告する幸津遺跡がある。八ツ並金丸遺跡は、標高約56ｍの丘陵頂部に位置する。前期後半段階に径約20ｍの環濠



第３図　鳥栖市遺跡配置図（1/50000）

①安永田遺跡②柚比本村遺跡③牛原前田遺跡④本川原遺跡⑤本行遺跡⑥今町共同山遺跡⑦西田遺跡⑧長ノ原遺跡⑨岸田南遺跡⑩平原遺跡⑪蔵上遺跡⑫村田三本松遺跡⑬永吉遺跡⑭八ツ並金丸遺跡⑮幸津遺跡⑯梅坂炭化米遺跡⑰大久保遺跡⑱前田遺跡⑲姫方遺跡㉑元古賀遺跡㉑平町遺跡㉒原口遺跡㉓京町遺跡㉔柚比梅坂遺跡㉕フケ遺跡㉖今町梅坂西遺跡㉗神山遺跡㉘田代天満宮遺跡㉙藤木遺跡㉚四ツ木遺跡㉛桑ノ木添遺跡㉜内精遺跡㉝牛原原田遺跡㉞内畑遺跡㉟赤坂前方後円墳㊱平原古墳㊲日岸田遺跡㊳山浦古墳㊴薄尾古墳群㊵ＢＳ自転車工場遺跡（現安良遺跡）㊶三ヶ敷梅坂遺跡㊷加藤田遺跡㊸薮田遺跡㊹剣塚古墳㊺庚申堂塚古墳㊻岡寺古墳㊼田代太田古墳㊽ヒャーガンサン古墳㊾梅坂古墳群㊿稲塚古墳(51)百度塚古墳(52)永田古墳群(53)東十郎古墳群(54)杓子ヶ峰古墳群(55)神山古墳群(56)横井古墳群(57)都谷古墳群(58)宮西遺跡(59)山浦新田遺跡(60)勝尾城筑紫氏遺跡(61)田代番所（対馬藩領）(62)轟木番所（佐賀本藩領）(63)幸津霞堤（鳥栖市）

がつくられ、環壕内部には竪穴住居跡１棟、貯蔵穴４基が存在する。幸津遺跡は、前期後半段階に掘削された環濠の一部であるが、環濠の内部は不明な点が多い。村田三本松遺跡の北側でも前期後半の環濠とみられる溝の一部が検出されているが、詳細は明らかでない。

前期の墳墓には、村田三本松遺跡、八ツ並金丸遺跡、永吉遺跡等がある。村田三本松遺跡は、縄文時代晩期から継続して営まれる墳墓である。八ツ並金丸遺跡では、ＡからＥと分けられた５ヶ所の墓域が営まれるが、墓域Ａは前期後半段階（板付Ⅱa式併行期）の甕棺及び木棺墓、土壙墓で構成される。永吉遺跡では、土壙墓と推定される墳墓から、有柄磨製石剣と伴に丹塗りの壺が出土している。

前期末から中期にかけて、集落及び墳墓はその数を大幅に増加させる。特に調査の進んだ柚比丘陵では、丘陵の単位ごとに集落や墳墓が見出せる。前期末から始まる集落は、今町岸田遺跡、梅坂炭化米遺跡、大久保遺跡、平原遺跡、柚比本村遺跡、前田遺跡、安永田遺跡、長ノ原遺跡等がある。これらの集落は、平原遺跡を除き、概ね後期初頭段階で途絶える。前期末から中期初頭段階の竪穴住居は、平面形が円形を主体とし、中央の炉穴の両側に２穴を持つ「松菊里式」の竪穴住居が多くみられるが、平面形が方形基調の竪穴住居も散見される。平原遺跡は、中期後葉段階に丘陵頂部を取り囲むように環濠を巡らす。この環濠の規模は最大幅3.5m、深さ1.4m、環濠内部の面積は、7,700㎡である。埋没は後期終末頃である。

柚比丘陵以外では、大木川左岸丘陵先端部付近に本川原遺跡、姫方遺跡、本原遺跡等が、大木川と安良川に挟まれた萱方町から古賀町・養父町付近の扇状地および市街地部分の低位段丘にかけて、元古賀遺跡、平町遺跡、原口遺跡、京町遺跡等が営まれる。安良川左岸の朝日山南麓部では、幸津遺跡、村田三本松遺跡が、市域南西部の白壁丘陵上の本行遺跡では中期前半段階に集落が出現する。江島遺跡からも中期の竪穴住居跡３棟が検出されている。

中期の墳墓は、甕棺墓を主体とするが、一部木棺墓、土壙墓がみられる。柚比丘陵では、八ツ並金丸遺跡、柚比梅坂遺跡、柚比本村遺跡、安永田遺跡、大久保遺跡、平原遺跡、フケ遺跡、今町梅坂西遺跡、梅坂炭化米遺跡、前田遺跡、神山遺跡、田代天満宮遺跡等から中期の甕棺墓を主体とする墓地群が見つかり、これまでに柚比丘陵一帯で調査された甕棺の合計数は2,500基を超えている。他の市域では、墳墓の調査例は少ない。市街地の藤ノ木遺跡、内畑遺跡、朝日山南麓の安良遺跡や本行遺跡で甕棺を始めとする墳墓が検出されている。

弥生時代中期段階の特色として、柚比本村遺跡の副葬品を有する墳墓群と大型掘立柱建物跡の存在、安永田遺跡、本行遺跡にみられる青銅器生産が挙げられる。柚比本村遺跡の丘陵先端部には、弥生時代中期初頭から後期初頭にかけて営まれた木棺墓１基、甕棺墓41基、石蓋土坑墓２基の計44基が検出されている。そのうち、８基の墳墓から赤漆玉鉤装銅剣１、石製把頭飾・剣把金具付細形銅剣１、細形銅剣１、青銅製把頭飾付中細形銅剣２、中細形銅剣２、ガラス製勾玉１、鉄剣１が副葬されている。中期初頭のSP1100木棺墓を契機に墓域が形成され、中期中頃（須玖式段階）まで継続する。中期後半段階にこの墳墓群の西北側で大型掘立柱建物跡５棟が重複して営まれる。この柚比本村遺跡は、墳墓及び大型掘立柱建物、これに付随する祭祀土器を廃棄した土坑の存在から、柚比本村遺跡の墳墓に埋葬された有力者に対する祭り「祖霊祭祀」を行なっていた空間とみられる。

青銅器の鋳型が確認されている遺跡には、柚比丘陵に所在する安永田遺跡、平原遺跡、柚比本村遺跡、前田遺跡と市域南西部の本行遺跡がある。安永田遺跡は、福田型銅鐸の鋳型を出土したことで著名であるが、銅鐸鋳型以外にも中細形銅矛や中広形銅矛鋳型が出土している。また、平原遺跡・大久保遺跡や柚比本村遺跡から細形・中細形銅戈鋳型が出土している。前田遺跡の魚形青銅器鋳型は、焼けておらず、未使用の鋳型である。

本行遺跡からは、銅鐸を初め、銅剣、銅矛、ヤリガンナの鋳型等計12点の青銅器鋳型が出土している。この遺

跡から出土した武器形青銅器鋳型には、細形や中細形等型式的に古いものが多いことから、中期前半頃から青銅器生産が行われていたことを示す。

後期に入ると、柚比丘陵群を中心に展開していた集落が相次いで縮小し、市中央域の扇状地や市街地が乗る低位段丘の縁辺部にかけて進出する。柚比丘陵群の平原遺跡は、後期を通じ営まれる。長ノ原遺跡の後期後半の竪穴住居跡からは、方格規矩鏡片が出土している。

市域東側にある本原遺跡は、舌状に形成された標高約24mの低位段丘の先端部に位置する。この丘陵先端を切り離す形で丘陵基部に条壕を巡らす。丘陵の先端には、後期前半頃の竪穴住居跡6棟、掘立柱建物跡1棟等がつくられる。条壕と集落は、ほぼ同時期と推定される。大木川上流域左岸の扇状地上に位置する加藤田遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡16棟が調査されている。加藤田遺跡から約500m南に下った位置にある藪田遺跡からは、弥生時代終末期頃の竪穴住居跡7棟が検出されている。藤木遺跡は、後期前半から古墳時代初頭頃環壕が検出される。検出された環壕の総延長は160mを超える。藤木遺跡と谷を挟んだ東側に位置する四ツ木遺跡からも弥生時代後期の環壕の一部とみられる溝跡1条が検出されている。

蔵上遺跡（Ⅰ区）・桑ノ木添遺跡・内精遺跡は、いずれも隣接する地区で、場所により異なる遺跡名が付けられているが、同一の遺跡である。この遺跡は安良川中流域の段丘上に位置し、弥生時代後期前半から後期終末にかけての竪穴住居跡234棟、掘立柱建物跡59棟が検出されているほか、集落からは、鉄斧、ヤリガンナ、鉄鏃、刀子、摘鎌、鋤先等62点出土しており、安良川中流域の拠点集落であると推定される。ただ、大規模な集落にも関らず環壕は有しない。

安良川右岸の扇状地上に位置する牛原原田遺跡（B地区）では、後期後半から終末期にかけての竪穴住居跡33棟、掘立柱建物跡65棟が検出されている。竪穴住居は、平面形が方形または長方形を主体とし、ベッド状遺構を持つものが多い。1間×1間または1間×2間の柱間を持つ掘立柱建物跡がその主体を占める。また、SH25竪穴住居跡の覆土中から刃部が外側に張り出す鋳造鉄斧1点が出土している。先述した白壁丘陵西側段丘上に位置する本行遺跡は、後期前半頃、丘陵の頂部を囲むように環濠が掘削される。環濠の外側に刃部をたてた状態で中広形銅矛1口が埋納されていた。

後期の墳墓は、中期と比べると、その数は著しく減少する。柚比本村遺跡では、中期後半以降中断していた甕棺埋葬が再開され、鉄剣、ガラス製勾玉を副葬する後期初頭の甕棺1基がつくられる。この墳墓を最後に柚比本村遺跡での造墓は終了する。内畑遺跡では、後期初頭のSJ07甕棺内から鉄刀子1点、水晶製丸玉2点、ガラス製小玉16点が出土した。刀子は、黒漆が塗られた鞘に入れられ、柄には、樹皮が巻かれている。甕棺の副葬品として水晶玉を出土することは極めて珍しい。また、調査ではないが、ガラス勾玉2点とガラス小玉1969点を出土したといわれる甕棺も近傍から見つかっている。藤木遺跡から棺内に連弧文鏡1面を副葬した石蓋土壙墓1基が検出されている。本行遺跡では、後期後半から終末頃の石棺墓と石蓋土壙墓10基からなる墓域が環壕の外側に形成される。

後期の特色として環壕集落が挙げられる。中期後半に掘削された平原遺跡を除き、藤木遺跡、四ツ木遺跡、本行遺跡の環壕は、後期前半段階に出現したとみられる。特に、藤木遺跡の環壕は、その長径が約200mに復元でき、鳥栖地域の拠点集落と考えられる。ただ、環壕を持たない大規模な集落跡である内精遺跡も近隣に存在し、集落跡における環壕の有無がどのような性格によるものか、さらに検討を必要とする。

古墳時代から古代

古墳時代前期に入ると、集落の数はさらに減少する。柚比遺跡群では、集落が確認できなくなり、内精遺跡や

藤木遺跡、本川原遺跡等で弥生時代後期から続く集落が営まれ、古墳時代初頭に終焉を迎える。幸津遺跡で高杯の埋納遺構３基がみつかっているが、竪穴住居跡など集落の要素は少ない。鳥栖市域での古墳時代前期段階の集落様相については、不明な点が多い。

古墳時代前期の墳墓は少ない。柚比丘陵の南東端にあたる丘陵部で赤坂前方後方墳が築かれる。この前方後方墳は全長約24mと推定され、墳裾から畿内系の二重口縁壺等がみつかり、鳥栖市域ではもっとも古い古墳である。本川原遺跡では、布留式併行期の方形周溝墓２基が調査され、そのうち１号方形周溝墓は、全長15mで東側に陸橋部を持つ。周溝内から二重口縁壺が検出されている。

平原古墳は柚比丘陵の南部、独立丘陵の頂部に位置する。昭和31年に地元中学校のクラブにより調査され、前方後円形の墳形を持つことや内部主体が箱式石棺であること、過去に内部主体から鉄剣が出土したことが判明していた。北部丘陵新都市事業に伴い再度調査が実施されたが、本来の墳形や詳細な築造時期などは明らかになっていない。内部主体の構造から古墳時代前期の所産と推定される。

大木川左岸の河岸段丘上に位置する日岸田遺跡からは、方形周溝墓１基を検出している。ST002方形周溝墓は、平面方形で、周溝は全周する。一辺の規模が約22.5～24mと比較的規模の大きい方形周溝墓である。主体部は検出されていないが、周溝埋土から山陰系の二重口縁壺や小型器台が出土している。

古墳時代中期は、集落の実態が不明である。墳墓は副葬品が少ないため、時期を特定することは難しいが、主体部の構造から前期末から中期と推定される墳墓が散見される。

朝日山から所熊山の山麓部にかけ竪穴系石室を主体部に持つ古墳が点在する。山浦古墳群では、竪穴式石室と粘土槨を内部主体に持つ古墳が調査されている。内訳は粘土槨２基、竪穴式石室３基。９号竪穴式石室は、臼玉315点を出土し、中期と推定される。４号粘土槨には、鉄剣１口が副葬されている。山浦古墳群の東側の丘陵部に位置する薄尾古墳群では、２体を合葬した小口積みの竪穴式石室があることから当該期の古墳群であったと推定される。ＢＳ朝日自転車工場遺跡（現安良遺跡）の北遺跡では、箱式石棺３基が出土し、１号石棺から鉄刀１口、鉄剣２口、副葬されていた。付近から倣製鏡１面が採集されており、古墳の副葬品とみられる。

古墳時代後期に入ると集落及び墳墓が激増する。５世紀代にはほとんど目立たなかった集落が、柚比丘陵を中心に市内各所で確認される。柚比丘陵遺跡では、平原遺跡、大久保遺跡を核に三ヶ敷梅坂遺跡、梅坂炭化米遺跡、今町梅坂遺跡、前田遺跡、安永田遺跡、本川原遺跡等で集落が営まれる。特に、247棟の竪穴住居が確認された平原遺跡は、大規模な集落である。大木川流域左岸では、加藤田遺跡、薮田遺跡等がある。安良川左岸の河岸段丘及び扇状地上にも集落が展開する。牛原前田遺跡、牛原原田遺跡、蔵上遺跡、内精遺跡がある。これらの集落は、後述する牛原原田グループの古墳群を担う集落であったと推定される。

墳墓では、大木川左岸の高位段丘上に剣塚古墳、庚申堂塚古墳、岡寺古墳と全長60mを超える前方後円墳が、相次いで造営される。また、石室に彩色を施す田代太田彩色古墳やヒャーガンサン古墳、梅坂古墳等の大型の円墳が築かれる。首長墓と推測されるこれら大型の前方後円墳・円墳は、その立地から柚比丘陵群の各集落と密接な関係があるものと想定される。このグループとは別に安良川左岸の扇状地上に大型の円墳である稲塚古墳、牛原原田５号墳、同６号墳、方墳である百度塚古墳が６世紀後半から７世紀前半にかけ順次築造される。

杓子ヶ峰から権現山、雲野尾峠にかけての山麓部には、横穴式石室を内部主体に持つ中小の群集墳がいくつかのグループに分れて点在する。これまで調査が実施された古墳群は、柚比丘陵群から大木川左岸の山麓部にかけての地域では、永田古墳群や梅坂古墳群、東十郎古墳群、杓子ヶ峰古墳群、神山古墳群がある。大木川右岸から安良川左岸までの山麓部には、横井古墳群、都谷古墳群、宮西遺跡等、安良川右岸から山浦の山麓部にかけて山

浦新田遺跡や山浦古墳群等がある。これまでの調査から鳥栖市域の群集墳の成立は6世紀後半頃、その終焉は、東十郎古墳群の小石室に埋納された蔵骨器の年代から8世紀前半と理解される。

律令期に入ると大木川を境に左岸が基肄郡、右岸は養父郡に分かれる。奈良時代に編纂された『肥前風土記』の基肄郡の条には、郷6ヶ所、里17ヶ所、馬家1ヶ所、城1ヶ所と記されている。「城」は、基山町の朝鮮式山城である基肄城を示す。郷の記載は、姫社郷のみで、「長岡神社」と「酒殿泉」は、伝承が記される。基肄郡に関する遺跡のひとつに八ツ並金丸遺跡がある。7棟の掘立柱建物と奈良時代前期の竪穴住居27棟が確認されている。この遺跡では、2×5間の掘立柱建物3棟が南北方向に棟を揃え配置される。この建物群の南に東西方向に主軸を持つ2×4間の掘立柱建物1棟があり、これらの建物群は溝で囲まれる。この掘立柱建物跡群は、官衙関連遺構と推定されるが、基肄郡衙とするには規模が小さく、その性格は不明である。

養父郡の条には、郷4ヶ所、里12ヶ所、烽1ヶ所が記される。烽は、幸津遺跡北方の朝日山に比定される。郷は鳥巣郷、日理郷、狭山郷の3ヶ所が記載される。養父郡家の推定地とされる蔵上遺跡からは、奈良時代の掘立柱建物14棟、柵4条等のほか、「厨番」と墨書された土器が検出されている。ただ、建物配置には規則性がなく、調査地点は郡家の縁辺部とみられる。村田町三本松遺跡では、アパートの建替えに伴い掘立柱建物跡2棟が調査されている。桁行6間×梁行4間以上と推定される掘立柱建物跡は、一辺が22mを超えることから大型の掘立柱建物跡とみることができる。東西方向に延びる西海道推定路の南側に隣接することから、この付近に駅家か郷家が存在した可能性が強い。

平安時代から近世

平安時代の鳥栖地方には、菅原道真を奉った神社が多数創建され、大宰府に地理的に近い環境から大宰府天満宮安楽寺領荘園が数多く成立する。荘園公領制成立について十分な資料はないが、11～12世紀頃に成立したと考えられ、大宰府系（安楽寺）領・宇佐八幡宮系（弥勒寺）領・東屋神社領などの荘園は鎌倉時代以降も存続した。

鎌倉時代に入ると、文献上では土々呂木氏・藤木氏・山浦氏等の御家人地頭の名前が見え始め、それぞれ轟木町・藤木町・山浦町付近に館を構えた。藤木氏に関連する藤木遺跡では、鎌倉～戦国期の区画溝群から生活雑器と瓦が出土し、集落や寺院集落の存在が指摘される。室町～戦国時代には、京町遺跡で確認されるような豊富な貿易陶磁器を所有し、茶器や花器を持つ財力者の出現も見られる。調査区周辺に「ホンジン」の地名を残す柚比本村遺跡では、鎌倉～戦国時代の遺物が出土し、14世紀後半の「陣」跡の可能性も指摘されている。山城部の中央部には、二重掘切・横堀などの防御施設を用いており、16世紀代の段階で改修を受けたと考えられる。

国史跡勝尾城筑紫氏遺跡は、勝尾城・葛籠城などの山城群と筑紫氏館や家臣屋敷・寺院から構成される戦国大名筑紫氏の城下町である。勝尾城は、天正14（1586）年に落城しており、それ以前に構築された城下町の形成過程と筑紫氏の権力体制が発掘調査により徐々に解明されつつある。

江戸時代の鳥栖地方は、対馬藩・佐賀本藩・村田鍋島藩等に領有される。長崎街道沿いには田代番所（対馬藩領）・轟木番所（佐賀本藩領）等が設置され、周辺には町屋が立ち並び、宿場町が形成された。田代宿は、北から昌元寺町・新町・上町・下町・外町等で構成され、中央の上町に代官所が位置する。また、佐賀藩は街道整備と共に大規模な治水事業も行っており、田畑収入の安定と新田開発による財政基盤の底上げを目的にした水利施設・洪水防止施設は佐賀県内で至る所に見られる。千栗土居（みやき町）、横土井（多久市）、幸津霞堤（鳥栖市）などがその一例であり、発掘調査の結果、近世初期の土木工事技術を確認できる。

参考文献（順不同）

佐賀県教育委員会編2002「今町共同山遺跡」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

鳥栖市教育委員会編1998『西田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第56集

鳥栖市教育委員会編1994『牛原原田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第43集

佐賀県教育委員会編2002「岸田南遺跡」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

佐賀県教育委員会編2001「長ノ原遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

鳥栖市教育委員会編1996『牛原前田遺跡Ⅰ』鳥栖市文化財調査報告書第47集

鳥栖市教育委員会編1996『牛原前田遺跡Ⅱ』鳥栖市文化財調査報告書第48集

佐賀県教育委員会編1993『平原遺跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第119集

佐賀県教育委員会編1993『平原遺跡Ⅱ』佐賀県文化財調査報告書第120集

佐賀県教育委員会編2001「平原遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

鳥栖市教育委員会編2000『蔵上遺跡Ⅰ』鳥栖市文化財調査報告書第58集

鳥栖市教育委員会編2000『蔵上遺跡Ⅱ』鳥栖市文化財調査報告書第60集

鳥栖市教育委員会編2000『蔵上遺跡Ⅲ』鳥栖市文化財調査報告書第61集

佐賀県教育委員会編1974『本川原遺跡』佐賀県文化財調査報告書第26集

佐賀県教育委員会編1975『本川原遺跡－第２次調査－』佐賀県文化財調査報告書第32集

佐賀県教育委員会編1979『本川原遺跡－第３次調査－』佐賀県文化財調査報告書第49集

鳥栖市教育委員会編1980『柚比遺跡群範囲確認調査第３年次概要報告書－安永田遺跡の調査－』鳥栖市文化財調査報告書第７集

鳥栖市教育委員会編1983『安永田遺跡－柚比遺跡群範囲確認調査第３年次調査報告書－』鳥栖市文化財調査報告書第16集

鳥栖市教育委員会編1985『安永田遺跡－佐賀県鳥栖市に所在する安永田遺跡銅鐸鋳型出土地点の調査－』鳥栖市文化財調査報告書第25集

佐賀県教育委員会編2002「安永田遺跡」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

鳥栖市教育委員会編1983『村田・三本松遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第17集

佐賀県教育委員会編2003「八ツ並金丸遺跡」『柚比遺跡群３』佐賀剣文化財調査報告書第155集

小田富士雄1959「佐賀県田代発見の石剣と土器」『九州考古学』７・８

佐賀県教育委員会編2002「今町岸田遺跡」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

佐賀県教育委員会編2001「梅坂炭化米遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

佐賀県教育委員会編1997『大久保遺跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第131集

佐賀県教育委員会編1998『大久保遺跡Ⅱ』佐賀県文化財調査報告書第137集

佐賀県教育委員会編2001「大久保米遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

佐賀県教育委員会編2003「柚比本村遺跡」『柚比遺跡群３』佐賀剣文化財調査報告書第155集

佐賀県教育委員会編2002「前田遺跡」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

佐賀県教育委員会編2001「長ノ原遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

鳥栖市教育委員会1979『長ノ原遺跡調査概報』鳥栖市文化財調査報告書第5集

湯浅　満暢「江島遺跡」『佐賀県文化財年報３　1998年度』2001

佐賀県教育委員会編2002「柚比梅坂遺跡」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

鳥栖市教育委員会編1992『元古賀遺跡Ⅱ』鳥栖市文化財調査報告書第42集

鳥栖市教育委員会編1997『京町遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第54集

鳥栖市教育委員会編1997『本行遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第51集

鳥栖市教育委員会編1984『フケ遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第20集

佐賀県教育委員会編2001「今町梅坂西遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

鳥栖市教育委員会編2003『フケ遺跡・神山遺跡・内畑遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第70集

佐賀県教育委員会編1973『田代天満宮東方遺跡』佐賀県文化財調査報告書第24集

鳥栖市教育委員会編2002『藤木・今泉遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第68集

久山高史1994「鳥栖市内畑遺跡甕棺墓出土のガラス製頸飾」『佐賀考古』１

鳥栖市教育委員会編2001『加藤田遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第64集

湯浅　満暢2001「四ツ木遺跡」『佐賀県文化財年報６　1999年度』

鳥栖市教育委員会編2000『内精遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第59集

藤瀬禎博1988「赤坂古墳」『定型化する古墳以前の墓制』埋蔵文化財研究会

佐賀県教育委員会編2001「三ヶ敷梅坂遺跡」『柚比遺跡群１』佐賀県文化財調査報告書第148集

佐賀県教育委員会編1991「日岸田遺跡」『都谷遺跡』佐賀県文化財調査報告書第104集

佐賀県教育委員会編1973『鳥栖市山浦古墳群』佐賀県文化財調査報告書第21集

松尾 禎作1958「薄尾古墳群について」『鳥栖史談』第２号　鳥栖史談会

七田 忠志・松尾禎作1949「BS旭自転車工場遺跡」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第８輯　佐賀県教育委員会

鳥栖市教育委員会編1984『岡寺前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第21集

鳥栖市教育委員会編1984『剣塚前方後円墳』鳥栖市文化財調査報告書第22集

佐賀県立博物館編1978『庚申堂塚調査報告書』佐賀県立博物館調査研究書第４集

鳥栖市教育委員会編1976『田代太田古墳調査及び保存工事報告書』

佐賀県教育委員会編2002「永田古墳群（附梅坂古墳）」『柚比遺跡群２』佐賀県文化財調査報告書第150集

鳥栖市教育委員会編2001『永田古墳群』鳥栖市文化財調査報告書第66集

鳥栖市教育委員会編1986『梅坂古墳群』鳥栖市文化財調査報告書第27集

佐賀県教育委員会編1966『東十郎古墳群』

鳥栖市教育委員会編2004『横井古墳群』鳥栖市文化財調査報告書第72集

佐賀県教育委員会編1991「都谷遺跡」『都谷遺跡』佐賀県文化財調査報告書第104集

佐賀県教育委員会編1991「宮西遺跡」『都谷遺跡』佐賀県文化財調査報告書第104集

佐賀県教育委員会編1991「山浦新田遺跡」『都谷遺跡』佐賀県文化財調査報告書第104集

鳥栖市教育委員会編1999『勝尾城下町遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第57集

鳥栖市教育委員会編2005『幸津霞堤』鳥栖市文化財調査報告書第75集

鳥栖市誌編纂委員会編『鳥栖市誌　第２巻－原始・古代編－』2005

第３章　調査の概要

Ⅰ　遺跡の概要

鳥栖市幸津町に所在する幸津遺跡は、朝日山の南麓に展開する低位段丘の縁辺部に位置する。遺跡の東側は、久留米方面から北上するＪＲ鹿児島本線が北西に方向を変える地点にあたる。このＪＲ鹿児島本線は、幸津遺跡の南側で「霞堤」を斜めに横切る。

「霞堤」は、遺跡の東側を蛇行しながら南流する安良川に沿って設けられた堤防である。安良川は、古くから暴れ川と知られ、川に沿った本堤のほか、一定の間隔を開けて、副提（二線堤）がつくられている。この「霞堤」は、安良側上流に設けられた「幸津井樋」と伴に佐賀藩士成富兵庫茂安によって築堤したと伝えられている堤防で、近世初期につくられたものとされる。

霞堤の副提は、幸津遺跡の丘陵東側に取り付く形で始まり、間隔を開けながら本堤に並行するように走り、安良川をまたぐ半平橋の南西側で本堤と合流する。その長さは約600m、高さ約５m、幅約15～30mである。本堤と副提の間は、「堤内地」と呼ばれ、普段は耕作地に利用されているが、本堤が決壊した際には、遊水地となる。

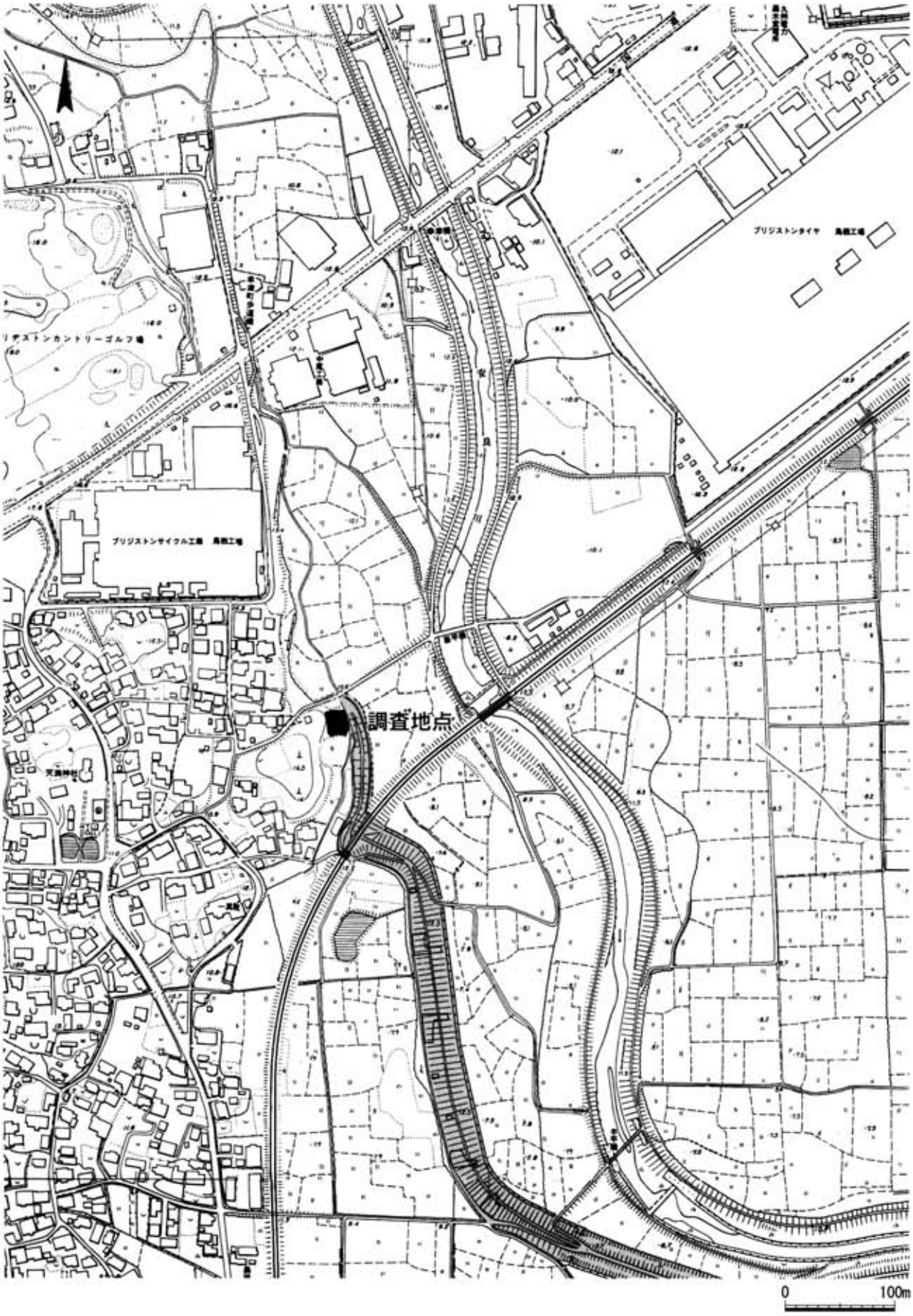
ＪＲ鹿児島本線より南側の副提は、平成15年度に鳥栖市教育委員会が発掘調査を実施している。調査では、江戸期から現代までの５次に渡る築堤の過程が明らかになった。第一次の築堤は、近世初期の築造とみられる。第２次は18世紀前半頃、第３次は19世紀前半頃、第４次は昭和28年の「28水害直後」、第５次は近年である。副提は当初、幅10m、高さ2.5mの規模であったが、順次東側に拡張し現在の規模になる。また、堤防のり先の基底部には、木杭や竹杭が打たれていたことも判明した。

幸津遺跡周辺では、古くから集落が存在したせいか、これまで発掘調査は活発に行なわれてこなかった。近隣では、昭和24年に遺跡の北西約400mに位置するBS旭自転車工場遺跡（現安良遺跡）から弥生時代中期頃の土器や甕棺墓、古墳時代前期と推定される石棺墓が調査されている程度であった。近年、個人住宅や集合住宅の建設に伴い小規模な調査が増加した。

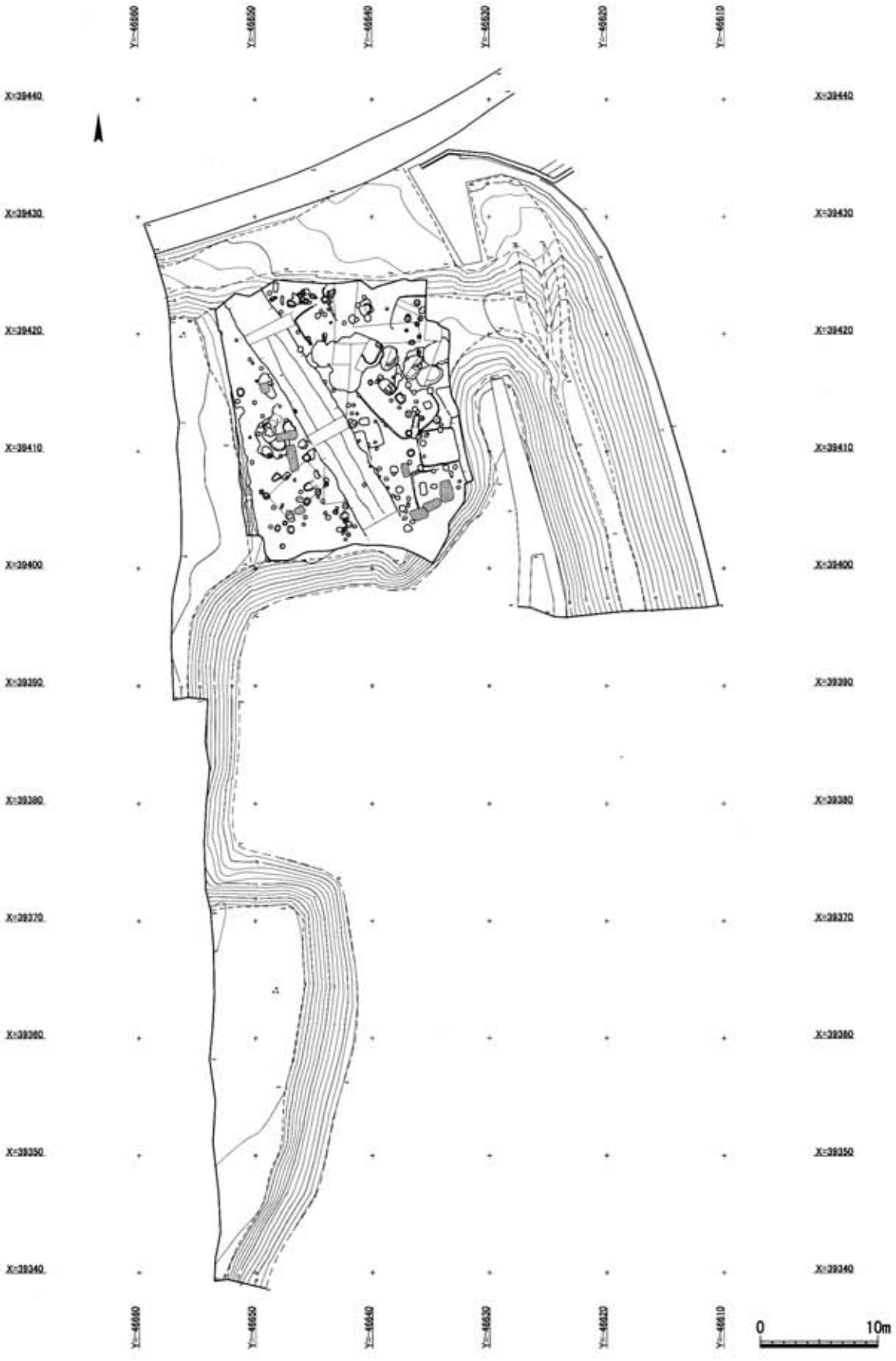
平成７年の安良遺跡の調査では、弥生時代中期の甕棺墓30基、土壙墓１基、石棺墓２基を始め、丹塗土器を持つ祭祀土坑１基が検出されている。この安良遺跡は、その位置から昭和24年調査のBS旭自転車遺跡の北遺跡付近とみられる。幸津遺跡の西１kmに位置する三本松遺跡からは、弥生時代中期の竪穴　　棟、土坑６基のほか、古代の掘立柱建物跡３棟がみつかっている。このうち、掘立柱建物跡１棟は、桁行５間（22m）×梁行４間（11m）以上の規模を持つ大型の建物である。遺跡の北側を通る旧長崎街道が肥前西海道の一部に比定されており、これらの建物群が官衙関連施設であった可能性が強い。

遺跡の現況は、荒撫地で竹林であった。調査地点で近現代の骨壷も見つかっており、一時期墓地として利用されていたことが分かる。丘陵を越えた西側には、市街地が広範囲に広がる。古地図にも集落が記されており、幸津町付近一帯は、古くから集落が営まれていた場所である。

調査地点は、標高約10mの低丘陵の東側斜面地である。調査地点の西側は、霞堤が接しており、その盛土の一部が調査地点にも及ぶ。霞堤と調査区の間には、暗渠があり、南側へ水路が流れる。調査地点の南側を大きく抉る形で水田が位置する。後述する弥生の環濠がこの水田に向けて延びており、本来の地形は、丘陵の縁辺部が連続して続いていたものとみられる。遺跡の西側は、標高約14mの小高い丘になり、頂上部はやや広い平坦面を持つ。この付近は、環濠の内部にあたり、遺跡の存在が予想される地点である。



第４図　幸津遺跡調査位置図（1/50000）



第５図　幸津遺跡調査区地形図（1/500）

Ⅱ　出土遺構の内容

(1)　弥生時代の遺構

SD01環濠（第７図）

SD01環濠は、調査区の北西から南東にかけて、わずかに弧を描きながら延びる環濠の一部である。環濠の長さは23.0m以上、幅3.3～3.6m、検出面からの深さは、1.6～1.8mである。溝の断面形は場所によって異なるが、逆台形もしくは、丸底である。

溝の埋土は、主として上、中、下層の３層に分けられ、各層はそれぞれ細分できる。調査区北側のＡトレンチ付近では、上層の上に包含層が厚く堆積している。下層では、粘土層と砂層が交互に堆積しており、水が流れていた可能性が高い。

溝からは、弥生時代前期を中心とする土器や石器が多数出土している。各層ごとの遺物であるが、下層、上層が少量であるのに対し、中層がもっとも多く出土している。

下層から出土する土器は、板付Ⅱa式～Ⅱb式、中層の土器は板付Ⅱb式～前期末（板付Ⅱc式併行期）、上層は、Ⅱb式から城ノ越式で、一部須玖式土器が混入する。これらのことから、環濠の掘削時期は弥生時代前期後半、埋没時期は弥生時代中期初頭から前半頃と推定される。

SH07竪穴住居跡（第８図）

調査区の東側中央部付近に位置するSH07竪穴住居跡は、平面形が隅丸長方形をし、住居の長軸方向に２本柱の柱穴を持つ。住居の北側をSX11に、北東側をSX12、13、14に切られる。

住居の規模は、長軸方向約6.6m、短軸方向約4.6m。検出面からの壁高は、0.18～0.2m。中央に方形の炉穴を持つ。炉穴の埋土には、焼土及び炭化物が認められる。炉の周囲にも焼土が広がる。出土している土器は少量だが、その形態的特長から弥生時代後期前半と推定される。

(2)　古墳時代以降の遺構

SH05竪穴住居跡（第９図）

調査区南東部、SH06竪穴住居跡の南側に位置するSH05竪穴住居跡は、平面形が隅丸方形である。住居の南側及び東側を近世墓とみられる土坑に切られるが、その遺存状況から一辺が約3.2m程度の規模を持つと推定される。中央に浅い炉穴を持つが、柱穴は不明。出土した土器から、古墳時代前期と推定される。

SH08竪穴住居跡（第９図）

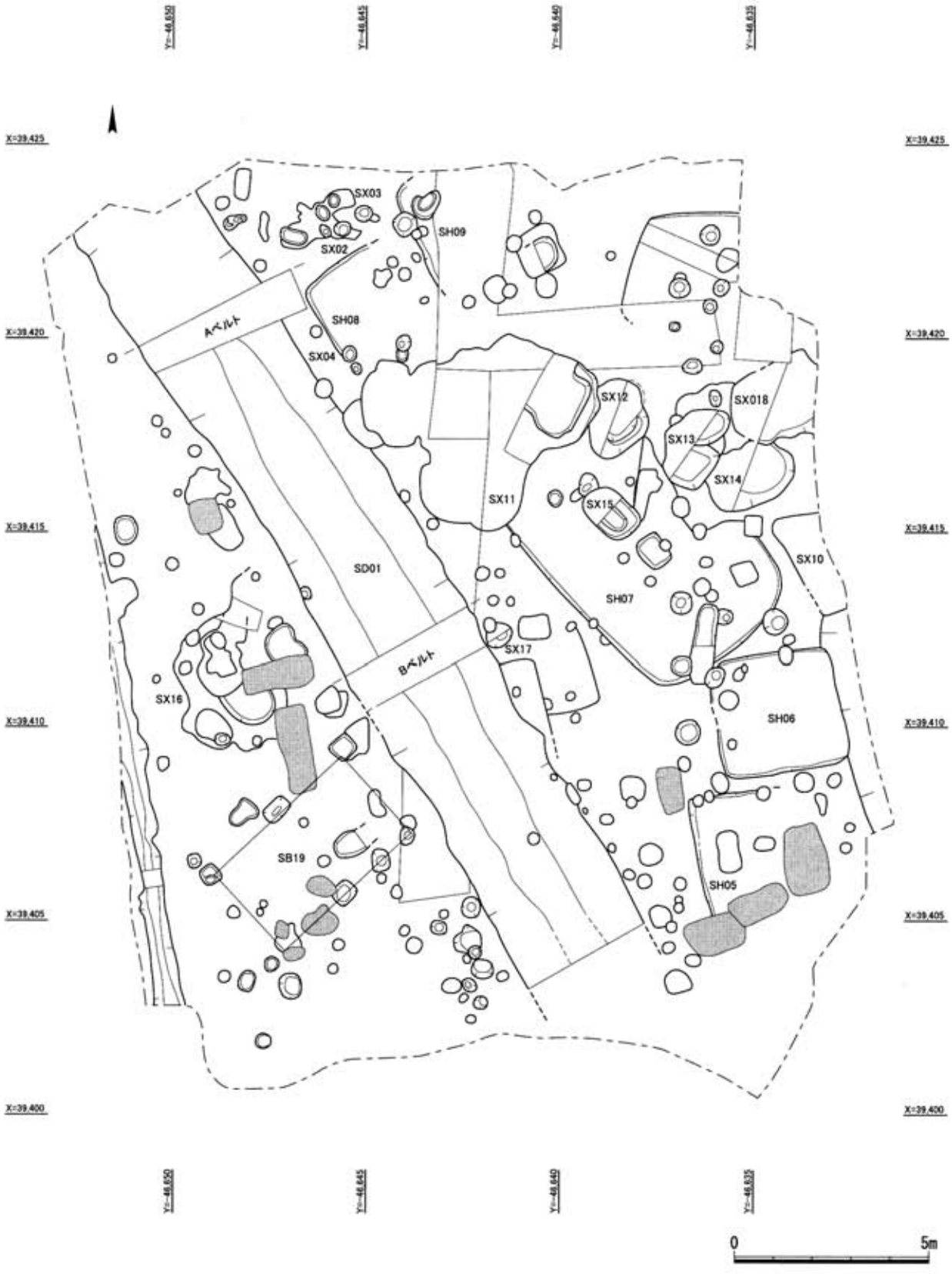
調査区北側に位置するSH08竪穴住居跡は、壁の立上がりは、すべて削平され、一部残存する壁周溝と床の痕跡により、竪穴住居として認定。住居の平面形は隅丸方形で、１辺が2.2mを超えるが、正確な規模は不明。竪穴内部には性格不明土坑、ピットが認められる。また、住居に伴う柱穴は検出されていない。

出土土器がなく、所属時期は不明だが、古墳時代前期のSX04埋納土坑に切られるため、古墳時代前期以前の竪穴住居跡と推定される。

SH09竪穴住居跡（第10図）

SH08竪穴住居跡の東側に位置する。壁の立上がりはすべて削平されているが、壁周溝と床の痕跡から竪穴住居跡として認定。住居の平面形は、隅丸方形で、壁に沿って周溝を巡らす。正確な規模は不明だが、一辺が２mを超える竪穴住居跡と推定される。

遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、SH08竪穴住居跡とその形状がよく似ており、SH08竪穴住居跡とほぼ、同時期の古墳時代前期と推定される。



※アミはカクラン

第6図　幸津遺跡遺構配置図 (1/150)

SH06竪穴住居跡（第10図）

調査区中央東側、SH07竪穴住居跡の南東側に位置する。東側の壁の立ち上がりが失われているものの、ほぼ完存する竪穴住居である。竪穴住居の平面形は、隅丸方形で一辺が約3.0～3.2m。西壁中央付近に焼土があり、竈の痕跡と見られる。住居に伴う明確な柱穴は認められない。

出土した土器には、鉢、甕があるが、その所属時期は、古墳時代中期末から後期頃と推定される。

SX02土器埋納土坑（第11図）

調査区北側、SH08竪穴住居跡の北側に位置する。平面形が不整形をした土坑である。長軸方向の長さ約0.3㎝、検出面からの深さ約0.2mである。土坑の底部に高杯の杯部３点が重ねられ埋納されている。

SX03土器埋納土坑（第11図）

調査区北側、SX02の北西0.7mのところに位置する。平面形が円形をした土坑である。径0.26m、検出面からの深さ0.22m。土坑底部に高杯の杯部２点が重ねられ埋納されている。

SX04土器埋納土坑（第11図）

調査区北側、SH08竪穴住居跡とSD01環壕の間に位置する。平面形が円形をした土坑である。径0.25m、検出面からの深さ0.1m。検出の段階で高杯杯部１点が口縁を上にして出土していることから、１点だけでなく、複数埋納されていた可能性もある。埋納された高杯は、土坑底部よりやや浮いた状態で出土している。

SX11土坑（第12図）

SD01環壕の西側に位置するSX11土坑は、大型の不整形をした土坑である。長軸の長さ（東西方向）6.05m、短軸の長さ5.05m、検出面からの深さ0.7～1.1mである。大型の遺構のため、遺構の西側部分にトレンチを入れたところ、切り合いを持つ複数の土坑になることが判明した。確認できていない場所についても複数の土坑が切り合っているものと推定される。埋土は黒褐色土と明黄褐色（ローム）土の混合土。遺物は少量出土している。

SX12土坑（第13図）

調査区北西に位置するSX12土坑は、南北方向に主軸を持つ不整形の大型土坑である。西側をSX11土坑に切られる。長軸の長さ2.1m、短軸1.4m以上、検出面からの深さ0.8～1.0m。北側の壁が大きくオーバーハングしている。埋土の状況から一気に埋められたと推定される。遺物は出土していない。

SX13土坑（第13図）

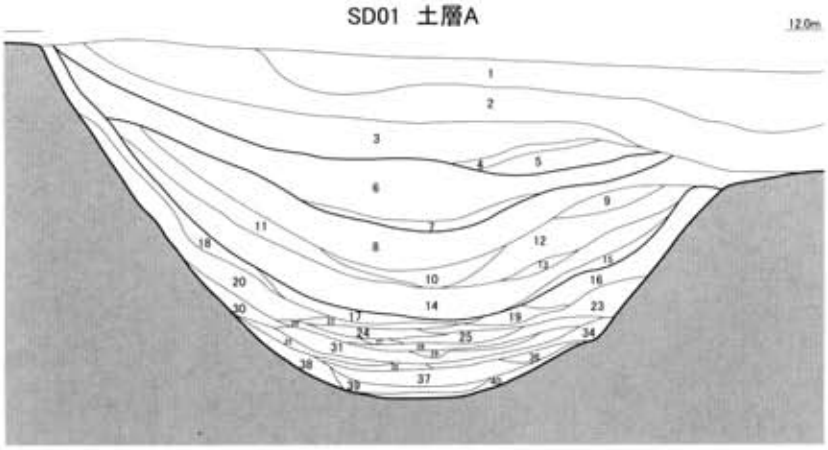
調査区北西に位置するSX13土坑は、南北方向に主軸を持つ不整形の大型土坑である。長軸の長さ2.3m、短軸の長さ（最大幅）1.5m、検出面からの深さ0.8m。本土坑は、検出時にはひとつの遺構と考えていたが、掘削の結果、重複した二つの土坑であることが判明した。埋土は、黒褐色土と明黄褐色（ローム）土の混合土。

SX14・18土坑（第14図）

調査区北西に位置するSX014土坑は、東西方向に主軸を持つ平面形が楕円となる土坑である。長軸の長さ2.3m、短軸の長さ1.5m、深さ0.6～0.8m。北西側をSX018土坑に切られる。埋土は、黒褐色土と明黄褐色（ローム）土の混合土。

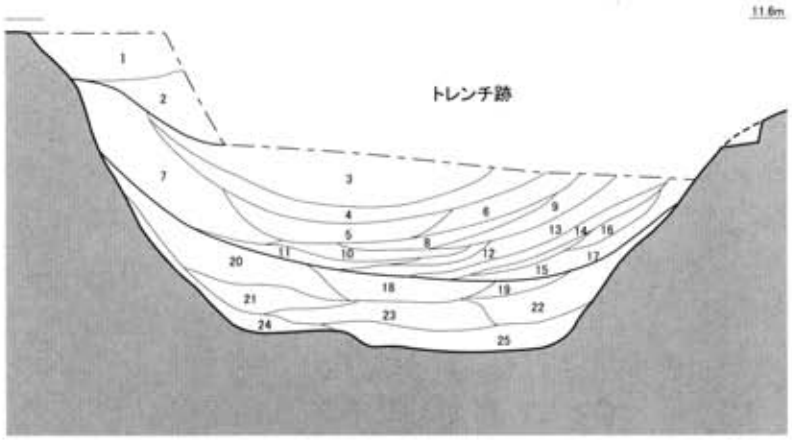
SX018土坑は調査区西端、SX12土坑の北側に位置する。東西方向に主軸を持つと推定されるが、一部が調査区外になる。長軸方向の長さ2.2m以上、短軸方向の長さ1.8m、検出面からの深さ0.8m以上。遺構の平面形がかなりいびつなため、複数の土坑が重複しているものと推定される。埋土は、黒褐色土と明黄褐色（ローム）土の混合土。

SD01 土層A



1:上部	にぶい褐色土	16:下層	灰褐色土	31:下層	褐灰色粘質土
2:包含層	灰褐色土	17:	灰褐色粘質土	32:	黒褐色粘質土
3:	灰褐色土	18:	灰褐色土	33:	にぶい褐色砂質土
4:	灰褐色土	19:	黒褐色土	34:	褐灰色粘質土
5:	灰褐色土	20:	灰褐色砂質土	35:	褐灰色粘質土
6:上層	灰褐色土	21:	褐灰色粘質土	36:	明褐灰色砂質土
7:	褐灰色土	22:	褐灰色砂質土	37:	褐灰色砂質土
8:中層	灰褐色土	23:	灰褐色土	38:	灰褐色砂質土
9:	にぶい褐色土	24:	褐灰色粘質土	39:	褐灰色粘質土
10:	にぶい褐色土	25:	黒褐色粘質土	40:	褐灰色砂質土
11:	にぶい黄橙色砂質土	26:	褐灰色砂質土		
12:	灰褐色土	27:	灰褐色砂質土		
13:	にぶい黄褐色砂質土	28:	黒褐色粘質土		
14:	灰褐色粘質土	29:	褐灰色砂質土		
15:	灰褐色土	30:	灰褐色土		

SD01 土層B

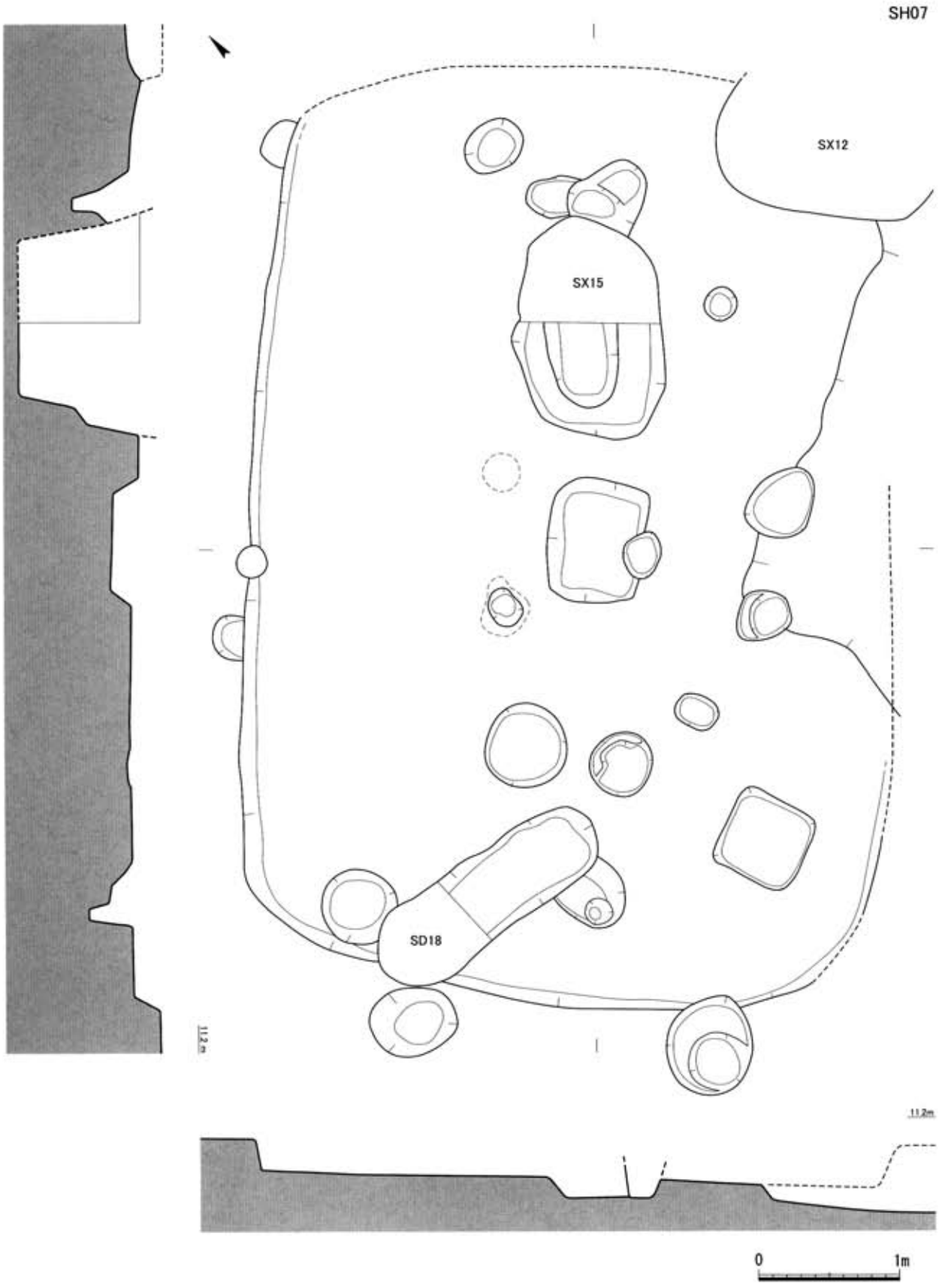


1:上層	黒褐色土	10:中層	灰褐色粘質土	19:下層	灰褐色土
2:	褐色土	11:	灰褐色粘質土	20:	灰褐色土
3:中層	灰褐色土	12:	灰褐色粘質土	21:	黒褐色土
4:	灰褐色土	13:	灰褐色粘質土	22:	灰褐色土
5:	灰褐色粘質土	14:	灰褐色粘質土	23:	褐灰色粘質土
6:	にぶい褐色土	15:	黒褐色土	24:	にぶい褐色土
7:	にぶい褐色土	16:	灰褐色土	25:	褐灰色粘質土
8:	にぶい褐色土	17:	灰褐色土		
9:	にぶい褐色土	18:下層	灰褐色粘質土		

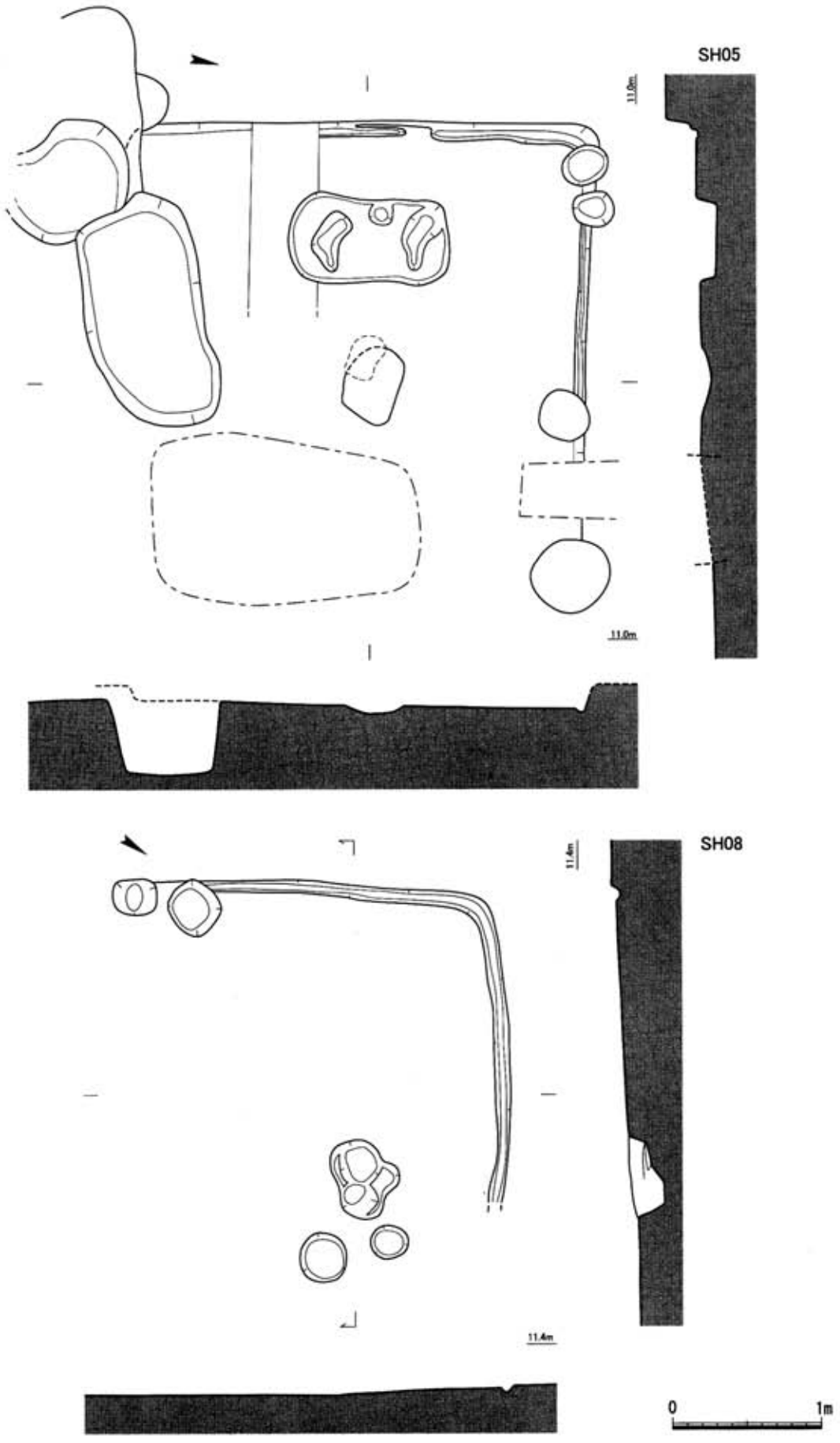
0 1m

※土層Bは、土層Aと方向を揃えるため、反転し、トレースしている。

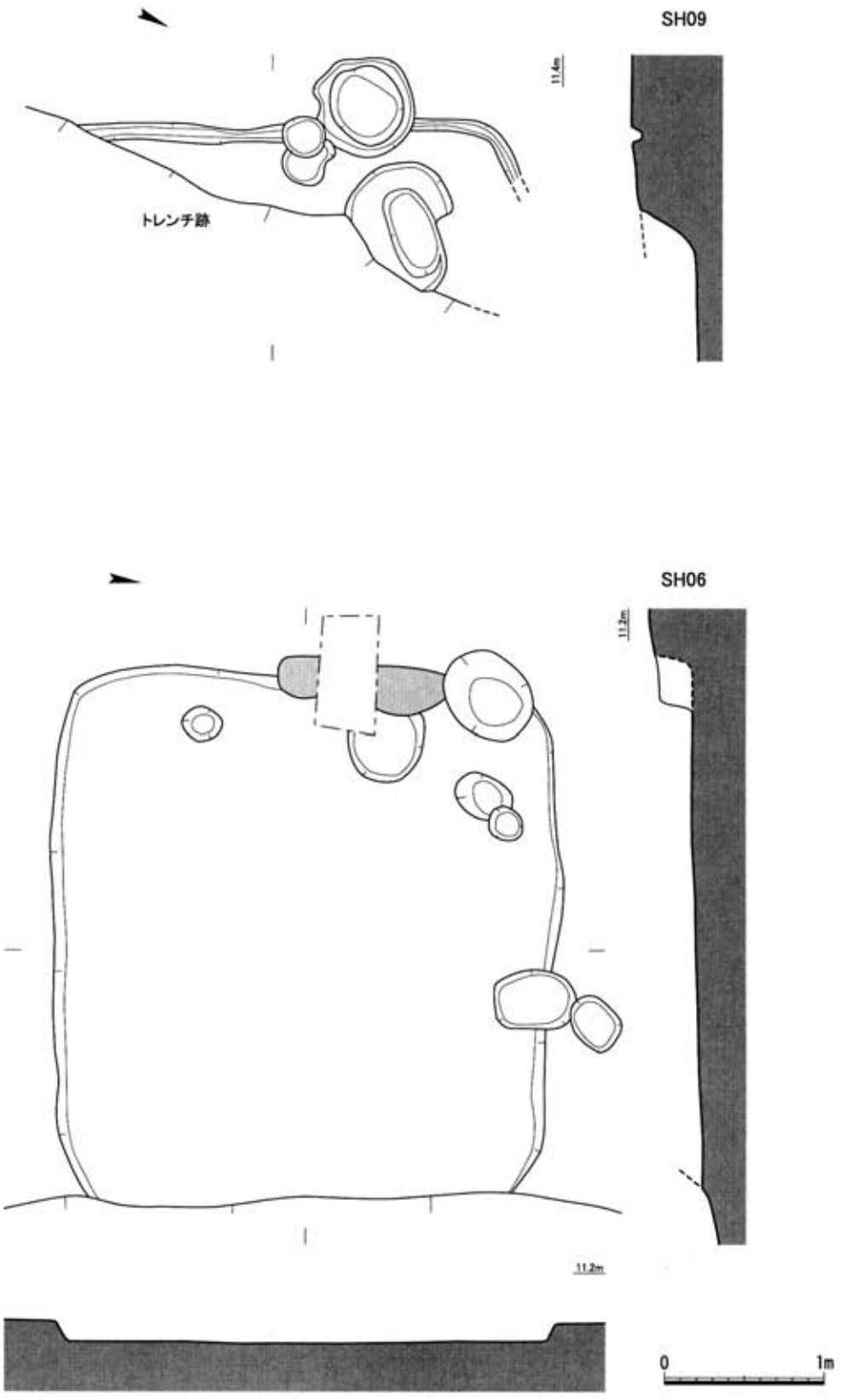
第7図　SD01環濠土層断面図（1/40）



第８図　SH07竪穴住居跡（1/40）



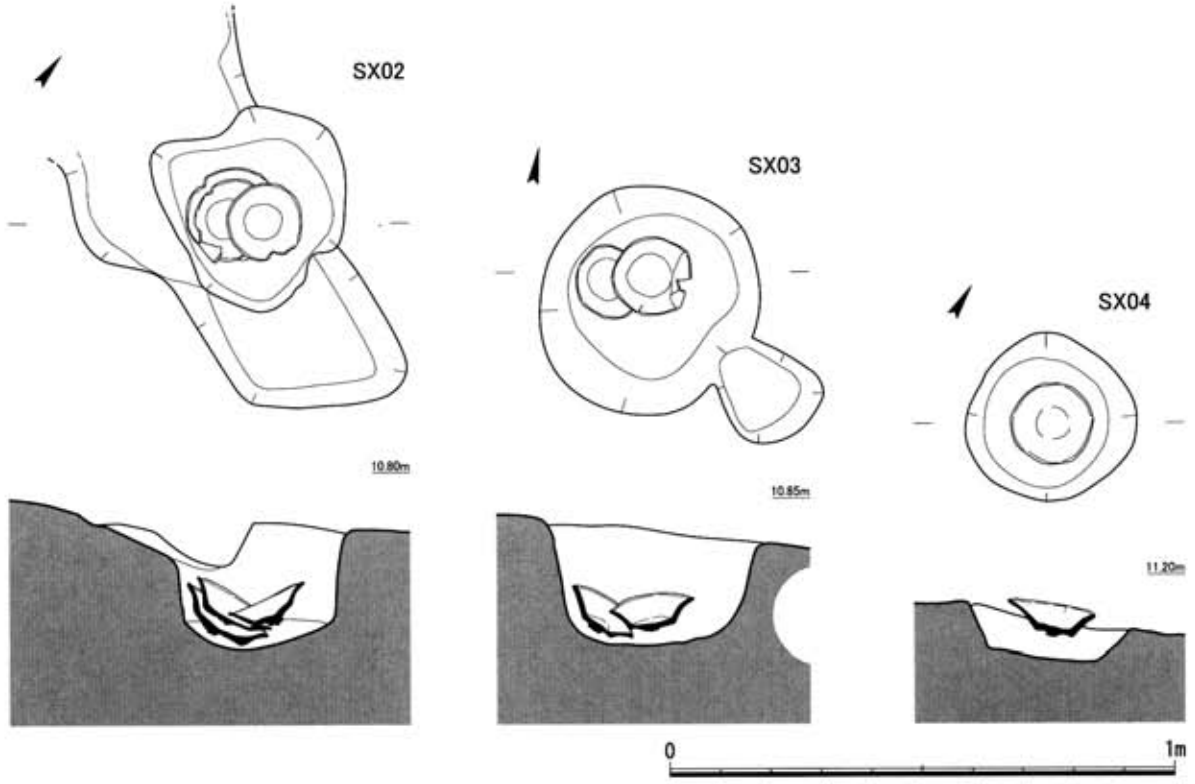
第9図　SH05・08竪穴住居跡（1/40）



第10図　SH09・06竪穴住居跡（1/40）

SB19掘立柱建物跡（第14図）

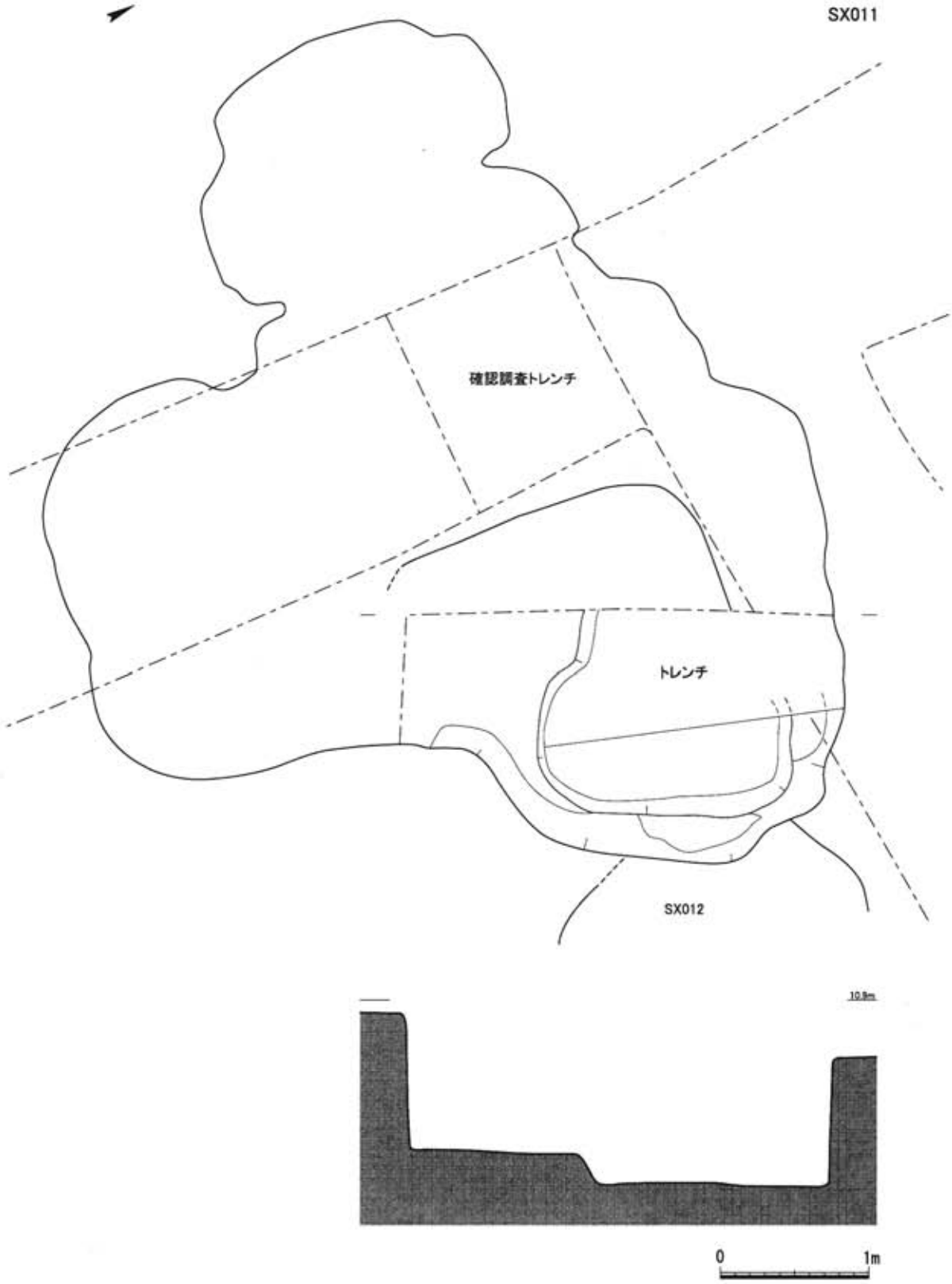
調査区南西に位置するSB19掘立柱建物跡は、梁行1間（2,84m）×桁行２間（4,5m）の規模を持つ。主軸は、N－45°－Wである。柱の掘り方は、平面形が隅丸方形または長方形で、一辺の長さが0.4～0.7m。検出面からの柱の深さは、0.4～0.7m。時期を特定できる遺物は出土していない。



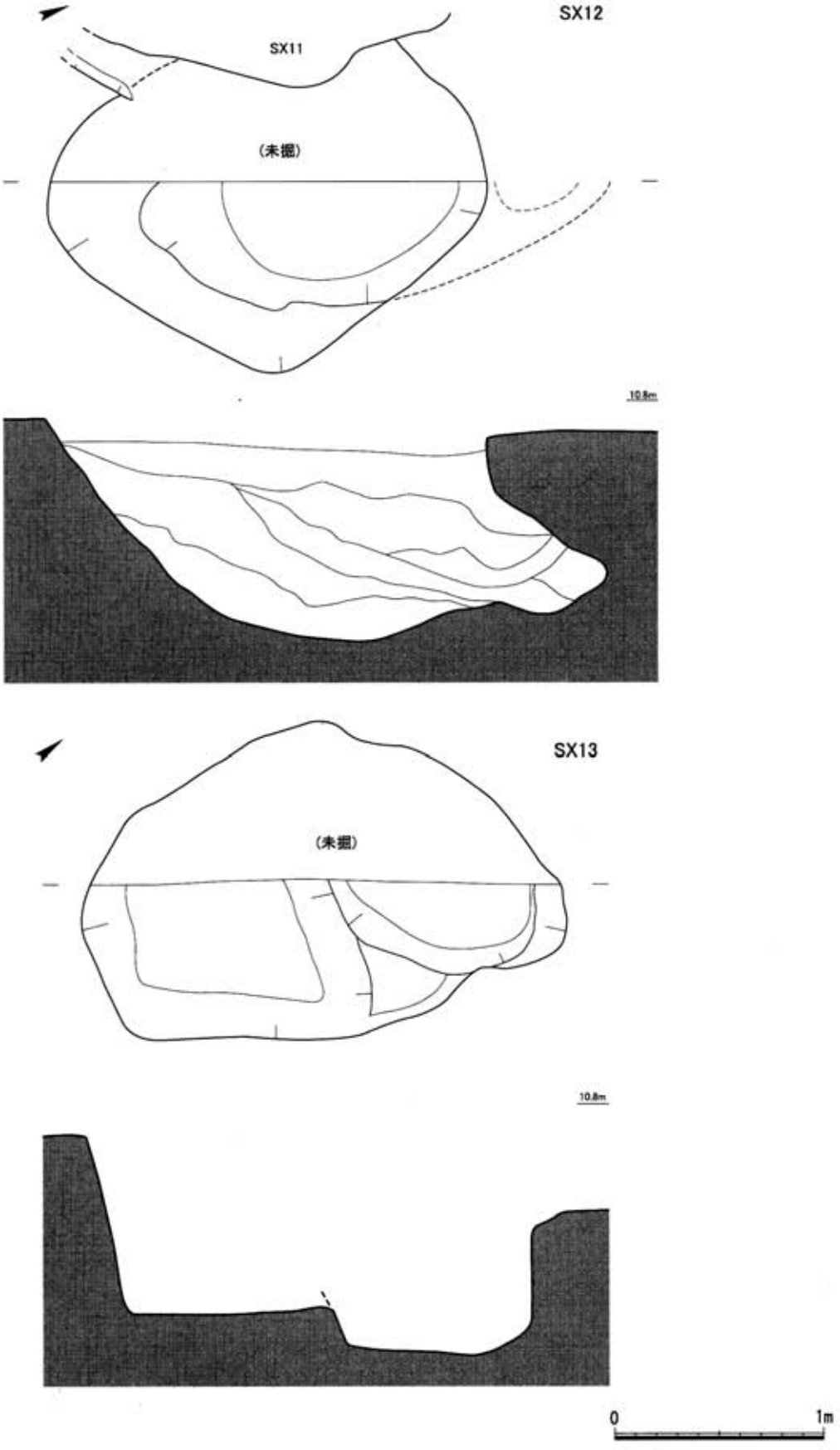
第11図　土器埋納土坑（1/15）

遺構番号	種　別	出土遺物	時　期	備　考
SD01	環濠	土器・石器	弥生時代前期後半	
SX02	土坑	土師器	古墳時代前期	土師器埋納土坑
SX03	土坑	土師器	古墳時代前期	土師器埋納土坑
SX04	土坑	土師器	古墳時代前期	土師器埋納土坑
SH05	竪穴住居	土師器	古墳時代前期	
SH06	竪穴住居	土師器	古墳時代後期	カマドあり
SH07	竪穴住居	甕・鉢	弥生時代後期	
SH08	竪穴住居	なし	不明	SX04に切られる。古墳時代前期か
SH09	竪穴住居	なし	不明	P18にきられる。古墳時代前期か
SX10	不明	なし	不明	竪穴住居か
SX11	土坑	土師器	古墳時代中期か	粘土採掘抗か
SX12	土坑	なし		粘土採掘抗か
SX13	土坑	土師器	古墳時代中期末から後期	粘土採掘抗か
SX14	土坑	なし		粘土採掘抗か
SX15	土坑	なし		SH07を切る
SX16	土坑	なし		
SX17	土坑	なし		SD01を切る
SD18	溝	なし		SH07を切る。調査時はSD17
SB19	掘立柱建物	なし		弥生以降

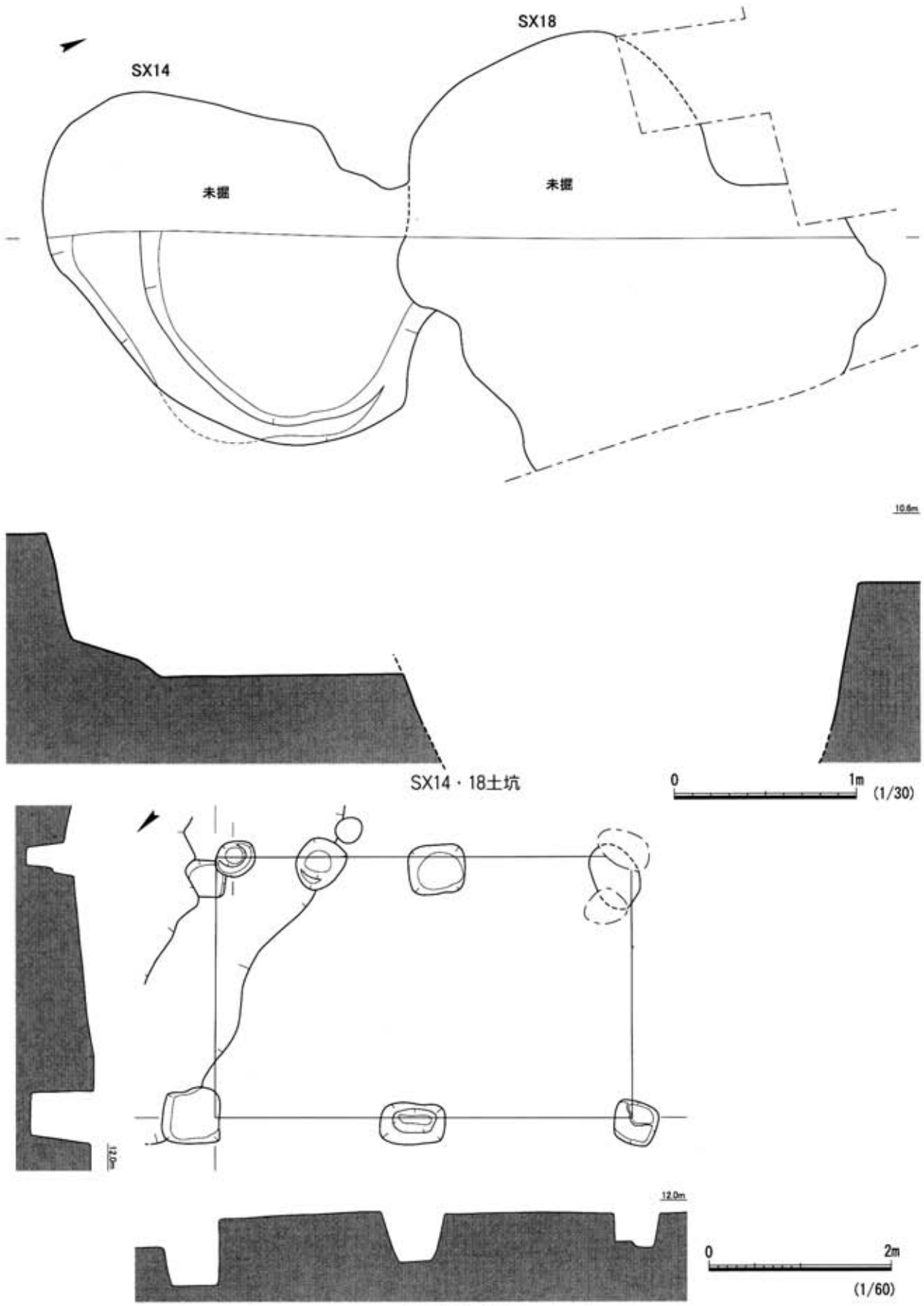
表１　幸津遺跡遺構一覧表



第12図　SX11土坑（1/40）



第13図　SX12・13土坑（1/30）



第14図　SX14・18土坑・SB19掘立柱建物跡

Ⅲ　出土遺物の内容

(1) 土　器

遺構出土の土器を中心に190点図示した。特にSD01環壕出土土器が大多数を占める。竪穴住居跡及び土坑からも土器は出土しているが、その量はわずかで、遺構の中には時期の特定できるものも少ない。その出土状況等からみるとSD01環壕を除き、遺構出土の土器は、もともと少なかったものとみられる。

本遺跡から出土した土器を時期別に見ていくと、弥生時代前期後半から中期初頭、弥生時代中期前半から後半、弥生時代後期前半、古墳時代前期、古墳時代中期末から後期、奈良時代、近世に分けられる。これらの土器により幸津遺跡の時期的変遷の傾向が大まかに把握できる。

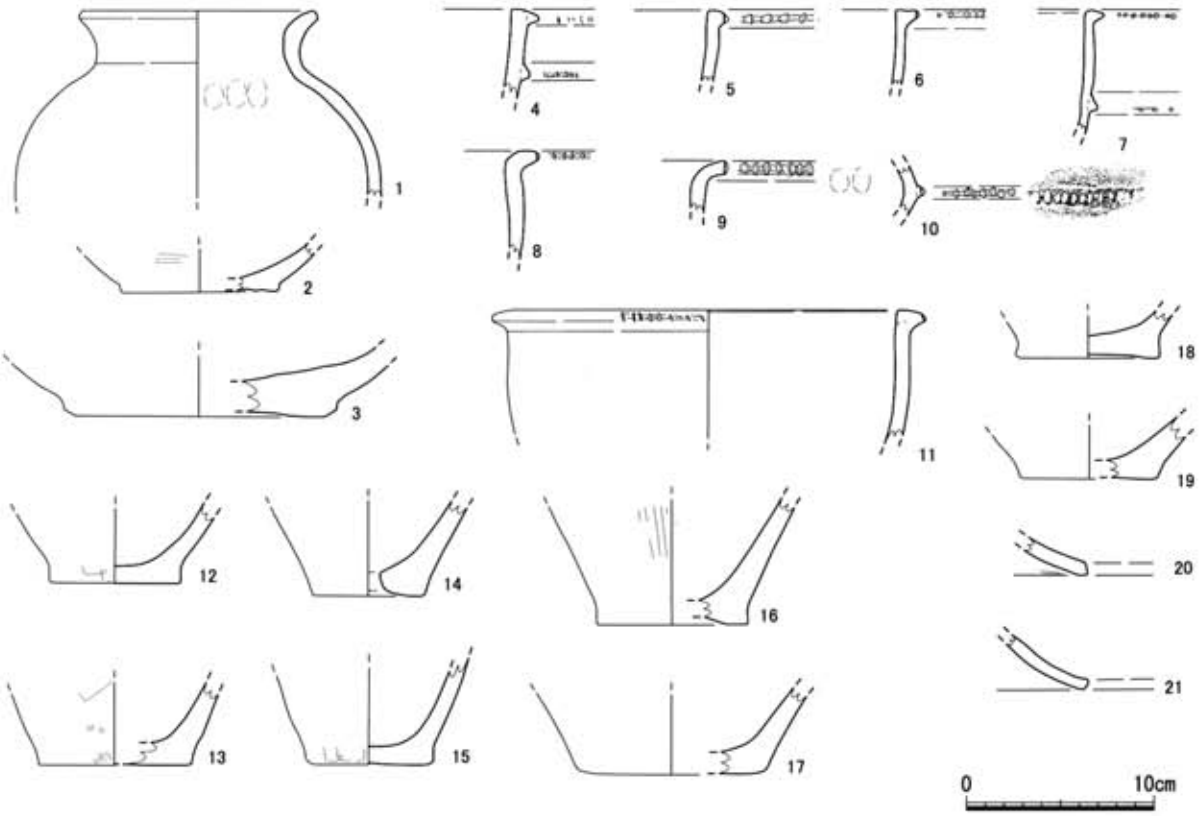
イ　ＳＤ01環壕下層出土土器（第15図）

SD01環壕の下層からは、壺、甕、蓋が出土した。鉢、高杯はない。下層は土器の出土量が少なく、破片資料も多いが、21点について図示した。

壺は３点。１は、壺の口縁から体部上半にかけての破片。土器が歪んでいるため、図の形が正確でない可能性がある。２・３は、底部の破片。底面端部が外に張り出す。

甕は、口縁部から体部にかけての破片８点（４～11）と底部の破片８点（12～19）を図示した。口縁部と胴部に突帯を貼り付け、その突帯に刻目を持つもの（４・７）と口縁を「く」字に屈曲し、口縁端部に刻みを施すもの（８・９）、砲弾型の器形で口縁部に刻みを持つ突帯を貼り付けるもの（11）がある。５・６は口縁部と胴部に突帯を持つタイプか。10は、屈曲を持つ胴部に刻みを施す突帯が貼り付けている。

甕の底部は、底面端部を張り出すもの（12・13・15・16・18・19）と体部と底部の境界が不明瞭なもの（14・17）に分けられる。14は、底部に穿孔がある。20・21は、蓋の破片。



第15図　SD01環濠下層出土土器（1/4）

ロ　SD01環壕中層出土土器（第16～20図）

本遺跡で遺物のもっとも多く出土した場所がSD01環壕の中層である。コンテナ20箱に近い遺物が出土している。土器は、壺・甕が主体を占め、蓋が僅かにあるものの、高杯・鉢は認められない。壺・甕を中心に98点図示した。

壺（22～45）

口径が15cm以下を小型壺、16cmから30cm未満を中型壺、30cm以上を大型壺として説明する。

22～34は小型の壺。22は口縁を欠く壺。頚胴部の境界に一条の沈線を巡らす。23は完存する小型の壺である。器高14.0cm、口径10.0cm。口縁部下に一条の沈線と頚胴部の境に断面三角形の突帯を貼り付ける。底面端部は外に強く張り出す。外面の調整はミガキ。24は、頸部から胴部にかけての破片。25は、径9.6cmの小さめの口縁から胴部中央付近にかけて大きく広がる。胴部上半部に沈線を一条巡らす。内面には、粘土紐の痕跡が認められる。26～29は口縁の破片。30は頸部から胴部にかけての破片。頚胴部に一条の沈線を巡らし、胴部に３条の貝殻重弧文を施す。外面は丁寧なミガキ調整。31～34は、小型壺の底部。底部と体部が明瞭なもの（31～33）とやや不明瞭なもの（34）がある。

中型の壺（35～39・43・44）は、７点図示した。35は、口径23.5cm。大きく外反した口縁部下に三条の沈線を巡らす。口縁部内面と外面はミガキ調整。頚部内面に指頭圧痕が残る。36は口径25.8cmで口縁部下に二条の沈線を巡らす。37は口縁から胴部中位にかけての破片。径17.2cmの小さめな口縁部を持ち、肩部が強く張る。胴頸部に三条の沈線のほか、その下部に浅い沈線により形成された四条の重弧文帯を巡らす。36は、口縁部を肥厚させ、頚部との境を明瞭にする。43・44はやや、広めの壺の底部。

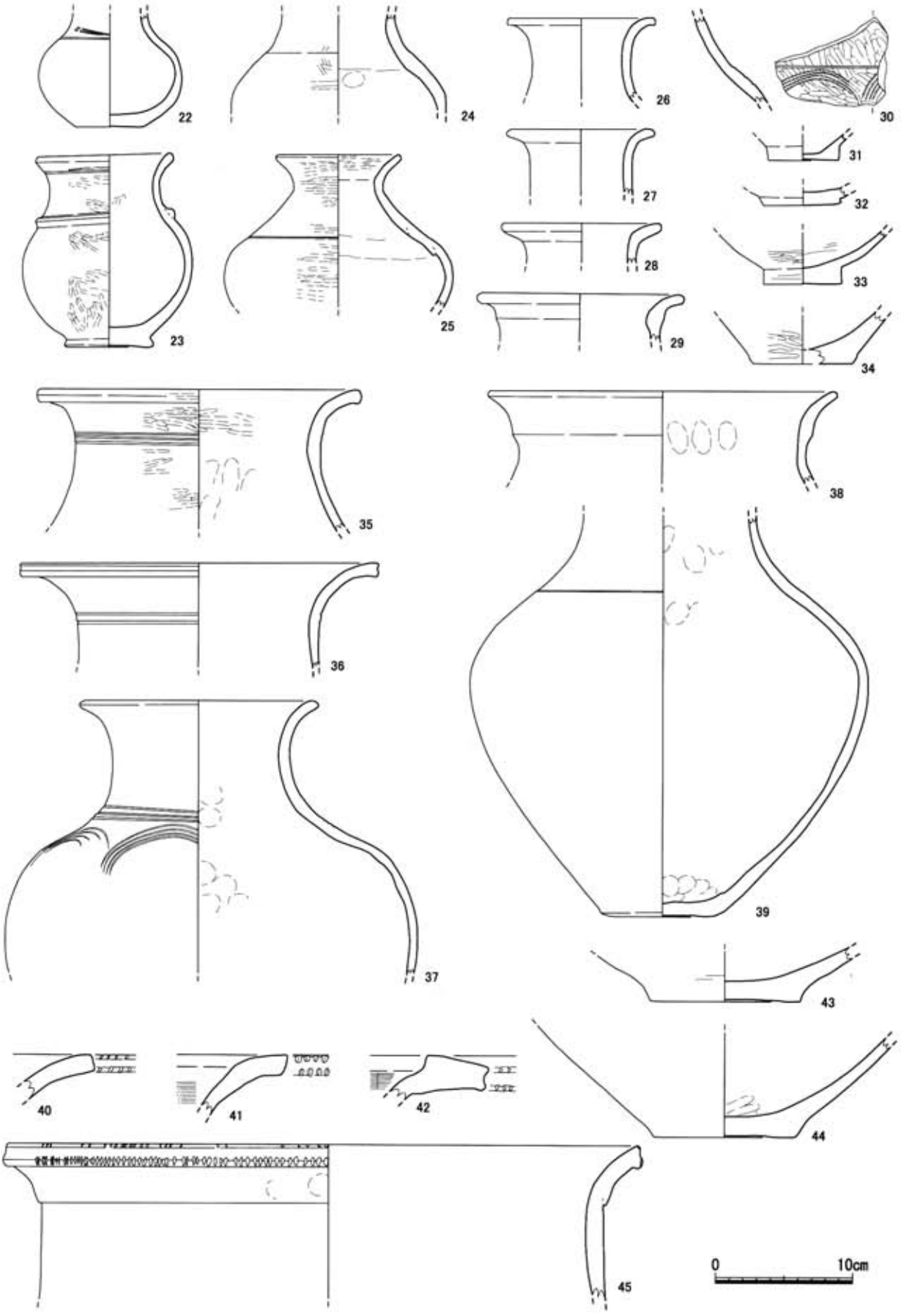
大型の壺（40～42・45）は４点図示した。いずれも破片のため、45を除き径を求められない。40・41は、大きく外反させた口縁の上端・下端に刻み目を施す。42は、口縁部内面を肥厚させ、口縁部上端・下端に刻みを施す。45は、口径47.2cm、残存高11.2cmの口縁部から体部にかけての壺の破片である。まっすぐ立ち上がる胴部にやや、外反する口縁部がつく。口縁部は肥厚させ、胴部との間に段をつくる。口縁部の上端・下端に刻みを施す。

甕（46～70）

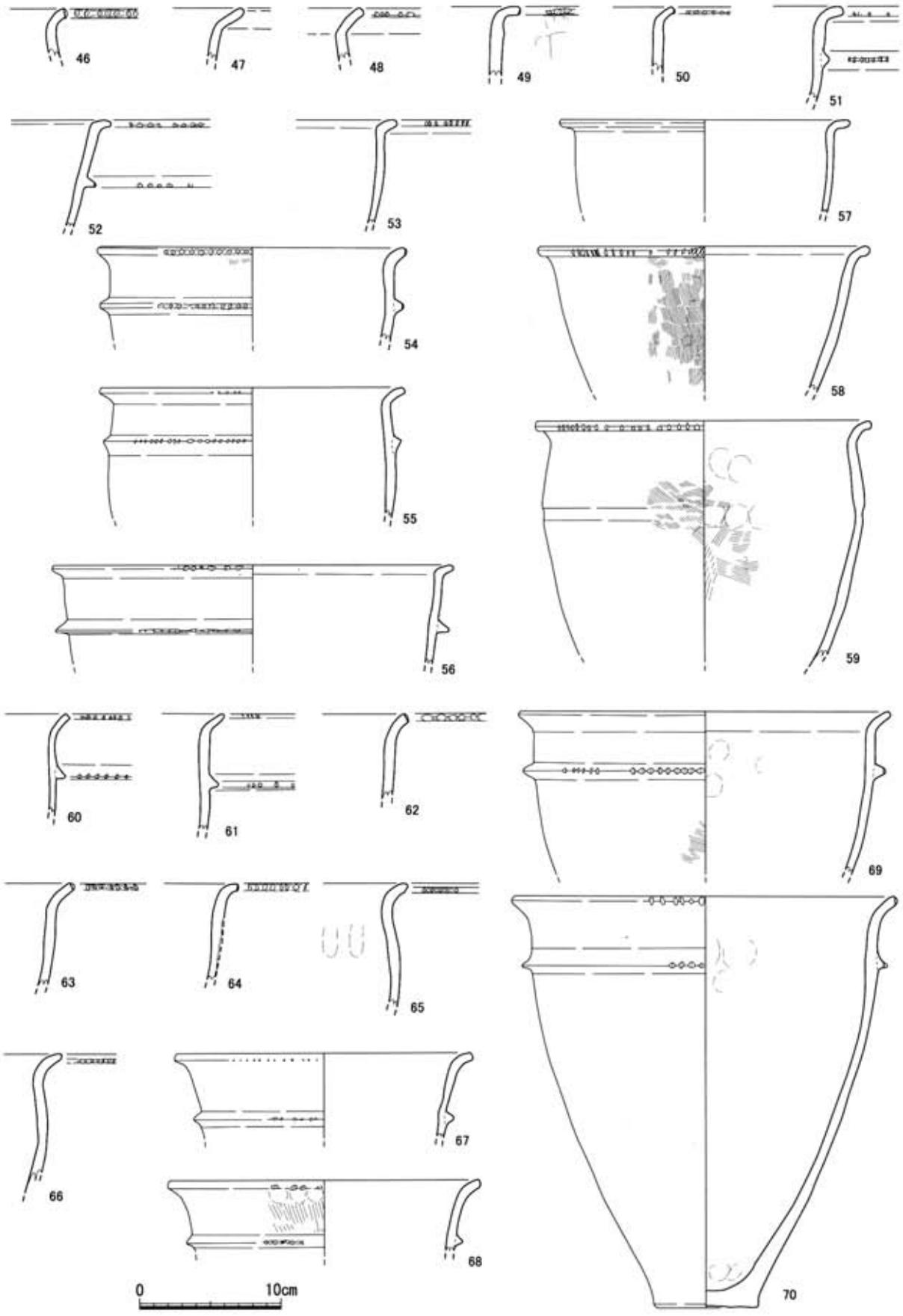
甕は、いわゆる如意形口縁を持つ甕と体部に突帯を持たないもの（53・57～58・63～66）、突帯を貼り付けるもの（51・52・54～56・59～61・67～70）がある。小片のため体部の突帯の有無が不明なもの（46～50）もあるが、参考として取上げる。

52は、口縁部を強く折り返し、端部に刻みを持つ。胴部の突帯にも浅い刻みを施す。見掛け上、亀の甲タイプに似る。56も52同様、口縁部を短く強く折り返す。突帯を持たない如意状口縁甕にも口縁部の折り返しの強弱がある。57・58は、口縁端部を強く折り返したもの。これに対し、62～66の甕は、口縁部の折り返しがそれほど強くない。58の甕は、口径23.8cm。刻みを施す口縁部から底部に向けて直線的に下りる。外面は細かなハケ調整。59は、体部の突帯が剥がれた甕。体部上半に指頭圧痕が残る。60・60は、口縁部の外反が弱い甕。体部の突帯もやや下方を向く。67・68は、体部に突帯は持つものの、口縁部の折り返しが強くない甕。69は、口縁部下の体部がやや丸みを持つ甕。口径26.4cm、残存高11.5cm。体部の突帯は三角形状で、刻みを施す。口縁部には刻みを持たない。70は、完形に復元できる甕である。口径27.4cm、器高29.0cm、底径7.4cm、わずかに外反する口縁部からやや丸みを持ちながら底部にいたる。底面端部は外方に開く。体部の突帯は、やや下向き。

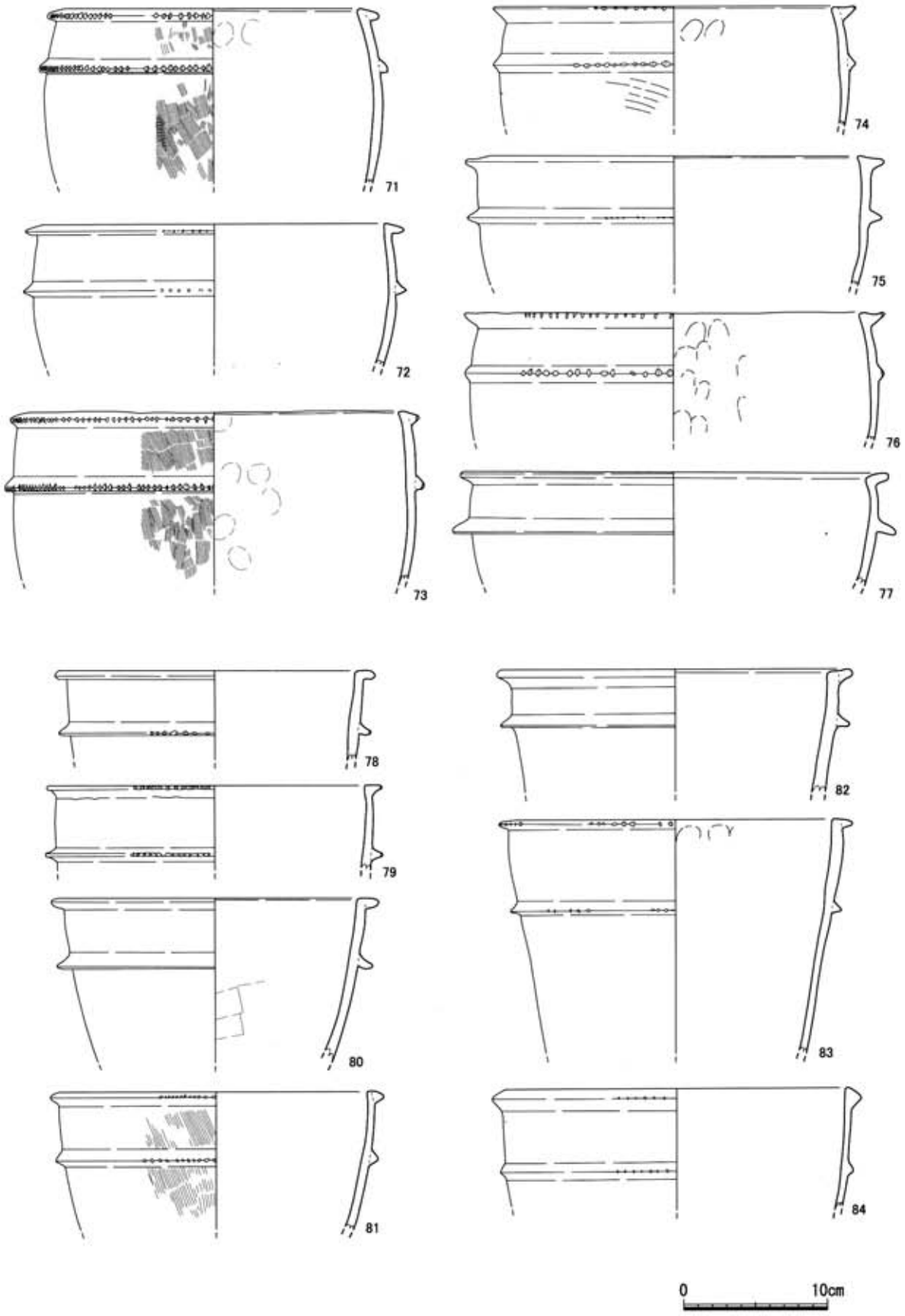
71～84の甕は、口縁部と胴部に突帯を貼り付けたいわゆる「亀の甲タイプ」の甕である。この形式の甕は、体部が砲弾型に近い丸みを帯びたもの（71～77）と体部がやや直線的になるもの（78～84）の二つに大きく分けら



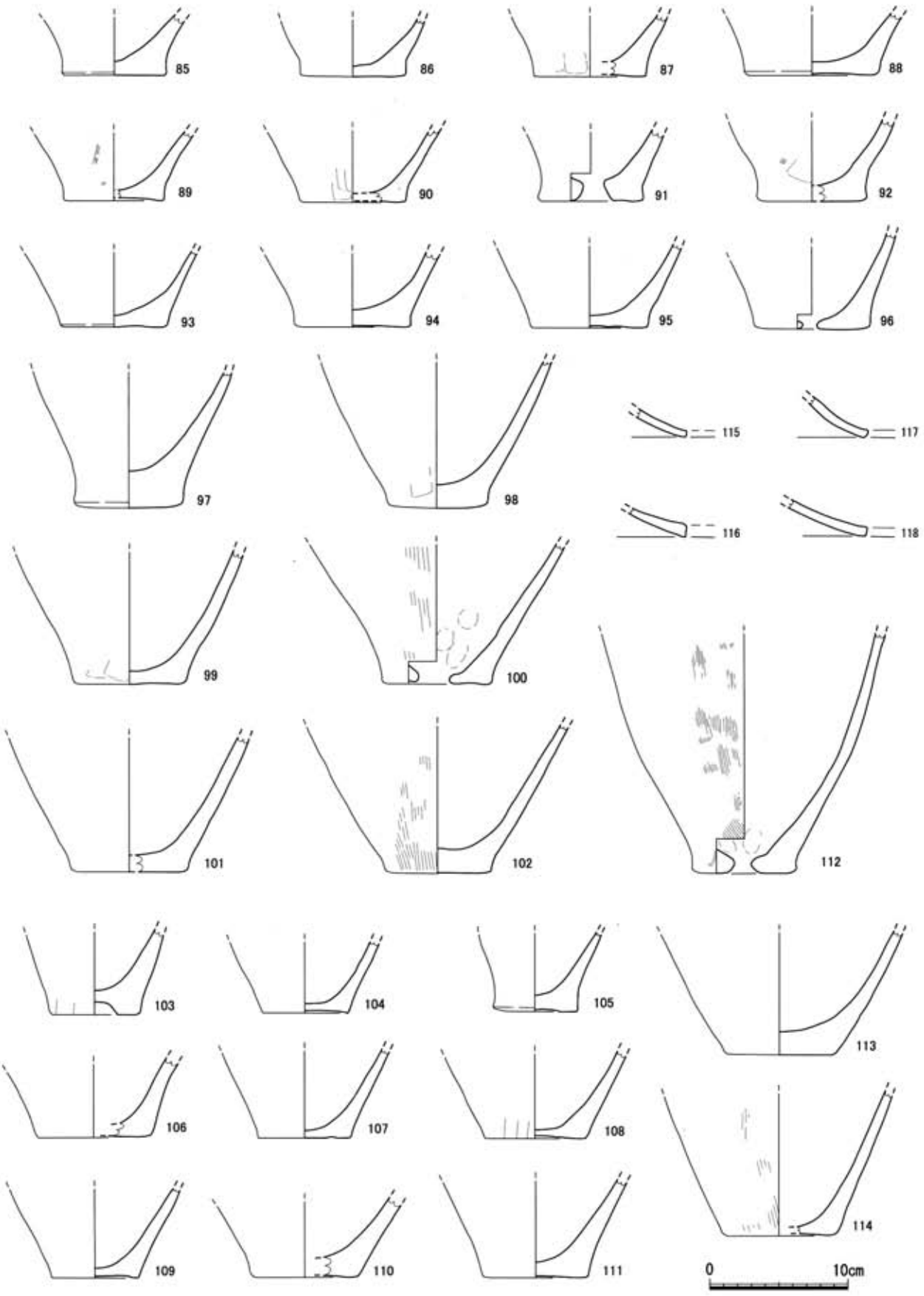
第16図　SD01環濠中層出土土器①（1/4）



第17図　SD01環濠中層出土土器②（1/4）



第18図　SD01環濠中層出土土器③ (1/4)



第19図　SD01環濠中層出土土器④ (1/4)

れる。

71は、口径23.0cm。口縁端部と体部にやや下がり目の突帯を貼り付ける。この突帯には、深くしっかりした刻みが施される。72も71同様なつくりであるが、突帯の刻みが浅い。73の突帯の刻みは深くしっかりしている。この甕の外面は細かなハケ調整で、内面には指頭圧痕が残る。74は、口縁端部に貼り付けた突帯が口唇部と水平になるよう成形されている。74と同様な成形方法をとるものには、75・76・78・79・80・83の甕がある。75の突帯からは、刻みが省略されている。突帯から刻みが省略されている甕には、77・80・82がある。77は、体部が丸みを持つ甕であるが、突帯から刻みが消えているほか、体部の突帯が下向きに延びている。

78は、体部が直線的になる甕である。口縁部に水平方向に突帯を貼り付けるが、口縁部分の突帯には刻みがない。体部突帯の刻みも浅く、まばらである。79の甕は、口縁部と突帯が水平に成形され、口縁部と体部突帯の刻みも小さいがしっかりしている。80は、77同様刻みが省略され、体部突帯が下方に延びる。81は、口縁部及び体部の突帯の幅がやや広がり、突帯の高さも低くなる。82の口縁部の突帯は上方を、体部の突帯は下方を向く。突帯に刻みは施されない。84の口縁部突帯は、断面三角形となる。体部の突帯や突帯に施される刻みも浅く省略化されている。119は、口縁部に断面三角形の突帯一条と胴部に突帯二条を巡らす。突帯の刻みは小さい。120は、大型の甕である。口縁部に二条、胴部に二条の突帯を巡らす。119及び120は、中期的様相の強い土器である。

85～114は、甕底部の破片。底面端部がやや張り出し気味のもの（85～102・112）と底部と体部との境が不明瞭なもの（101～111・113～114）の大きく二つに分類した。このうち、91・96・100・112には穿孔がある。103は、底部の中央が窪んだいわゆる「上げ底」である。105も底部中央が窪み、上げ底になる。

蓋は4点図示した。いずれも口縁部付近の小片のため、径の復元はできない。

ハ　SD01環壕上層出土土器（第20・21図）

壺（121～129）

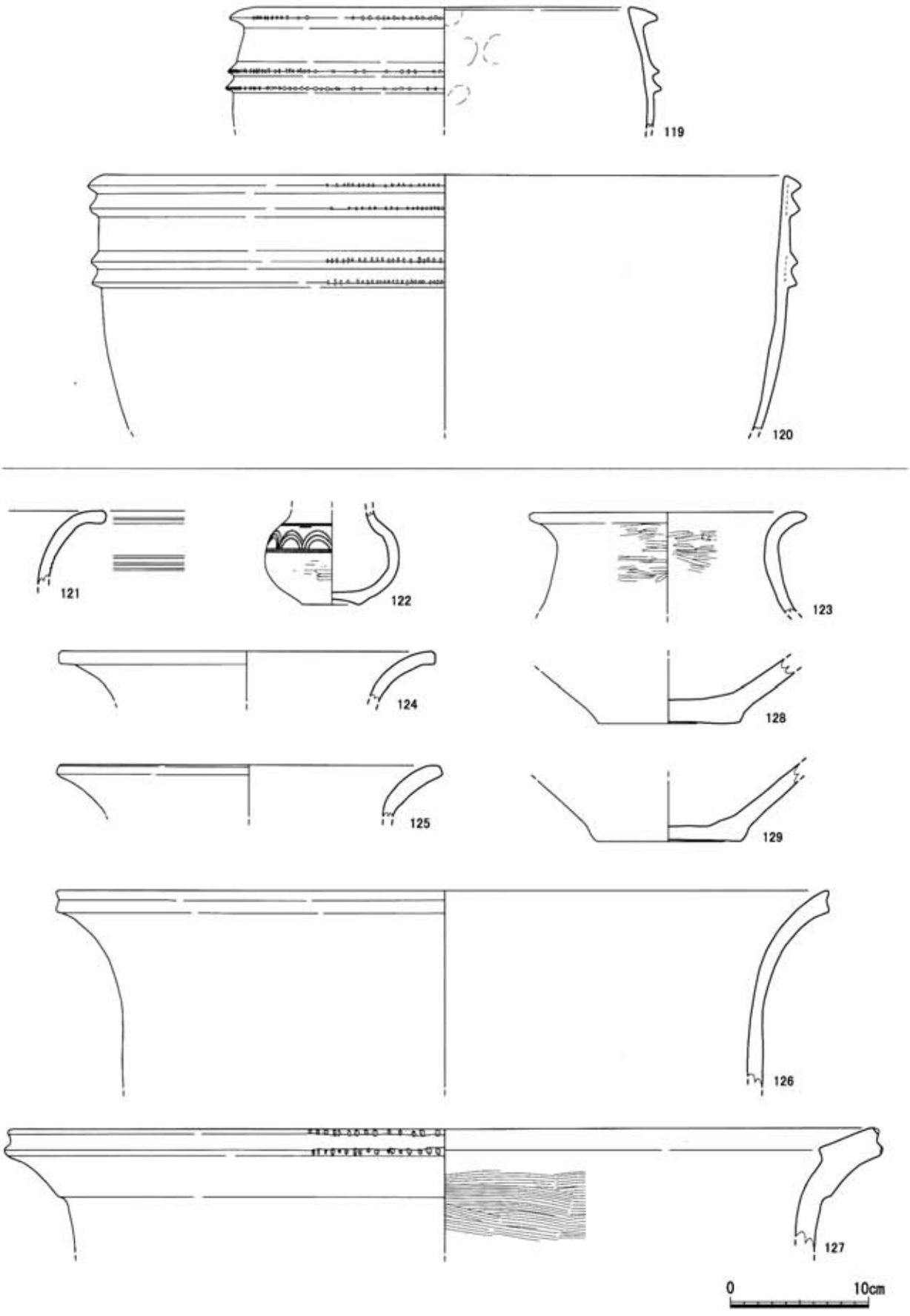
壺は9点図示した。121は、壺口縁部の破片。小片のため、径は求められない。大きく外反する口縁部の下に沈線を三条施す。122は、口縁部を欠く小型の壺。頚部と胴部に沈線で区画し、その間に三条の重弧文を施す。底部はやや上げ底になる。123～125は、中型壺の口縁部破片。123は口縁部内外面にミガキ調整を施す。126・127は、大型壺の口縁。126は口径54.8cm。直線的に延びる体部から口縁部がゆるやかに外反する。口縁端部の中程がくびれる。127の口径は61.8cm。口縁部を肥厚させ、体部との境を明瞭にし、口縁部の上・下端に刻みを施す。128・129は中型壺の底部。いずれも底部と体部の境が明瞭である。

甕（130～146）

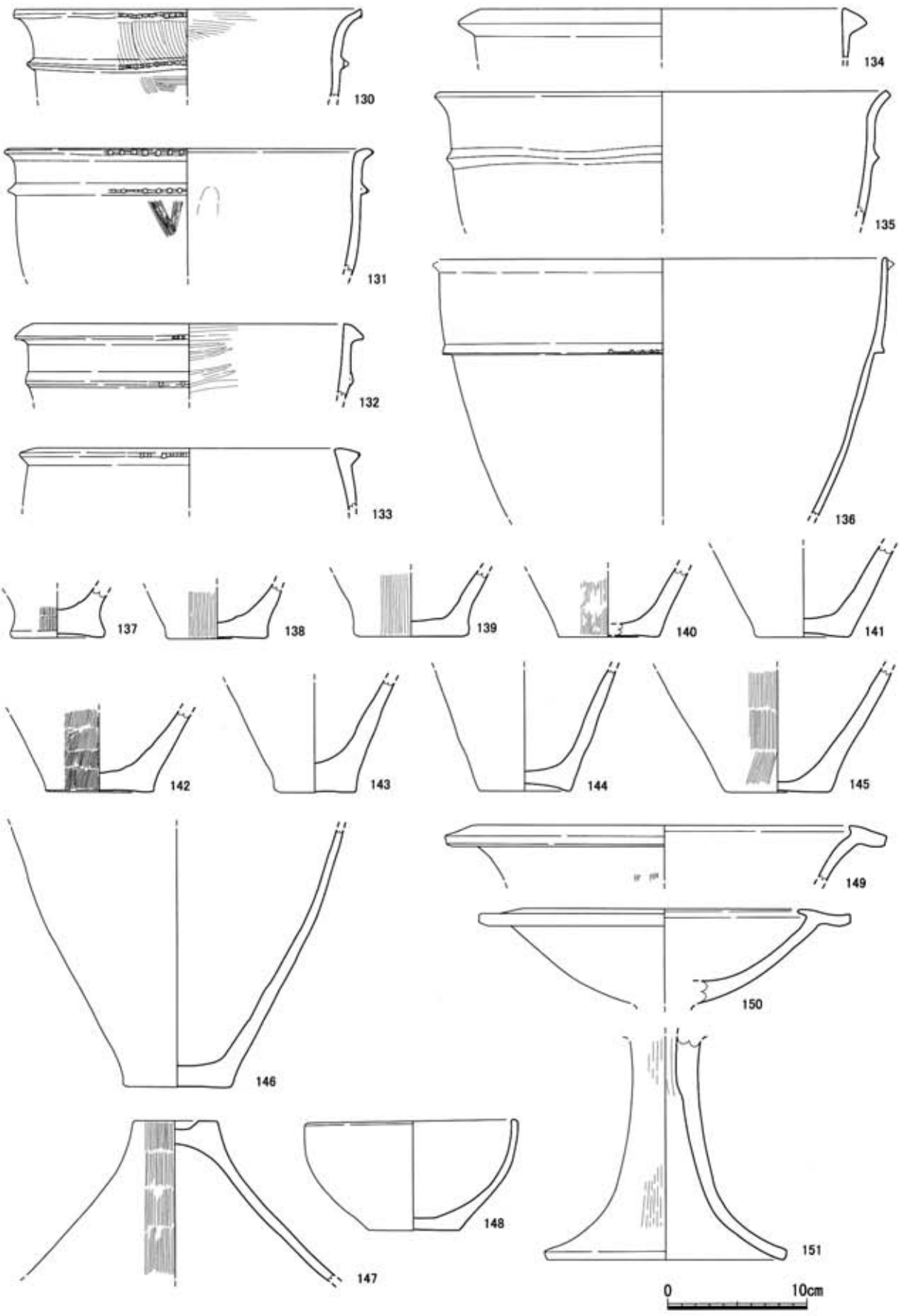
甕は、17点図示した。口縁部の破片には、如意形口縁で体部に突帯を持つもの（130・131・135）と、口縁部と体部に突帯を持つもの（136）、口縁部の突帯が断面三角形になるもの（132～134）がある。130の甕は、口縁及び体部突帯の刻みが比較的しっかりしたもの。131の口縁は、短く外反する。132の口縁部突帯は、断面三角形でやや垂下している。胴部突帯は扁平である。133・134とも口縁部突帯の三角形が著しい。136は、口縁部の突帯が剥がれているものの、器形の復元が可能である。胴部突帯は、突帯部分の粘土紐を貼り付けるのではなく、口縁部下から粘土を貼り付け、突帯部分をつまみ出すように作られている。

137から146は、甕の底部である。平底のもの（138・139・143・146）とやや上げ底になるもの（137・140～142・144～145）に分けられる。

147は、口縁を欠く蓋。基部の中央は、円形に抉れる。外面は縦方向のハケ調整。148は、平底の鉢。口径14.8cm、底径7.8cm、器高7.8cm。149・150は高杯の口縁部。いずれも鋤先状の口縁で、杯部の見込みは浅い。151は、



第20図　SD01環濠中層出土土器⑤・SD01上層出土土器①（1/4）



第21図　SD01環濠上層出土土器②（1/4）

高杯の脚部。

二　竪穴住居跡・土坑等出土土器（第22図）

SH05竪穴住居跡出土土器

甕２点、高杯２点を図示。152は口縁部の肥厚した甕で、体部内面は削り調整。153は、布留系の甕。体部外面はハケ調整、内面はケズリ。154・155は、高杯の杯部。155は、杯部の下部に一条の沈線が施される。

SH06竪穴住居跡出土土器

甕１点、杯１点を図示。156は小型壺。口径11.1cm、残存高6.8cm。やや内彎する口縁にわずかに丸みを持つ体部がつく。口縁部の調整はナデ、体部外面はハケ調整、内面は横方向のケズリ。157は小型の杯。口径13.7cm、器高4.4cm。口縁端部が外反する。

SH07竪穴住居跡出土土器

壺１点、鉢１点を図示。158は平底の壺。体部上半は失われている。平底の底部から体部中央で最大径を持つように立ち上がる。外面はハケ調整。内面はナデ調整。底部付近に指頭圧痕がみられる。159は「く」の字口縁を持つ鉢。口径22.8cm、底径8.8cm、器高14.2cm。底部は平底で、穿孔を持つ。体部内外面ともハケ調整。

SX02土坑出土土器

高杯３点を図示。いずれも脚部を持たない。160は高杯口縁部で、杯底部から外方に向けて直線的に延びる。口縁端部は大きく曲げられる。口縁部と杯底部の境は明瞭。口径19.0cm。161は杯部中央で段を持ち、口縁部はわずかに外反する。口縁部と杯底部の境は明瞭でない。杯部と脚部との接合には、杯底部から粘土を充填する。162は、杯底部が広く、屈曲部から口縁部が外方に延びる。161同様、杯底部から粘土を充填する。

SX03土坑出土土器

高杯２点を図示。163は杯底部と口縁部との境に屈曲部に相当する段を持つが、その境は明瞭ではない。口縁部は、直線的に外方に延びる。口径17.8cm。164は、杯底部と口縁部との屈曲部に稜を持つ。口縁部はわずかに外反し延びる。見込みは深い。口径18.1cm。

SX04土坑出土土器

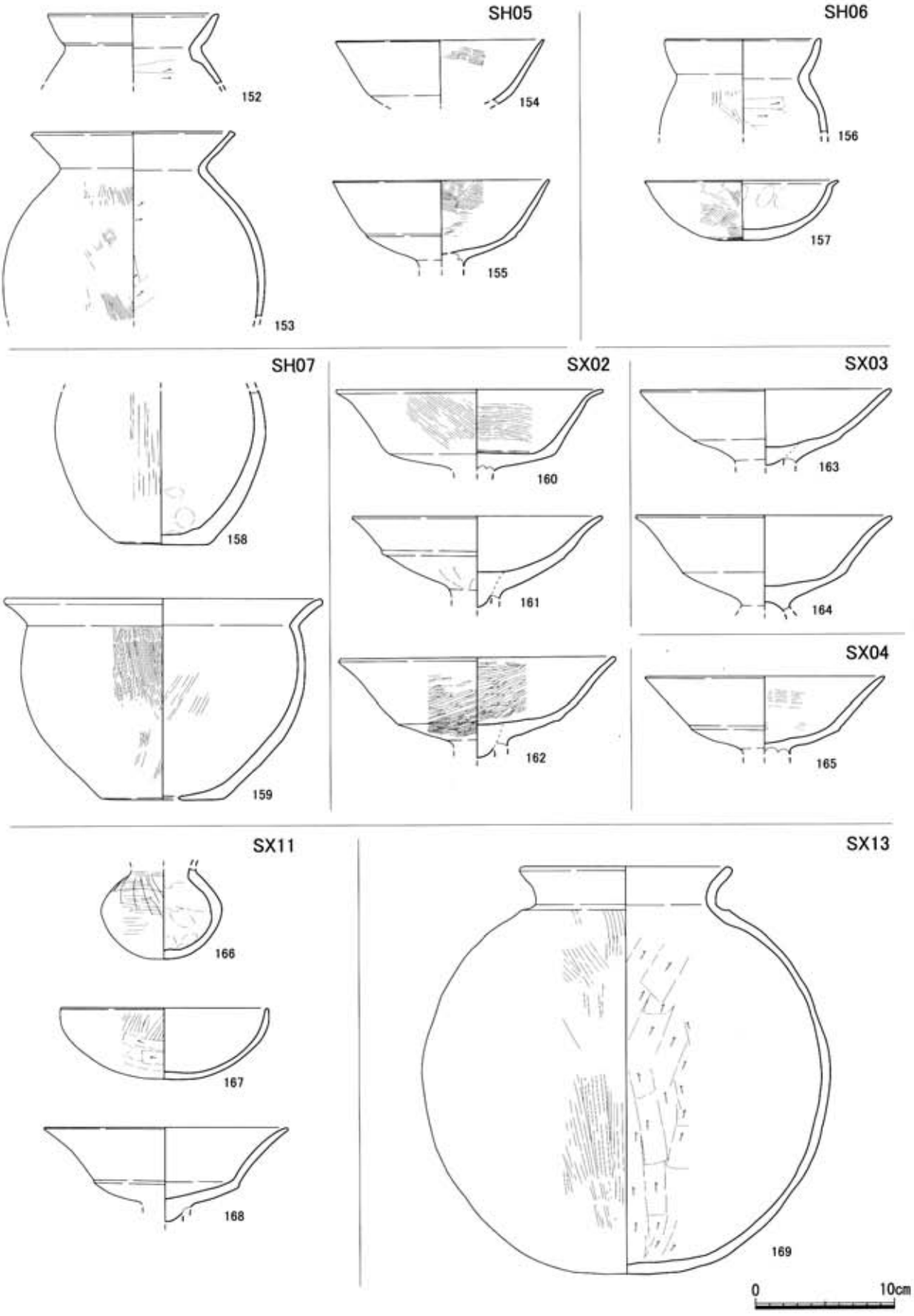
高杯１点を図示。165は、杯底部と口縁との屈曲部に段を持つ。口縁部は直線的に延びる。外面の調整は磨耗のため、不明だが、ミガキ調整と思われる。内面にはハケが残る。口径7.0cm。

SX11土坑出土土器

壺１点、杯１点、高杯１点の計３点を図示。166は、口縁を欠く小型の壺。胴部中位で最大径を持ち、底部は丸底気味。外面はミガキ調整。167は杯。丸底の底部から口縁部にかけ緩やかに開く。口径15.0cm、器高5.1cm。168は高杯の杯部。杯底部と口縁部の屈曲部に段を持ち、口縁部は、わずかに外反し延びる。杯底部から粘土を充填する。口径17.5cm。なお、この高杯は、土師器埋納遺構と同様、杯部のみの出土であるため、混入の可能性が考えられる。

SX13土坑出土土器

壺１点を図示。ほぼ、完形に復元できる壺で口径15.1cm、器高29.0cm。丸底の底部から体部がゆるやかに立ち上がる。胴中央部で最大径を持つ。口縁部は単口縁でわずかに外反する。口縁部の調整は、内外面ともナデ調整。胴部は、外面がタテ方向のハケ調整、内面はケズリ調整である。



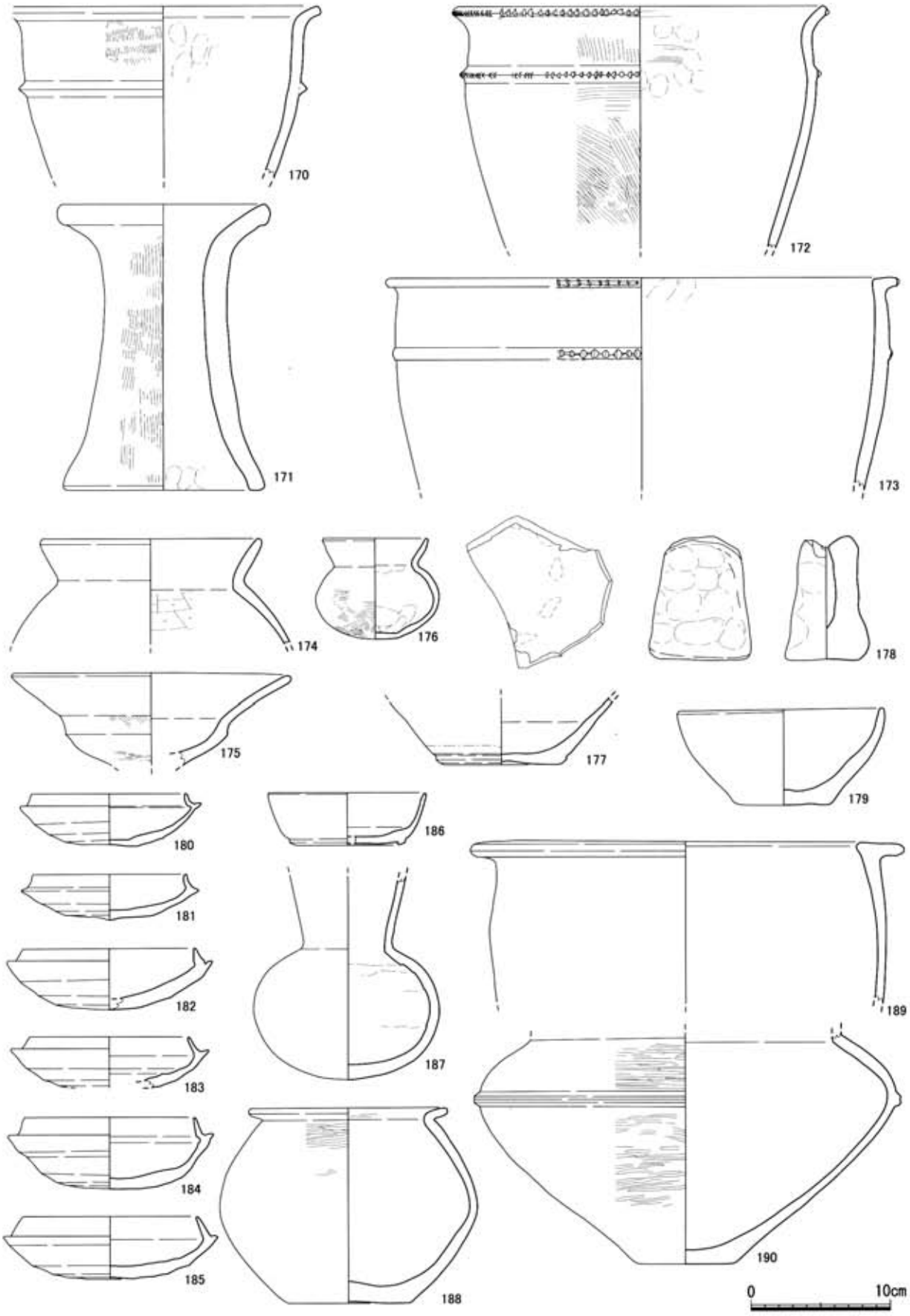
第22図　竪穴住居跡・土坑等遺構出土土器（1/4）

ホ　包含層・検出面出土土器（第23図）

包含層及び検出面出土土器のうち、20点について図示した。

170は、如意状口縁の甕の胴部に突帯を施したもの。刻みは省略されている。171は、器台。つくりは中空で、口縁部は外反するが、裾部は体部からわずかに広がりながら下りる。器高20.3cm、口径14.6cm。172は、如意状口縁を持つ甕の胴部に突帯を貼り付けたもの。173は、口縁部と胴部に突帯を貼り付けた甕、口縁部突帯は、口唇部ともに水平に仕上げられる。胴部の突帯は、非常に扁平である。

174は壺の口縁から体部にかけての破片。175は高杯杯部の破片。杯底部と口縁部の間に屈曲部を持ち、口縁部が直線的に外反する。古墳時代初頭のものか。176は小型の壺。胴部中央で最大径を持つ。口径7.5cm、器高7.1cm。177は椀の破片。見込みに胎土目を持つ。178は、器台状の土製品。中央部を抉り、中空状にする。179は、鉢。平底の底部からやや内湾気味に体部が立ち上がる。口径14.3cm、器高6.9cm。180～185は、須恵器の杯身。いずれも受部に立ち上がりを持つ。小田編年のⅢ～Ⅳ期に相当する。186は、高台を持つ須恵器椀。奈良時代の所産。187は、口縁部を欠く直口壺。球胴系の胴部を持ち、口縁部は直線的に立ち上がる。188は壺。平底の底部から胴部中央にかけ立ち上がり、胴上半は内傾する。口縁部は短く外反する。189は、鋤先口縁を持つ甕。口縁部は若干下がる。190は、広口壺の胴部。胴部最大径は、胴部上位にあり、その部分に断面M字の突帯を巡らす。外面の調整は、横方向のミガキである



第23図　包含層・検出面出土土器（1/4）

(2) 石　器

石器は、36点図示している。その多くが、SD01環壕出土である。SD01環壕はその出土土器から、弥生時代前期後半から中期前半の時期であることが判明しているため、当該時期の石器組成を知る上で重要な資料となる。

なお、各石器の計測値は一覧表に記載している。また、本文中の厚斧率とは、最大厚÷最大幅×100％で求める。両刃石斧の厚さの比較に用いる。

へ　SD01環壕中・下層出土石器（第24～26図）

石庖丁

191は大型の外湾刃半月形の完形品で、刃部の弧度が強い。石材は頁岩質砂岩である。紐孔は、両面から敲打した後に回転穿孔される。背部は、擦切り技法で片面から溝を入れ、割り取られた後に部分的に研磨される。断面は直線的で、刃部は両刃に研ぎ出される。鏑は不明瞭だが、一方の側部に明瞭な研ぎの単位がみられ、研ぎ直しの可能性がある。片面の体部中央部分に素材面が残存する。両面とも、中央部から左側の端部にかけて刃縁が摩滅する。192は大型の外湾刃半月形で、紐孔部分で破損する。石材は頁岩質砂岩である。紐孔は、敲打の後に回転穿孔される。背部、体部ともに平坦に研磨され、刃部は鏑の弱い両刃に研ぎ出される。研磨は全体に丁寧に施され、斜方向の研磨痕を残す。193は外湾刃半月形の端部の破片である。片岩製。背部は丸く、刃部は片刃に研磨される。研磨痕は斜方向に僅かにみられる。破損部が不明瞭で、他器種の未成品か、転用品の可能性がある。

柱状片刃石斧

194は小型の柱状片刃石斧で、基部から胴部にかけ破損する。石材はホルンフェルスである。平面形は台形に近い。側面形は両主面とも緩やかに湾曲し、抉りは浅く、刃部の鏑は不明瞭な形態である。研磨は基部と両主面が中心で、側面には僅かに敲打痕が残る。横断面は膨らみをもつ台形。基部と胴部を結ぶ軸線からねじれるように刃部が研ぎ出される。刃縁は磨耗する。

砥石

195は大型砥石の完形品で、形態はブロック状の直方体である。花崗岩製。目は細かく、サンドペーパーで2000番相当である。表面と側面の２面を使用している。置き砥石、または台石として用いられたのであろう。

両刃石斧

196は太型蛤刃石斧の刃部破片で、刃部幅を復元すると、7.5～８㎝になる大型品である。石材は安山岩。刃部の平面形は弧状に湾曲する。主面、側面とも全面研磨され、側面は面をもつ。横断面は側部のみ直線的な楕円形である。全面に縦方向の細かな研磨がみられる。刃部に細かな剥離痕がみられ、使用痕の可能性がある。本資料のみ下層から出土している。

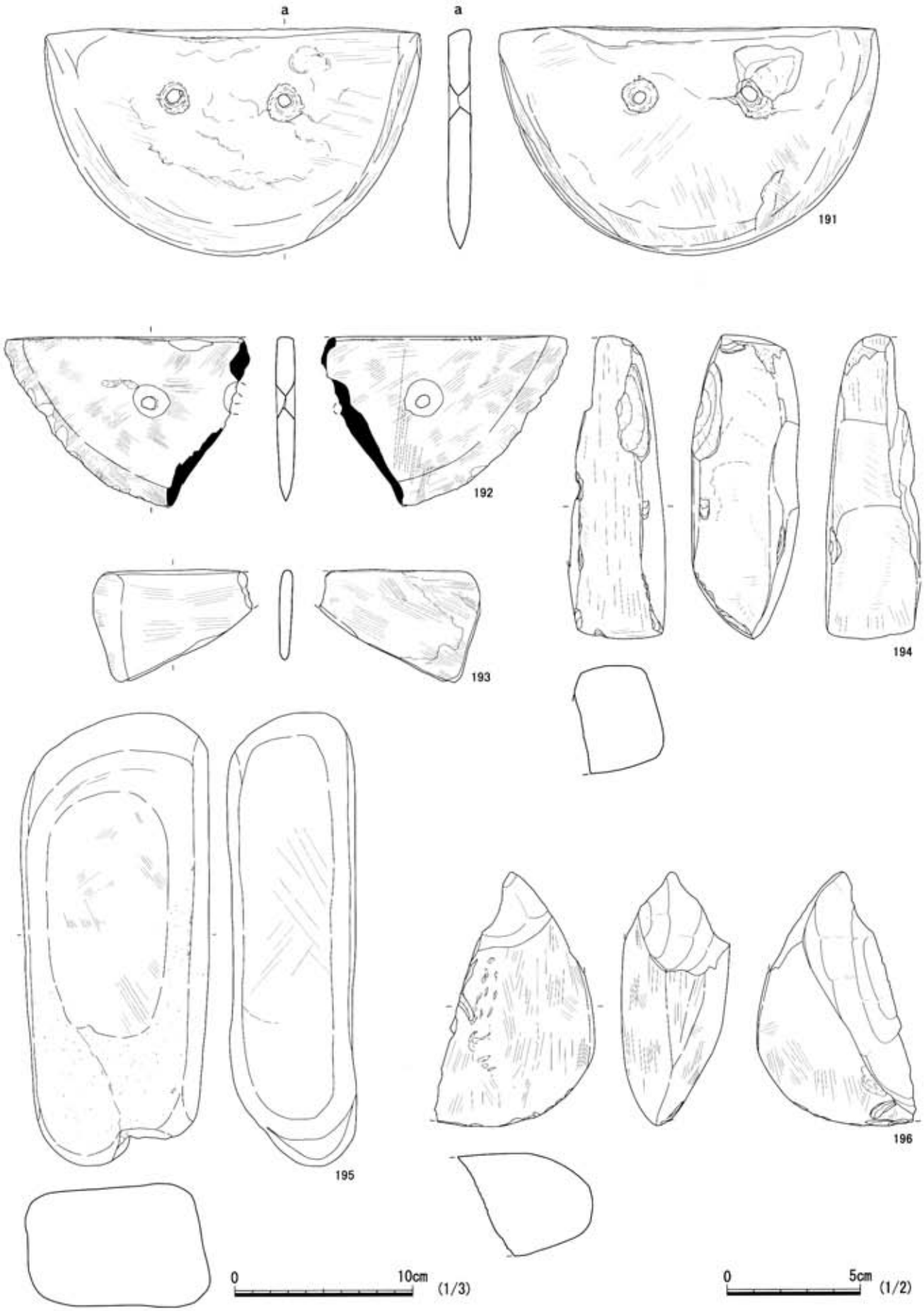
197は小型の両刃石斧で、刃部と基端部分を欠損する。石材は細粒砂岩である。基部は円基で、刃部に向かって幅を広げる。横断面はやや扁平な楕円形。主面を中心に、縦・横・斜めの各方向から細かな研磨が施されるが、側面は研磨されず剥離痕と敲打痕を残す。厚斧率は55.4％。

砥石

198は薄く剥離し、一面のみ使用面が残存する。砂岩製。砥石の目は細かく、粒度はサンドペーパーで3000番相当である。仕上げ砥であろう。

磨石

199～200は安山岩製の磨石の破片である。２点とも平面は円形、横断面は楕円形であったと思われる。両面に研磨痕、側面に敲打痕を残し、敲石としても使用している。



第24図　SD01環濠出土石器①

スクレイパー

201～205は全て安山岩製である。

201は横長剥片を素材とする。打面は自然面。背面はネガティブな一つの剥離面で、同様の剥片を連続して石核から剥離したと思われる。主要剥離面は整形剥離が中心で、下辺に主要剥離面側から調整剥離を施し、刃部とする。片刃で、刃角は58°である。一方の側辺は最後に折られているが、意図的なものかは不明。背面側刃縁には微細剥離と摩滅がみられる。202は縦長剥片を素材とする。打面は自然面。一方の長辺は自然面で、両面からの剥離で薄くしている。反対側の長辺に、両面から調整剥離を施し刃部とする。偏った両刃で、刃角は56°である。使用痕はみられない。203は横長剥片を素材とする。打面は折り取られており形状は不明。整形剥離の後、打面を除く縁辺に両面から調整剥離を施す。主要剥離面側に偏る両刃で、刃角は62°である。最後に刃潰しとして、背面側から打面を折り取る。その際、主要剥離面の右側辺の刃部も折れているが、意図的なものではないと思われる。背面側の他の刃縁には、微細剥離と磨耗が観察される。204は一辺を大きく折り取っており、剥片と打面の形状は不明。平面半月形である。刃部は両刃で、両面から調整剥離を施す。刃角は75°である。両面の刃部縁辺に微細剥離がみられる。両面を入れ替えて使用したものか。やや風化が進んでおり、縄文時代以前の石器の可能性がある。205は1：1の薄い剥片を素材とする。円盤状の平面形である。両刃で、上半の縁辺は両面から粗く、下半は両面から細かく刃部の調整剥離を行う。刃角は26°で、他の資料より鋭い。両面の刃縁全周に摩滅と微細剥離痕がみられる。

楔形石器

206は、1：1の剥片を素材とする。石材は安山岩。背面には自然面が残存する。2つの長辺に対になる潰れ（階段状剥離）と両極剥離がみられることから、楔形石器とした。潰れは主要剥離面を切っており、割り取った剥片を素材に、両極打法で小型の剥片を取ろうとした可能性と、実際に楔として用いた可能性が考えられる。本来の刃角は潰れのため不明である。

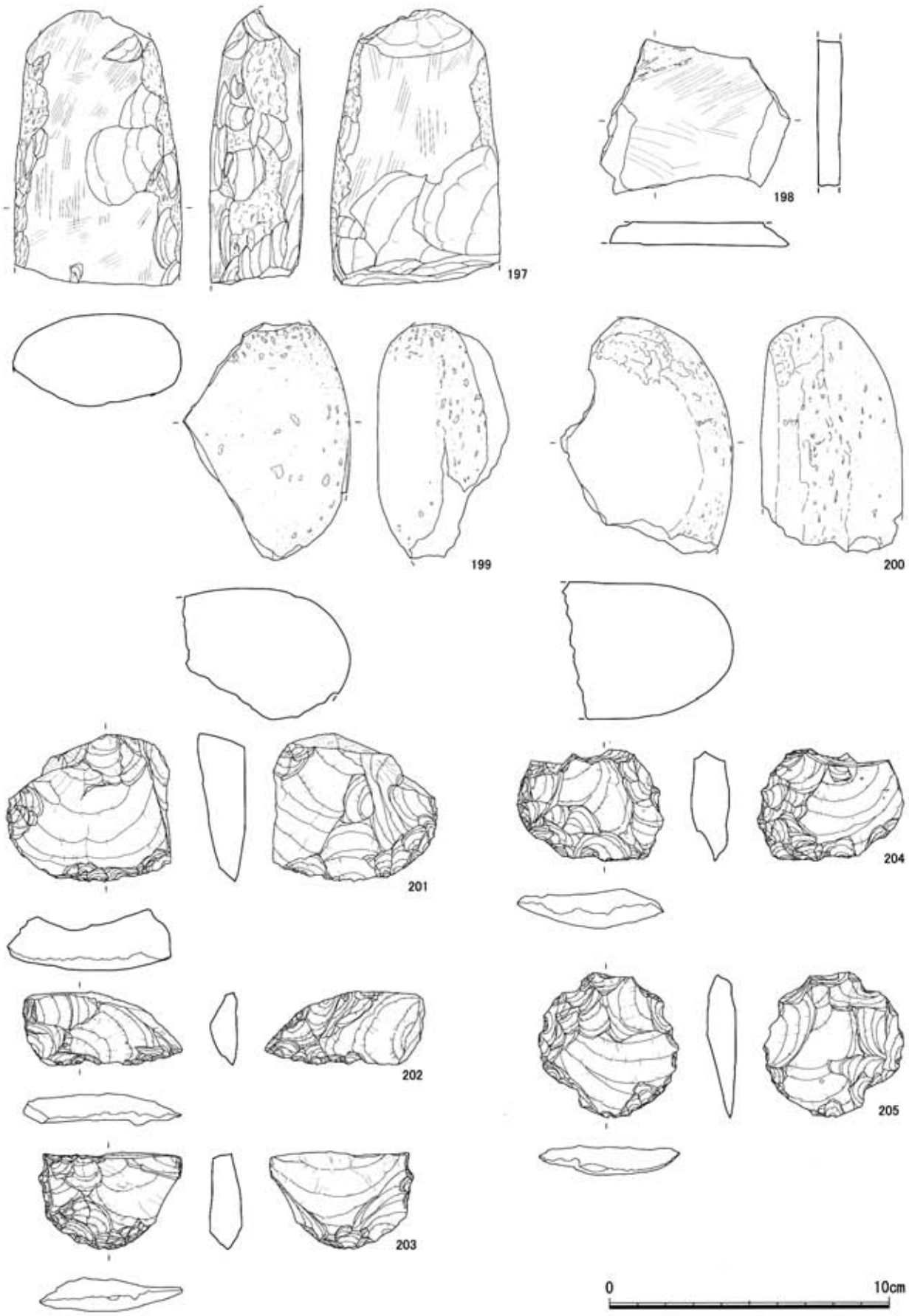
使用痕のある剥片（UF）

207は黒曜石の縦長剥片である。打面は自然面。背面の剥離は縦方向が中心で、縦長剥片を連続して割り取ったうちの1枚と考えられる。刃角は下辺が42°、長辺が25°と鋭角である。下端の辺の背面側に羽毛状の微細剥離、外湾する一方の側辺に三日月状の微細剥離がみられ、剥離の形状が異なる。下辺と側辺で機能を異にする可能性がある。

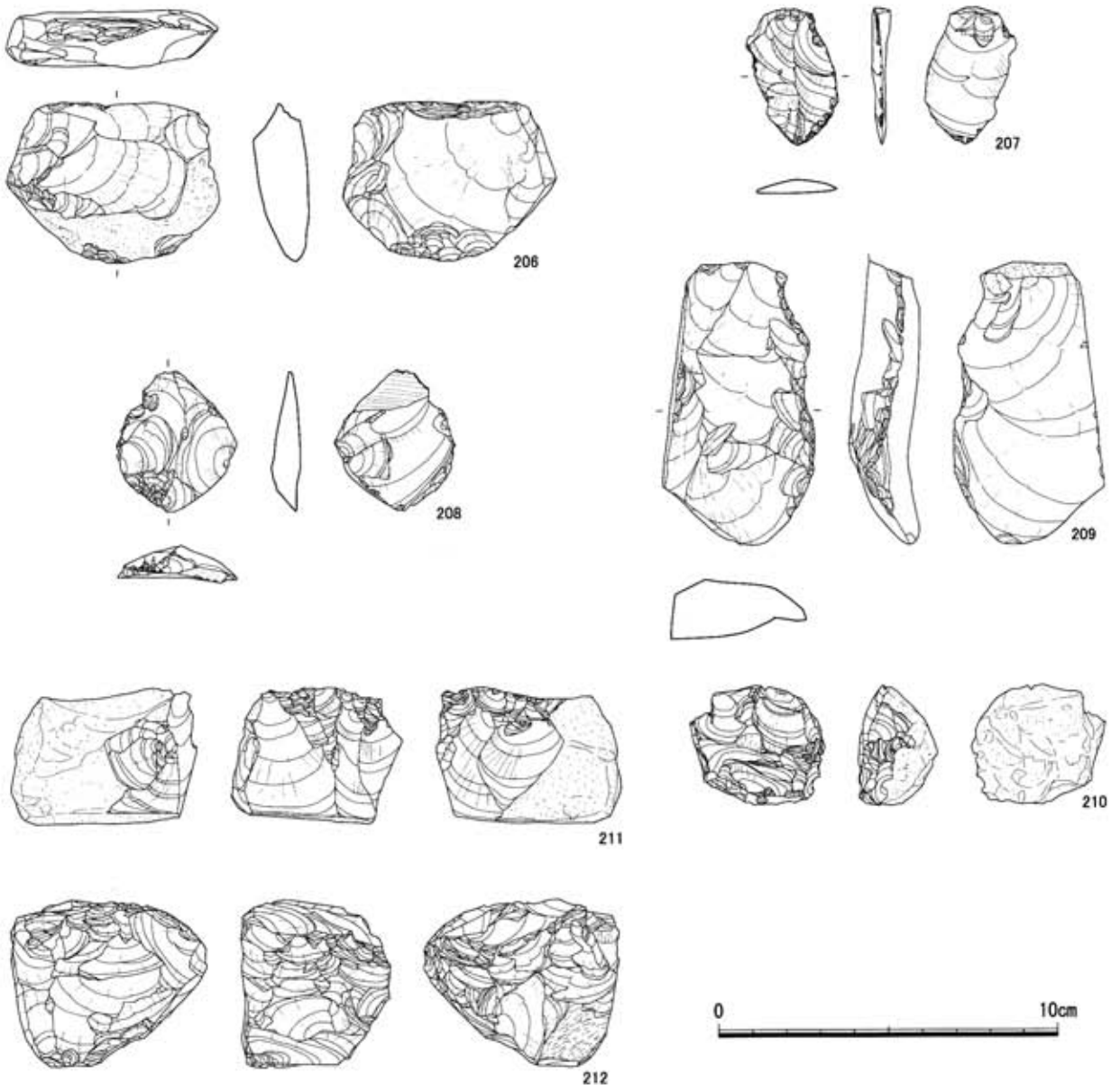
208は黒曜石の縦長剥片である。打面は不明。実測図主要剥離面側の左下側面に自然面が残存する。一方の湾曲する長辺側に、両面の刃縁に微細剥離がみられる。刃角は41°である。209は安山岩の縦長剥片である。打面と一方の長辺が自然面で、ブロック状の石核から剥離されたと思われる。背面は縦方向の剥離が主体で、縦長剥片を取っている。もう一方の側辺には刃部の調整剥離はなく、背面側を中心に微細剥離と磨耗痕がみられる。剥片の形状をそのまま残す片刃である。刃角は部位によって幅があり、34°～44°である。

石核

210は黒曜石の小型石核である。剥片を割り取った作業面は一面のみで、打撃は上下2方向に打面転移して行われる。打面は自然面で調整はない。剥離の大きさは2㎝×2㎝以下で、縦横比1：1で小型の剥片を割り取っている。UFなどの小型石器用の石核か。211は黒曜石の石核である。作業面を変えながら同一方向から連続して打撃を加えている。剥離は3面のみにみられ、他は自然面で本来の礫の形状をよく留める。打面は自然面で、調整はされない。ただし、実測図上で左側の面のみ、剥離面に打面転移を行い、横方向に剥離している。剥離面は



第25図　SD01環濠出土石器②



第26図　SD01環濠出土石器③

長さ３cm、幅2.5cm程度で、背面が自然面の縦長剥片を割り取っている。自然面を剥ぐ途中で廃棄された可能性もある。212は安山岩製の石核である。打面、作業面をともに転移しながら、全面に打撃を加えている。剥離の大きさは不揃いだが、小型で横長のものが多い。実測図上で右側の面のみに、自然面が残存する。部分的に、剥離面の稜上に敲打痕がみられ、敲石として転用された可能性がある。

ト　SD01環壕上層出土石器（第27図）

石庖丁

213は小型の外湾刃半月形で、紐孔部分で欠損する。刃部は研ぎ直され、直線刃に変化している。石材は立岩産の赤紫色泥岩。紐孔は、回転穿孔による１孔が残存する。背部は面をもち、体部の断面は直線的に、刃部は両刃に研磨される。実測図左面の端部から刃部左側と、その裏側の端部は、縦方向の研磨で鋭く研ぎ出される。体部の研磨は斜方向が主体。左面の刃部稜線上と体部を中心として、全体的に磨耗する。

扁平片刃石斧

214は完形品で、石材は層灰岩である。石材の層理は側面側に入り、主面と平行する。平面形は台形、側面形は前主面が直線的で、後主面は緩やかに湾曲する。刃部は横方向に緩やかに研ぎ出され、鏑は不明瞭である。研磨は全面に施されるが、側部に調整剥離が残存する。両主面と基部には、柄との緊縛による紐ずれ痕が観察される。

柱状片刃石斧

215は小型品の基部から抉り部の破片である。石材は層灰岩。基部は尖るように、抉りは浅い台形に研磨される。前主面、後主面ともに緩やかに湾曲しながら、下方に向けて厚みを増す。横断面は長方形。研磨は全面に粗く施され、前主面を中心に剥離痕や敲打痕を残す。一方の側面は剥落した後に再研磨される。敲打段階に破損し、再利用を試みたものか。

両刃石斧

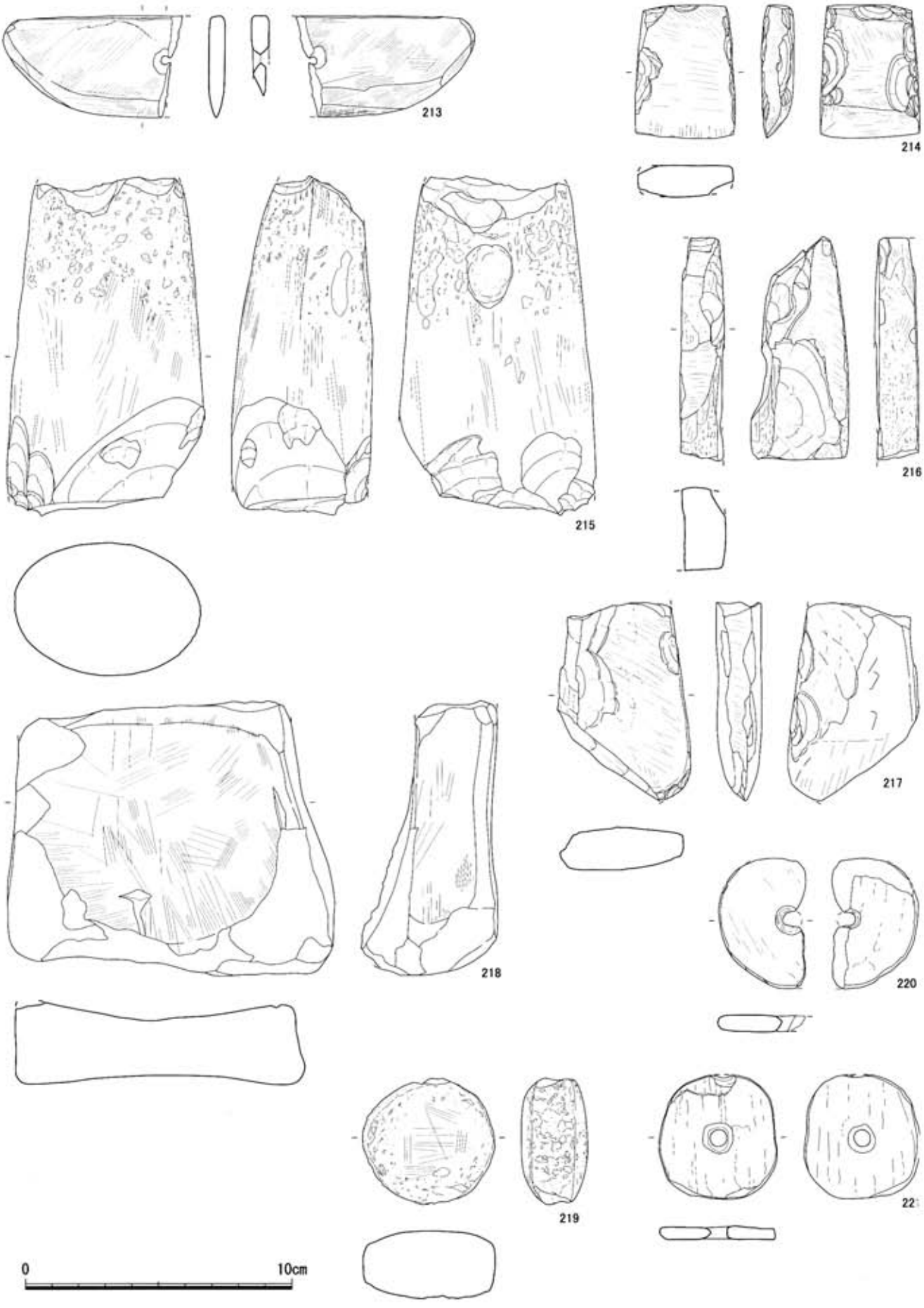
216は小型の両刃石斧で、基部と側面の一部分を欠損する。石材は緑色片岩で、層理が側面に入り主面と平行する。平面形は台形で、刃部は弧刃に復元される。側面形は扁平で、刃部は偏った両刃である。横断面形は中央が膨らむ長方形。主面は、斜方向に粗く研磨され、長辺を中心に製作時の打裂痕を残す。側面は横方向に研磨される。非常に薄く、加工斧として用いた可能性もある。厚斧率は34％。217は今山産玄武岩製の太形蛤刃石斧で、刃部と基部を欠損する。平面形は、基部が狭く、刃部に向けて広がる長台形である。両側面中央に、長軸方向の緩やかな稜をもつ。横断面形は厚みのある楕円形。基部側に敲打痕を残すが、下部は縦、斜方向に丁寧に研磨される。下端には大きな割れ面の上に連続する剥離痕が見られ、破損後に敲石に転用されたと思われる。厚斧率は71.6％。

砥石

218は方形の砥石で、５面を使用している。砂岩製。粒度は、サンドペーパーで400～600番相当の中目である。実測図上方の面は、破損後に再利用され、本来の平面形は細長い長方形と思われる。

磨石

219は小型・円形の磨石で、火成岩製である。全面に敲打痕と研磨が切り合い、とくに側面は横方向の研磨で面を持つ。横断面形は長方形である。意図的に作られた形態であり、石錘や他の用途に用いられた可能性もある。ただし、紐ずれ痕などの他の使用痕はみられない。



第27図　SD01環濠出土石器④

紡錘車

220～221は片岩製の紡錘車で、220は1/2の残存、221は完形品である。２点とも回転穿孔で、両面から孔を穿たれており、内部直径は220が0.5cm、221が0.6cmである。側部は研磨されて面を持つが、220は整形が雑で、隅丸方形に近い。221は円形に復元される。

チ　その他の遺構、包含層出土石器（第28図）

224：SX10、226・227：SD01上部包含層、その他：検出面出土である。

石庖丁

222は大型の三角形石庖丁の再加工品である。石材は頁岩質砂岩。紐孔は回転穿孔で、内径、外径ともに小さい。風化が進行し、研磨痕は不明。断面は薄く直線的で、刃部は両刃に研ぎ出される。紐孔部を通る破損の後、再研磨により背部が湾曲する。未貫通孔が１孔存在し、そこから破損しており、再加工の穿孔途中に割れて廃棄したと思われる。形態的に前期に属する可能性が高い。223は横長の外湾刃半月形で、石材は立岩産赤紫色泥岩である。紐孔は敲打後に回転穿孔され、後の研磨により敲打痕が痕跡的に残る。最大厚は紐孔付近にあり、背部は尖るように、刃部は両刃に研ぎ出される。研磨は縦方向が主体。両面とも、向かって左側の刃部から体部にかけて摩滅し、紐孔には紐ずれがみられる。

石剣

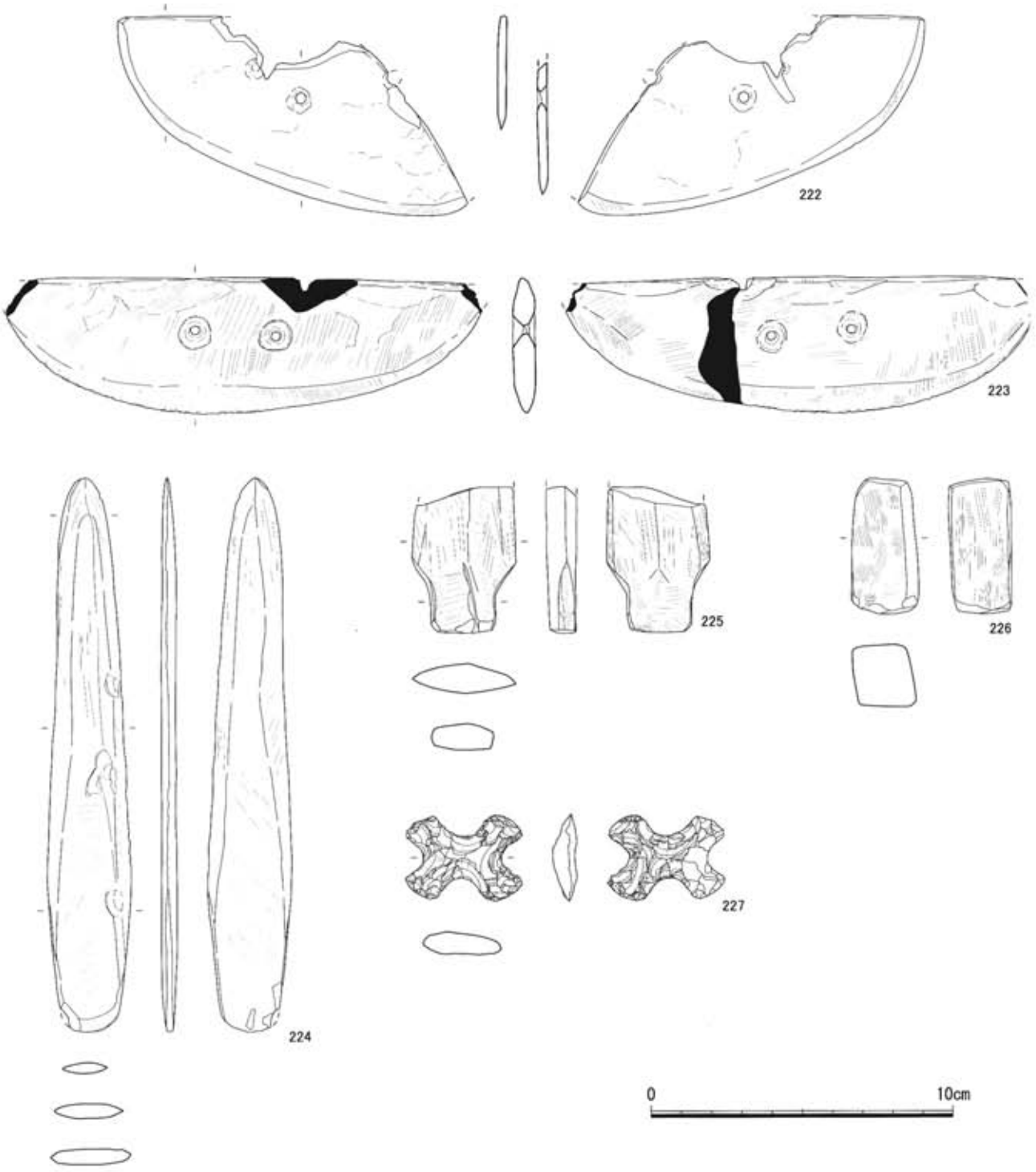
224は小型の磨製石剣または石槍で、ほぼ完形品である。石材は頁岩質砂岩。薄く平坦に研磨され、鎬は両面とも不明瞭である。側部は基端から４cm程度まで研磨され、面をもつ。横断面形は基部が長方形、刃部は細長い六角形で、鋒部は紡錘形である。風化しており、緊縛痕や使用痕はみられない。225は有茎磨製石剣の小型品で、鋒部を欠損する。石材は層灰岩である。茎部の平面形は四角、関部は鈍角で緩やかに湾曲する。刃部は上方に向かって直線的に幅を狭める。横断面形は菱形。関部から茎部に至る側面と端部は横方向の研磨で面を持つ。

砥石

226は砂岩製の小型砥石である。直方体の完形品で、全面を使用している。粒度はサンドペーパーの1000番相当で、中目である。持ち砥石であろう。

不明石器

227は十字状の形態の石器で、石材は安山岩。細かな剥離で丁寧に整形している。４つの抉り部分には僅かな潰れが観察され、使用痕の可能性がある。縄文時代のものか。



第28図　包含層検出面出土石器

表2　幸津遺跡出土土器一覧表

挿図番号	器種	種別	出土遺構	法量（cm）			色調	登録番号	PL
				口径	器高	底径			
15-1	壺	弥生土器	SD01環壕下層	12.7	(9.8)		浅黄橙色	06003082	8
15-2	壺	弥生土器	SD01環壕下層		(2.6)	8.4	にぶい黄橙色	06003081	
15-3	壺	弥生土器	SD01環壕下層		(3.7)	14.6	橙色	06003080	
15-4	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(4.8)		浅黄橙色	06003090	
15-5	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(3.8)		明褐灰色	06003086	8
15-6	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(4.0)		にぶい橙色	06003091	
15-7	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(6.6)		黒色	06003105	
15-8	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(5.8)		橙色	06003085	8
15-9	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(3.0)		にぶい褐色	06003087	
15-10	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(2.6)		橙色	06003088	8
15-11	甕	弥生土器	SD01環壕下層	22.8	(7.0)		淡黄色	06003089	8
15-12	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(4.3)	7.0	浅黄橙色	06003079	8
15-13	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(4.4)	8.2	にぶい橙色	06003072	8
15-14	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(5.1)	5.8	にぶい橙色	06003077	
15-15	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(5.7)	6.8	にぶい赤褐色	06003074	8
15-16	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(6.7)	7.9	にぶい橙色	06003073	
15-17	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(4.6)	10.0	にぶい褐色	06003076	
15-18	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(2.6)	7.6	にぶい褐色	06003075	8
15-19	甕	弥生土器	SD01環壕下層		(3.3)	7.2	にぶい褐色	06003078	
15-20	蓋	弥生土器	SD01環壕下層		(2.0)		にぶい赤褐色	06003083	
15-21	蓋	弥生土器	SD01環壕下層		(2.9)		にぶい褐色	06003084	
16-22	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(8.2)	5.0	暗灰黄色	06001985	8
16-23	壺	弥生土器	SD01環壕中層	10.0	14.0	6.4	にぶい黄褐色	06001989	8
16-24	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(7.3)		にぶい黄橙色	06003181	
16-25	壺	弥生土器	SD01環壕中層	9.0	(11.1)		暗褐色	06001984	8
16-26	壺	弥生土器	SD01環壕中層	10.6	(6.0)		浅黄橙色	06003168	
16-27	壺	弥生土器	SD01環壕中層	10.6	(4.8)		橙色	06003169	8
16-28	壺	弥生土器	SD01環壕中層	11.4	(2.8)		にぶい橙色	06003167	
16-29	壺	弥生土器	SD01環壕中層	14.8	(3.5)		橙色	06003170	
16-30	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(5.8)		にぶい橙色	06003182	8
16-31	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(1.9)	5.0	にぶい橙色	06003119	
16-32	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(1.3)	5.6	橙色	06003117	
16-33	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(3.9)	5.6	にぶい橙色	06003118	
16-34	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(3.8)	7.1	にぶい橙色	06003116	
16-35	壺	弥生土器	SD01環壕中層	23.5	(10.3)		浅黄橙色	06001990	8
16-36	壺	弥生土器	SD01環壕中層	25.8	(7.5)		浅黄橙色	06003180	
16-37	壺	弥生土器	SD01環壕中層	17.2	(19.7)		橙色	06001991	8
16-38	壺	弥生土器	SD01環壕中層	24.4	(6.6)		橙色	06003173	
16-39	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(28.9)	8.9	明赤褐色	06001986	
16-40	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(3.2)		橙色	06003175	
16-41	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(4.4)		橙色	06003176	
16-42	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(3.1)		灰黄褐色	06003174	
16-43	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(3.9)	10.8	浅黄橙色	06003114	
16-44	壺	弥生土器	SD01環壕中層		(8.0)	10.0	明赤褐色	06003113	8
16-45	壺	弥生土器	SD01環壕中層	47.2	(11.2)		明赤褐色	06001983	
17-46	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(3.5)		にぶい黄橙色	06003043	
17-47	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(3.7)		橙色	06003171	
17-48	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(3.7)		浅黄橙色	06003178	
17-49	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(4.9)		暗灰色	06003040	
17-50	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(4.6)		灰褐色	06003035	
17-51	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.7)		にぶい褐色	06003034	8
17-52	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(7.6)		にぶい褐色	06003029	
17-53	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(7.3)		にぶい橙色	06003032	8
17-54	甕	弥生土器	SD01環壕中層	21.7	(6.6)		にぶい褐色	06003031	8
17-55	甕	弥生土器	SD01環壕中層	21.4	(9.2)		にぶい黄橙色	06003102	
17-56	甕	弥生土器	SD01環壕中層	28.2	(7.0)		橙色	06003098	8
17-57	甕	弥生土器	SD01環壕中層	20.5	(6.6)		明褐色	06003097	
17-58	甕	弥生土器	SD01環壕中層	23.6	(10.3)		橙色	06001988	
17-59	甕	弥生土器	SD01環壕中層	23.8	(17.3)		明褐色	06001992	
17-60	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(7.1)		灰黄色	06003103	
17-61	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(8.1)		灰褐色	06003033	8
17-62	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.9)		にぶい褐色	06003042	
17-63	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(7.2)		にぶい褐色	06003037	
17-64	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.7)		にぶい黄橙色	06003041	

挿図番号	器種	種別	出土遺構	法量（cm）			色調	登録番号	PL
				口径	器高	底径			
17-65	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(8.7)		灰褐色	06003030	
17-66	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(8.4)		黒褐色	06003108	
17-67	甕	弥生土器	SD01環壕中層	20.9	(6.0)		橙色	06003096	
17-68	甕	弥生土器	SD01環壕中層	21.9	(5.0)		橙色	06003036	
17-69	甕	弥生土器	SD01環壕中層	26.4	(11.5)		橙色	06001993	
17-70	甕	弥生土器	SD01環壕中層	27.4	29.0		明赤褐色	06001987	8
18-71	甕	弥生土器	SD01環壕中層	23.0	(12.1)		にぶい黄橙色	06001998	
18-72	甕	弥生土器	SD01環壕中層	26.3	(9.9)		黄橙色	06003101	
18-73	甕	弥生土器	SD01環壕中層	28.4	(12.1)		にぶい黄褐色	06001994	8
18-74	甕	弥生土器	SD01環壕中層	25.0	(8.2)		灰黄褐色	06003094	
18-75	甕	弥生土器	SD01環壕中層	28.8	(8.9)		灰黄褐色	06003122	
18-76	甕	弥生土器	SD01環壕中層	29.0	(8.9)		にぶい黄橙色	06001999	
18-77	甕	弥生土器	SD01環壕中層	29.5	(7.8)		にぶい黄褐色	06003124	
18-78	甕	弥生土器	SD01環壕中層	22.3	(6.0)		黒褐色	06003100	
18-79	甕	弥生土器	SD01環壕中層	23.3	(5.9)		にぶい黄橙色	06003099	
18-80	甕	弥生土器	SD01環壕中層	24.8	(11.4)		にぶい黄橙色	06001997	
18-81	甕	弥生土器	SD01環壕中層	23.2	(9.6)		にぶい黄褐色	06003095	8
18-82	甕	弥生土器	SD01環壕中層	24.6	(8.5)		にぶい黄褐色	06003123	
18-83	甕	弥生土器	SD01環壕中層	24.4	(16.2)		にぶい黄褐色	06001995	
18-84	甕	弥生土器	SD01環壕中層	25.5	(8.5)		にぶい黄橙色	06003126	
19-85	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(4.8)	7.5	橙色	06003152	
19-86	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(4.1)	7.6	橙色	06003050	
19-87	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(4.4)	8.0	にぶい黄橙色	06003053	
19-88	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(4.4)	9.7	浅黄橙色	06003166	
19-89	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.0)	7.2	橙色	06003054	
19-90	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.4)	7.5	灰褐色	06003055	
19-91	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.2)	7.6	橙色	06003027	
19-92	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.9)	8.0	橙色	06003052	
19-93	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.3)	7.6	にぶい橙色	06003159	
19-94	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.3)	8.2	にぶい橙色	06003057	
19-95	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.0)	8.2	橙色	06003160	
19-96	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.9)	8.3	橙色	06003025	8
19-97	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(9.6)	7.6	橙色	06003161	
19-98	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(10.4)	7.1	にぶい黄橙色	06003045	
19-99	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(9.5)	7.8	橙色	06003047	
19-100	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(10.0)	7.8	淡赤橙色	06003026	8
19-101	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(9.6)	8.2	にぶい黄橙色	06003048	
19-102	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(10.5)	7.5	浅黄橙色	06003046	
19-103	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.1)	6.6	橙色	06003150	
19-104	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.1)	6.2	浅黄橙色	06003157	
19-105	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.7)	6.0	橙色	06003153	
19-106	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.7)	8.0	橙色	06003154	
19-107	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.3)	6.6	淡赤橙色	06003158	
19-108	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.3)	7.2	にぶい橙色	06003155	
19-109	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(6.4)	6.2	灰白色	06003151	
19-110	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(5.7)	7.6	橙色	06003156	
19-111	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(7.0)	7.5	明赤褐色	06003134	
19-112	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(17.1)	7.4	橙色	06003028	
19-113	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(8.9)	8.0	橙色	06003149	
19-114	甕	弥生土器	SD01環壕中層		(10.4)	8.0	にぶい橙色	06003044	
19-115	蓋	弥生土器	SD01環壕中層		(2.0)		にぶい褐色	06003164	
19-116	蓋	弥生土器	SD01環壕中層		(3.0)		にぶい褐色	06003084	
19-117	蓋	弥生土器	SD01環壕中層		(2.0)		灰白色	06003163	
19-118	蓋	弥生土器	SD01環壕中層		(2.6)		橙色	06003162	
20-119	甕	弥生土器	SD01環壕中層	30.4	(8.6)		橙色	06001996	8
20-120	甕	弥生土器	SD01環壕中層	50.8	(18.2)		橙色	06003125	9
20-121	壺	弥生土器	SD01環壕上層		(5.2)		浅黄橙色	06003063	
20-122	壺	弥生土器	SD01環壕上層		(6.7)	4.0	浅黄橙色	06003069	9
20-123	壺	弥生土器	SD01環壕上層	19.8	(7.2)		にぶい褐色	06003062	
20-124	壺	弥生土器	SD01環壕上層	26.8	(3.5)		灰白色	06003061	
20-125	壺	弥生土器	SD01環壕上層	27.5	(3.6)		橙色	06003060	
20-126	壺	弥生土器	SD01環壕上層	54.8	(14.0)		橙色	06003071	9
20-127	壺	弥生土器	SD01環壕上層	53.4	(8.9)		にぶい黄褐色	06003137	9
20-128	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(4.6)	10.1	橙色	06003065	

挿図番号	器種	種別	出土遺構	法量（cm）			色調	登録番号	PL
				口径	器高	底径			
20-129	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(5.6)	10.2	橙色	06003066	
21-130	甕	弥生土器	SD01環壕上層	24.7	(6.3)		にぶい黄褐色	06003131	
21-131	甕	弥生土器	SD01環壕上層	26.6	(9.0)		橙色	06003193	
21-132	甕	弥生土器	SD01環壕上層	25.0	(5.3)		橙色	06003194	
21-133	甕	弥生土器	SD01環壕上層	24.3	(4.4)		浅黄橙色	06003196	
21-134	甕	弥生土器	SD01環壕上層	28.8	(3.5)		浅黄橙色	06003195	
21-135	甕	弥生土器	SD01環壕上層	32.4	(9.5)		明赤褐色	06003132	9
21-136	甕	弥生土器	SD01環壕上層	31.6	(18.4)		にぶい橙色	06003203	
21-137	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(3.5)	6.8	橙色	06003192	
21-138	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(4.0)	7.1	橙色	06003201	
21-139	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(4.7)	8.0	橙色	06003200	
21-140	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(4.9)	7.1	にぶい橙色	06003187	
21-141	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(6.5)	6.7	橙色	06003190	
21-142	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(5.8)	7.7	橙色	06003191	
21-143	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(7.9)	5.8	橙色	06003185	
21-144	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(8.7)	6.4	橙色	06003186	
21-145	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(8.8)	7.5	橙色	06003189	
21-146	甕	弥生土器	SD01環壕上層		(18.3)	7.8	橙色	06003188	
21-147	蓋	弥生土器	SD01環壕上層		(11.5)		橙色	06003184	
21-148	鉢	弥生土器	SD01環壕上層	15.2	(7.9)	6.5	にぶい黄橙色	06003135	9
21-149	高杯	弥生土器	SD01環壕上層	31.4	(3.9)		浅黄橙色	06003059	
21-150	高杯	弥生土器	SD01環壕上層	26.4	(6.8)		橙色	06003129	
21-151	高杯	弥生土器	SD01環壕上層		(16.0)	17.2	橙色	06003136	9
22-152	壺	土師器	SH05	12.2	(5.1)		にぶい黄橙色	06003019	
22-153	壺	土師器	SH05	14.6	(13.3)		にぶい黄橙色	06003017	
22-154	高杯	土師器	SH05	14.8	(4.6)		明赤褐色	06003110	
22-155	高杯	土師器	SH05	15.4	(6.2)		橙色	06003018	
22-156	壺	土師器	SH06	11.1	(6.8)		にぶい橙色	06003020	
22-157	鉢	土師器	SH06	13.7	(4.4)		赤灰色	06003021	
22-158	壺	弥生土器	SH07		(11.0)	6.6	明赤褐色	06003022	10
22-159	鉢	弥生土器	SH07	22.8	14.2	8.8	明赤褐色	06003023	10
22-160	高杯	土師器	SX02	19.0	(5.8)		橙色	06003109	9
22-161	高杯	土師器	SX02	17.8	(6.5)		浅黄橙色	06003009	9
22-162	高杯	土師器	SX02	19.7	(7.1)		橙色	06003010	9
22-163	高杯	土師器	SX03	17.8	(5.4)		明赤褐色	06003011	9
22-164	高杯	土師器	SX03	18.1	(6.8)		明赤褐色	06003012	9
22-165	高杯	土師器	SX04	17.0	(5.5)		にぶい橙色	06003013	
22-166	壺	土師器	SX11		(6.6)		浅黄橙色	06003016	
22-167	鉢	土師器	SX11	15.0	(5.1)		橙色	06003015	
22-168	高杯	土師器	SX11	17.5	(6.7)		橙色	06003014	9
22-169	壺	土師器	SX13	15.1	29.0		橙色	06003024	10
23-170	甕	弥生土器	SD01上部包含層	22.5	(12.2)		灰黄褐色	06003001	
23-171	器台	弥生土器	SD01上部包含層	14.6	20.3	14.4	赤褐色	06003004	10
23-172	甕	弥生土器	SD01上部包含層	26.6	(17.2)		橙色	06003002	
23-173	甕	弥生土器	SD01上部包含層	36.3	(15.1)		明褐色	06003130	
23-174	壺	土師器	SD01上部包含層	15.8	(7.5)		明赤褐色	06003003	
23-175	高杯	土師器	SD01上部包含層	20.0	(6.5)		明赤褐色	06003007	10
23-176	壺	弥生土器	SD01上部包含層	7.5	7.1		橙色	06003006	10
23-177	椀	陶器	SD01上部包含層		(4.7)	9.2	オリーブグリーン	06003008	10
23-178	土製品	弥生土器	SD01上部包含層		8.8		にぶい橙色	06003141	
23-179	鉢	弥生土器	包含層	14.3	6.9		にぶい黄橙色	06003140	
23-180	杯蓋	須恵器	検出面	13.0	3.7		灰色	06003142	
23-181	杯蓋	須恵器	検出面	12.7	3.2		灰色	06003143	
23-182	杯蓋	須恵器	検出面	14.7	4.3		灰白色	06003144	
23-183	杯身	須恵器	検出面	11.3	(3.6)		灰黄色	06003148	
23-184	杯身	須恵器	検出面	12.2	5.1		灰白色	06003146	
23-185	杯身	須恵器	検出面	12.3	4.4		灰色	06003147	
23-186	杯身	須恵器	検出面	11.1	3.7		灰色	06003145	
23-187	壺	土師器	検出面		(14.4)		浅黄橙色	06003139	
23-188	壺	弥生土器	包含層	14.1	(13.9)	8.7	明赤褐色	06003093	10
23-189	甕	弥生土器	検出面	30.6	(11.4)		にぶい黄橙色	06003138	
23-190	壺	弥生土器	検出面		(16.5)	6.9	橙色	06003092	10

第3表　幸津遺跡出土石器一覧表

挿図番号	遺物登録番号	出土地点	器種	法量（cm）				刃角	石材	備考
				最大長	最大幅	最大厚	重量			
24-191	06003732	SD01中層	石庖丁	14.1	8.5	0.84	174.5	40～56°	頁岩質砂岩	孔間4.1cm　背孔2.5/2.6cm 内径0.5cm　外径1.35cm
24-192	06003705	SD01中層	石庖丁	[9.25]	[6.3]	0.7	59.2	30°	頁岩質砂岩	孔間推定3.3cm　背孔2.5cm 内径0.5cm　外径1.5cm
24-193	06003706	SD01中層	石庖丁？	[6.0]	[4.3]	0.5	20.6	24°	片岩	
24-194	06003702	SD01中層	柱状片刃石斧	11.4	[3.6]	[4.0]	227.6	60°	ホルンフェルス	
24-195	06003712	SD01中層	砥石	25.45	10.65	7.25	3470.0	－	花崗岩	
24-196	06003698	SD01下層	太形蛤刃石斧	[9.5]	[5.95]	[4.0]	213.2	56°	安山岩	
25-197	06003699	SD01中層	両刃石斧	[9.9]	[6.05]	[3.35]	318.2	－	細粒砂岩	
25-198	06003713	SD01中層	砥石	[5.5]	[6.75]	0.9	42.6	－	砂岩	
25-199	06003717	SD01中層	磨石	[8.4]	[6.0]	[4.7]	274.6	－	安山岩	
25-200	06003716	SD01中層	磨石	[8.5]	[6.1]	[5.05]	317.4	－	安山岩	
25-201	06003719	SD01中層	スクレイパー	5.3	5.85	2.2	68.4	58°	安山岩	
25-202	06003722	SD01中層	スクレイパー	2.65	5.75	1.2	16.6	56°	安山岩	
25-203	06003721	SD01中層	スクレイパー	4.0	5.2	1.4	30.0	62°	安山岩	
25-204	06003720	SD01中層	スクレイパー	3.45	5.15	1.2	21.8	75°	安山岩	
25-205	06003723	SD01中層	スクレイパー	5.2	5.0	1.0	24.0	26°	安山岩	
26-206	06003724	SD01中層	楔形石器	4.7	6.2	1.7	58.6	－	安山岩	
26-207	06003727	SD01中層	使用痕のある剥片	4.0	2.7	0.6	4.4	42/25°	黒曜石	
26-208	06003726	SD01中層	使用痕のある剥片	4.1	3.5	1.1	10.8	41°	黒曜石	
26-209	06003725	SD01中層	使用痕のある剥片	8.3	4.4	2.1	77.6	34～44°	安山岩	
26-210	06003729	SD01中層	石核	3.5	4.0	2.3	27.0	－	黒曜石	
26-211	06003730	SD01中層	石核	4.0	5.4	5.0	115.4	－	黒曜石	
26-212	06003728	SD01中層	石核	4.9	5.7	4.3	139.0	－	安山岩	
27-213	06003707	SD01上層	石庖丁	[6.75]	[3.8]	0.65	25.4	42/60°	赤紫色泥岩	立岩産　背孔1.65cm 内径0.35cm　外径0.9cm
27-214	06003704	SD01上層	扁平片刃石斧	5.0	3.8	1.2	39.8	27°	層灰岩	
27-215	06003703	SD01上層	柱状片刃石斧	[8.4]	[1.7]	[3.7]	82.6	64°	層灰岩	
27-216	06003701	SD01上層	両刃石斧	[7.4]	[5.0]	[1.7]	104.0	60°	片岩	
27-217	06003700	SD01上層	太形蛤刃石斧	[12.8]	[7.4]	[5.3]	800.0	－	玄武岩	今山産
27-218	06003714	SD01上層	砥石	[10.3]	[12.25]	[5.15]	685.0	－	砂岩	
27-219	06003718	SD01上層	磨石	[4.75]	4.95	2.55	72.0	－	火成岩系	
27-220	06003711	SD01上層	紡錘車	[4.9]	[3.3]	[0.6]	14.6	－	片岩	孔径　0.5
27-221	06003710	SD01上層	紡錘車	4.65	4.5	0.5	17.4	－	片岩	孔径　0.6
28-222	06003733	検出面	石庖丁	10.4	6.7	0.32	32.0	38°	頁岩質砂岩	孔間推定3.0cm　背孔2.8cm 内径0.4cm　外径1.0cm
28-223	06003734	検出面	石庖丁	[15.6]	4.5	0.73	76.5	38～46°	赤紫色泥岩	立岩産　孔間2.7cm　背孔1.7 /1.9cm　内径0.3cm外径1.0cm
28-224	06003708	SX10	磨製石剣 or 石槍	18.2	2.8	0.5	38.8	56°	頁岩質砂岩	
28-225	06003709	検出面	磨製石剣	[4.8]	3.4	[1.0]	22.2	22°	層灰岩	
28-226	06003715	SD01上部包含層	砥石	4.45	2.25	2.05	34.4	－	砂岩	
28-227	06003731	SD01上部包含層	不明石器	2.8	3.8	0.8	6.6	－	安山岩	

第4章　まとめ

1．幸津遺跡について

幸津遺跡の調査では、弥生時代前期の環濠1条、後期前半の竪穴住居跡1棟、古墳時代前期の竪穴住居跡4棟、土器埋納土坑3基、古墳時代中期～後期の竪穴住居跡2棟、土器採掘坑とみられる土坑5基、時期不明の掘立柱建物跡1棟等を検出した。

環壕は、弥生時代前期後半に掘削され、中期前半までに埋没したとみられる。調査で検出した環濠の長さは23mであるが、これは環壕のごく一部に過ぎない。遺跡の地形及び北部九州の前期環濠、特に佐賀平野の前期環壕を参考に幸津遺跡の環壕を復元すると長径150m、短径130mの横長に近い卵形に復元できる[1]。環壕内部の状況を窺う資料は少ないが、環濠内の多量の遺物は、未調査区に弥生時代前期の集落の存在を予想させる。

また、長軸が6mを超える大型竪穴住居跡の存在は、後期の集落がほとんど知られていなかった安良川左岸の低位段丘部における後期前半の集落の貴重な発見例となった。

古墳時代前期の土器埋納土坑は、高杯の杯部を折り取り重ねたものを小さな土坑に埋納したもので、これまで佐賀県内では知られていない事例である。佐賀平野では、弥生時代から古墳時代にかけて井戸や竈の廃絶に伴う儀礼で完形の土器を用いることはあるが、高杯の杯部のみを重ねることはない。なんらかの祭祀に用いられたものと推察するが、現時点では、その性格を明らかにすることはできない。

いくつか切り合いを持つ不整形の土坑は、出土土器より古墳時代中期から後期を中心とする時期のものと推定される。これらの土坑が、下部に存在するローム層に達していることから、粘土の採掘を目的に掘削された粘土採掘坑である可能性が高い。

掘立柱建物跡1棟については、所属時期を明らかにすることはできなかった。1間×2間の柱間を持つことから、弥生時代以降の所産であると推定される。

2．佐賀平野の前期環壕について

これまで佐賀県で確認された前期環濠は、8遺跡9地点である[2]。唐津平野や多久盆地、伊万里市域では確認されていない。前期前半に遡る可能性が高い小楠遺跡以外の環濠は、いずれも前期後半段階に出現する。埋没は、中期初頭から前半にかけての時期である。当該期の沖積地上の環濠は未発見である。

遺跡名	所在地	時　期	規 模（㎡）	備　考
八ツ並金丸遺跡	鳥栖市	前期後半～中期初頭	430㎡	
幸津遺跡	鳥栖市	前期後半～中期前半	14,500㎡	
町南遺跡	みやき町	前期後半～中期初頭	9,400㎡	
瀬ノ尾遺跡	吉野ヶ里町	前期後半～中期初頭	320㎡	
松原遺跡	吉野ヶ里町	前期後半～中期初頭	17,300㎡	
吉野ヶ里遺跡	神埼市郡	前期後半～中期前半	20,000㎡	田手二本黒木地区
吉野ヶ里遺跡	神埼市郡	前期後半？～中期初頭？	340㎡	吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区
的五本黒木遺跡	神埼市	前期後半～中期初頭？	－	
小楠遺跡	武雄市	前期前半？～中期初頭	19,000㎡	

表4　佐賀平野の前期環壕

A　前期環濠の規模と立地

これらの環濠は、その規模により①環濠の平面形が円形で、内径20m前後の小型の環濠（八ツ並金丸遺跡、瀬ノ尾遺跡、吉野ヶ里遺跡吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区）と、②環濠の平面形が楕円形もしくは卵形で、内径が90m（推定を含む。）を超える大型の環濠（幸津遺跡、町南遺跡、松原遺跡、小楠遺跡、吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区）の二つに大別できる。

大型の環濠は、丘陵頂部の裾に環濠を巡らし、丘陵頂部が小山のように盛り上がるタイプ（小楠遺跡、幸津遺跡）[3]と段丘の平坦部分に環濠を巡らし、その一辺を段丘縁辺に沿わせるタイプ（松原遺跡・町南遺跡）、あまり比高差のない丘陵の頂部を取り囲むように環壕を巡らせるタイプ（吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区）に分類できる。いずれも低位または中位段丘上に営まれ、推定される環濠の面積は9,000～20,000㎡である。

吉野ヶ里遺跡は、標高約20mの丘陵頂部に位置し、県内では最大の20,000㎡という広大な面積を環濠で取り囲んでいる[1]。内部には、竪穴住居や貯蔵穴が多数つくられているが、前期末から中期前半のものが多数を占め、環濠掘削時期の遺構はほとんどみられない。ただし、環濠からは、前期後半段階の遺物も相当数出土することをみても、環濠周辺に生活空間があった可能性は高い。なお、当遺跡では、環濠埋没後も区画そのものは維持されたようで、中期初頭以降、竪穴住居や土坑等が環濠内部に集中し、甕棺墓等の墳墓は、環濠の外側に営まれる傾向がある。町南遺跡は環濠内部に貯蔵穴を持つ。前期後半段階の貯蔵穴の数は少なく、前期末に入り増加する。環濠内部の竪穴住居は、中期初頭以降につくられる。松原遺跡は、前期段階の竪穴住居は、ほとんど検出されていないが、貯蔵穴は散見される。中期前半から後半にかなり数の土坑が検出され、盛行期を迎える。

小型の環濠は、いずれも平面円形を基調とし、出入口一ヶ所を有する。吉野ヶ里遺跡の小型環濠は中世の遺構や削平により、濠以外の情報は得られない。吉野ヶ里丘陵地区Ⅶ区の環濠は、前期環濠の北側に隣接する。

吉野ヶ里遺跡の大小の環濠は、ほぼ、同時期に営まれると考えられる。瀬ノ尾遺跡は、環濠や内部施設について記述がなく、詳細は不明だが、図面や写真で判断する限り、その内部に当該期の遺構は見当たらない。八ツ並金丸遺跡では、環濠の掘削時期に竪穴住居１棟、貯蔵穴２基が存在する。続く前期末段階にも竪穴住居と貯蔵穴が存在することから、環濠が機能する期間に集落関係の遺構が営まれたとみることができる。ただし、環濠内の面積は非常に狭く、複数の住居が同時に営まれた可能性は低い。

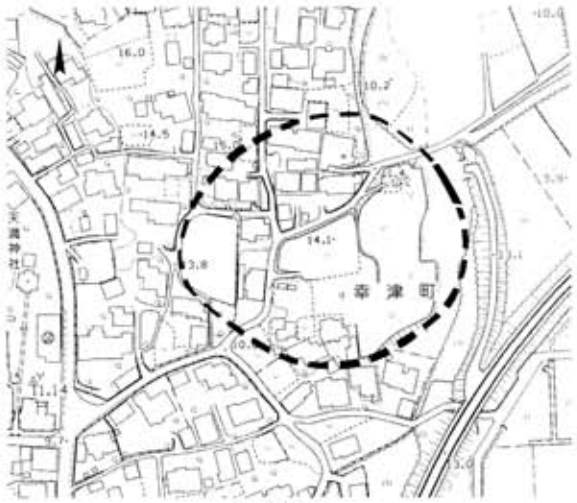
B　前期大型環濠集落の変遷

吉野ヶ里遺跡は、前期環濠埋没後、南部丘陵地区を中心に中期前半から中期末にかけ集落が営まれる。その後、後期初頭に前期環濠の南側200mの丘陵先端から墳丘墓の北を巡る約40haの規模を誇る大規模環濠集落が形成され、後期末まで維持される。

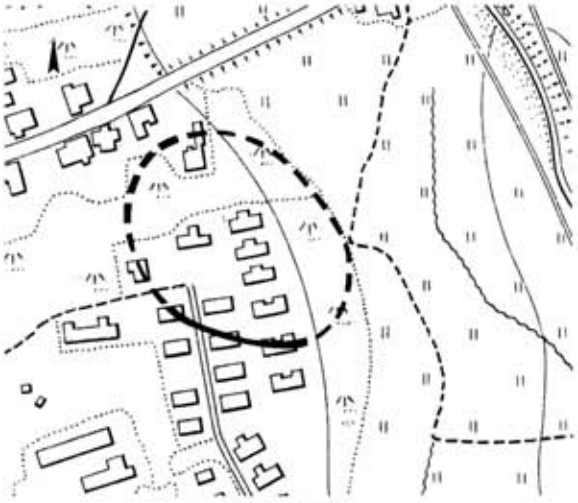
松原遺跡は、集落や墓地が中期から後期にかけて継続し、後期後半段階に多重の環濠を巡らし、その内部に祭場を思わせる空間が設けられる。環濠からは土器を始めとする遺物が多量に出土する。昭和40年代には、この環壕の南部付近に位置した弥生時代後期の石棺墓または甕棺墓から素環頭刀１口、鉄剣１口、方格規矩四神鏡１面が出土していることから、後期段階の松原遺跡は、集落と特定個人墓が営まれた遺跡とみられる。

町南遺跡では、前期環濠に沿って後期中頃に環濠が再掘削される。環濠の内外部に後期中頃から末の集落が営まれる。

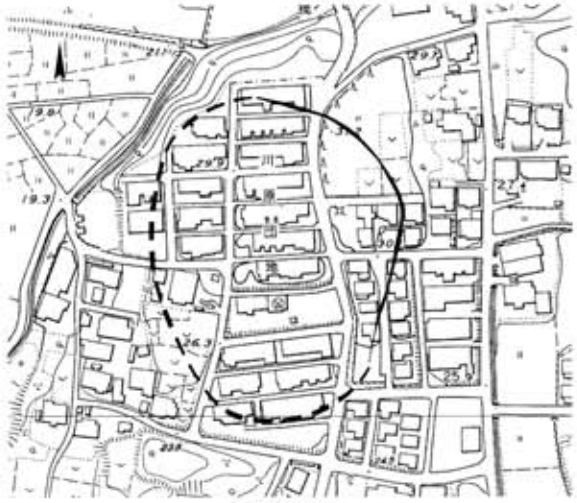
小楠遺跡は、中期段階に一時集落の規模が縮小するものの、前期環濠西側に位置する丘陵の斜面部に後期段階の竪穴住居跡からなる集落が形成される。



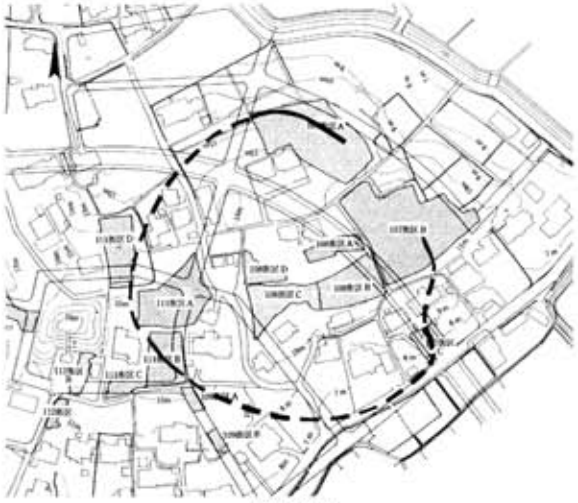
幸津遺跡



町南遺跡



松原遺跡



小楠遺跡

吉野ヶ里遺跡・田手二本黒木地区

0 100m (1/4000)

第29図　佐賀県内の弥生時代前期環濠

C　まとめ

①佐賀平野で前期に形成された環濠は、小型と大型の２種類に分類できる。

②前期の大規模環壕を有する遺跡（集落）は、断続的であるが中期、後期と継続し、弥生時代を通じ当該地区の拠点的集落となる。

①について、八ツ並金丸遺跡では、環濠が埋没するまでの期間に内部に竪穴住居跡が設けられたことは、間違いないようである。このため、この小型環濠が、貯蔵穴を囲むだけの目的でつくられたとは考えられない。ただし、小型環壕の面積は320～430㎡と狭く、複数の住居が同時期に営まれた可能性は低い。吉野ヶ里遺跡では、同時期に大型と小型の環壕が近接して営まれる。このことは、両者に性格の差が存在したことを推測させる。想像を逞しくすれば、小型環壕は豚やイノシシ等の家畜の飼育場を囲む空間ではないかと推察する。

②について、前期段階に環濠を巡らす遺跡は、中期・後期と遺構が存在し、弥生時代を通じて継続的に営まれた集落であった。前期の大規模環濠集落のうち、町南遺跡・松原遺跡・吉野ヶ里遺跡では、後期段階に再び環濠を巡らせることからも拠点的集落として位置づけられる。なお、前期環濠集落は、現段階では佐賀平野の東部地域に偏在する。地図に環濠集落をプロットすると有明海に注ぐ中小河川付近の段丘に作られるケースが多くみられるため、佐賀中部地域の巨瀬川・嘉瀬川流域や佐賀西部地区の祇園川・六角川流域でも将来発見される可能性がある。

註１）幸津遺跡では、環濠を第29図のように長径150m、短径130mに復元しているが、再度現地を踏査したところ、西北部方向にさらに大きく延びる可能性がある。

２）神埼市的五本黒木遺跡の環濠は、延長18mの直線的な濠で、地形等を考慮にいれてもどのような形態になるか不明である。このため、今回の考察からは除外する。

３）幸津遺跡は、段丘縁辺部が小山のように盛り上がった裾部分を巡る。環濠の検出面と西側の丘陵頂部では４mの比高差があり、形態的には小楠遺跡例に近い。ここでは、段丘の縁辺部であるが、小楠遺跡例として挙げる。

４）これまでの吉野ヶ里遺跡の前期環濠は、南側が卵形で、北側が鋭角に尖った三角形に復元されている。これは、①今回復元した前期環濠の北側の濠（出入り口が存在する部分）を中期初頭に掘削された条濠の一部とし、前期環濠と区別する。②中期初頭の条濠の北側を南北方向に延びる断面Ｖ字形の溝を前期環濠の延長と考える。ことを根拠にしている。今回、小型の環濠を復元した際、小型環濠の延長と断面Ｖ字の溝が重なったことから、これまで前期環濠（大型）の一部とみられた濠は、小型環濠を構成する濠の一部と判断した。ただし、これまで中期初頭とした条濠の出入り口付近の環濠最下層からは、城ノ越式の土器が多量に出土しており、中期の条濠説を補強する。しかしながら、土器の出土地点が環濠の出入り口付近に近いことも考え合わせると、環濠の掘り返しではないかと考える。あるいは、中期段階にすでに埋没しつつあった前期環濠を利用して、条濠を再掘削したと想定する。

参考文献

佐賀県教育委員会「八ツ並金丸遺跡（集落）」『柚比遺跡群３』佐賀県文化財調査報告書第155集 2003.3

佐賀県教育委員会『町南遺跡』佐賀県文化財調査報告書第68集 1983.3

佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡－平成２～７年度の発掘調査の概要』佐賀県文化財調査報告書第132集 1997.3

東脊振村教育委員会『松原遺跡７区』東脊振村文化財調査報告書第20集 1997.3

神埼町教育委員会『的五本黒木遺跡』神埼町文化財調査報告書第11集 1985.3

武雄市教育委員会『小楠遺跡』武雄市文化財調査報告書第26集 1991.3

佐賀県教育委員会『吉野ヶ里遺跡－平成11年度～12年度の発掘調査の概要』佐賀県文化財調査報告書第160集 2004

3．出土石器について

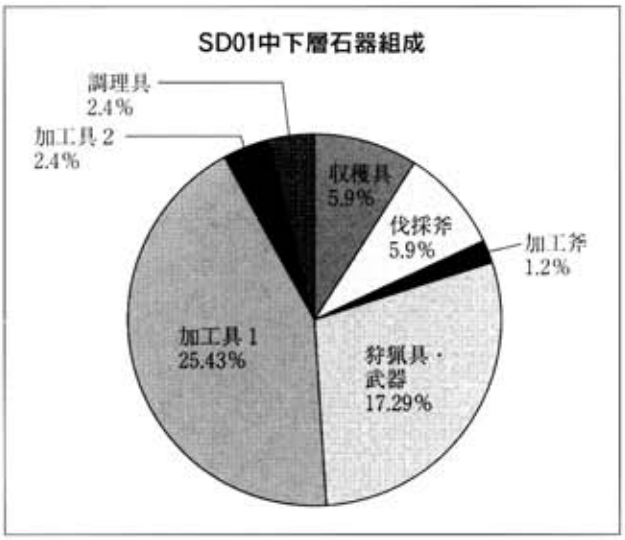
幸津遺跡SD01環濠出土の石器について、組成、型式（石材を含む）の観点から考察を行う。ただし、今回調査されたのは環濠の一部分のため、石器の様相を完全に反映するものではない。今後の調査の際に、より詳細な検討を行う必要がある。

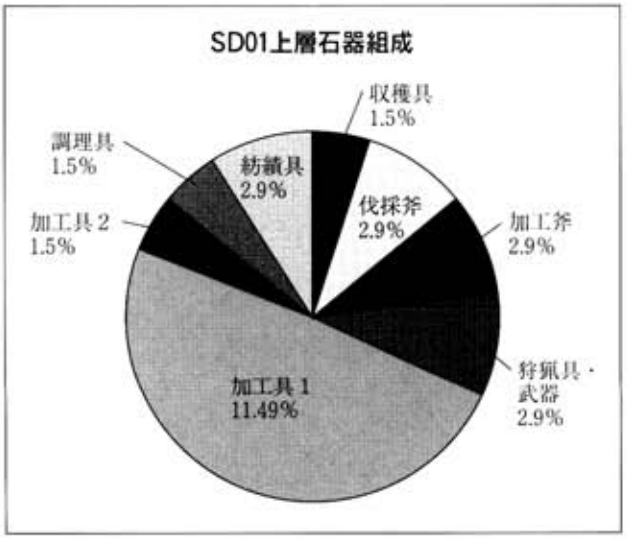
A　組成について

SD01環濠出土の石器の組成を表と円グラフで表した。分類は、国立歴史民族博物館1996「農耕開始期の石器組成１」の分類を一部改変して用いた[注1]。出土点数が少ないため、特徴的な点を個別に挙げる。

SD01環濠石器組成表（未報告含む）

	中・下層	上層
石庖丁	5	1
両刃石斧	5	2
柱状片刃石斧	1	1
扁平片刃石斧	0	1
紡錘車	0	2
砥石	2	1
磨石	2	1
小型円礫	17	2
スクレイパー	5	2
UF	15	8
RF	4	1
楔形石器	1	0
石核	14	3





石器組成で最も特徴的なのは、中下層、上層ともに加工具１とした打製利器の多さである。石器の出土点数の４割以上を占める。これは使用痕のある剥片が多いためであり、使い捨て用途で多数作られたとみられる。この種類の石器は日常的に使用されたのであろう。

逆に、収穫具、石斧類、加工具２、調理具は少なく、特に加工斧は中下層では１点のみである。木器製作があまり行われなかったのであろうか。

また、武器・狩猟類の割合が中下層と上層で変化している。この類型は石鏃がまったく出土せず、小型の円礫が多数出土した。図示はしていないが、自然礫で、長さ３～６cm、幅2.5～４cm、厚さ２～４cm、重量20～110ｇに収まる。重量の平均値は46ｇである。これらは中層を中心に出土し、上層にはほとんどみられない。このことから、前期後半～末の限定された時間幅で使用され廃棄されたといえる。同様の円礫は、福岡県小郡市周辺の遺跡に類例がある。三沢北中尾遺跡では、前期中葉～末の環濠から多数が出土し、石製投弾とされる[注2]。武器か狩猟具かは現状では判断できないが、小郡と鳥栖の類似性が伺える資料である。石鏃が不在の理由は、現段階では判断できないが、柚比の八ツ並金丸遺跡[注3]や佐賀平野の吉野ヶ里遺跡[注4]、その周辺の環濠内からは石鏃の出土が確認されており、調査部分から偶然発見されなかった可能性もある。現状では保留したい。

B　磨製石器の型式について

SD01環濠から出土した石器について、石材を含めた型式分類を試みた。

・石庖丁

①類：頁岩質砂岩製の大型品。弧度の強い外湾刃半月形で、長さ14cm程度、幅６～８cm。体部は平坦で刃部は両刃。背部は平坦なもの、丸いものがあり、擦切り技法が用いられる場合がある。孔は敲打のち回転穿孔が多い。下條信行氏分類（1994）のA2型式に含まれる[註5]。

②類：片岩製。細片のため不明な点が多いが、非常に薄いものが多い。A2型式の範疇と思われる。

③類：立岩産赤紫色泥岩製。横長の外湾刃半月形で、長さは15～16cm、幅は４～６cm。紐孔部に最大厚があり、断面は紡錘形に近い。刃部は両刃で、背部は平坦なものと尖るものがある。穿孔は回転穿孔、または敲打の後回転穿孔。下條分類のA3型式に含まれる。

以上の３種類に分類できる。①類と③類は周辺に石材が存在せず、未製品や石器製作址がないことから、製品が搬入されたと考えられる。②類の片岩は、三郡変成帯でみられる在地石材であるが、未製品はない。片岩は脆弱な石材であり、素材の広域流通の証拠もないので、現状では在地産か周辺の集落で製作されたものであると考えたい。

①類は、北部九州の前期に特徴的にみられる石庖丁である。石材の産地はいまだ不明であり、どこから流通したかは根拠が弱いが、未製品の存在する福岡平野か小郡周辺から搬入された可能性がある。これに②類の片岩製石庖丁が在地産として伴う様相は、有明海沿岸～筑後地域にかけて共通する特徴である。

次に、③類はSD01環濠の上層と検出面からの出土で、前期後半～中期後半の幅で捉えられる。下條氏（1994）によれば、A3型式は前期末以降、中期を中心とする。ただし、鳥栖地域では立岩産石庖丁は中期後半以降に大量に流通し、それ以前はほとんど見られない。上層に須玖式が混入していることと合わせて、③類は中期後半に立岩周辺から流通したものである可能性が高い。

・伐採斧

①類：小型両刃石斧。円基で平面台形、刃幅は推定５～６cm程度。横断面形は楕円形で厚斧率は50～60%。研磨は主面中心で側面に剥離痕と敲打痕を残す。

②類：小型両刃石斧。刃幅は推定５～６cmで平面台形、横断面は薄く方形に近い。厚斧率は30～40%。全面が研磨される。

③類：太形蛤刃石斧。刃幅は推定７～８cm。厚斧率は推定で50～60%。下條分類（1994）A2型式に含まれる。

④類：今山産玄武岩製の太形蛤刃石斧。平面台形で刃幅は推定７～９cm。厚斧率は60～70%。下條分類A3型式に含まれる。全面研磨で、基部側に敲打痕を残す。

幸津遺跡では、①、③類がSD01環濠中・下層、②・④類がSD01環濠上層から各１点のみ出土した。①、③、④類は北部九州の他の遺跡でも普遍的にみられる型式である。②類は片岩製で、鳥栖の他の遺跡ではほとんどみられない。

①、③類は、生産について不明な点が多い。②類は、石庖丁②類の石材と対応し、在地産と考えられるが、数量は僅かである。④は福岡県の今山遺跡周辺で製作され、流通したものである。SD01環濠の中下層では出土していないが、ほぼ同時期にあたる柚比丘陵の八ツ並金丸遺跡SD6009環濠中下層や、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡田手二本黒木地区SD0001環濠より出土している。前期中葉以降、鳥栖地域や佐賀平野の集落に流通したことが確認できる。

・柱状片刃石斧

①類：ホルンフェルス製。小型品で長さ10～12cm程度。後主面は緩やかに反り、抉りは浅い。全体的に稜が不明瞭で、鏑は弱い。横断面は台形。下條分類（1997）のD型式に含まれる[注6]。

②類：層灰岩製。長さは推定15cm程度。基部は尖り、抉りはコの字型で稜は明瞭である。横断面は長方形。下條分類のC型式に含まれる。

・扁平片刃石斧

①類：平面台形状で、後主面は緩やかに湾曲する。刃部は鏑が緩やかだが、何度も研ぎ直されたためだと思われる。横断面形は長方形で、側部には剥離が残存する。下條分類（1999）のHI－2類に含まれる[注7]。

両者のいずれの型式も前期後半～中期前半に北部九州に分布する型式である。SD01環濠の中層と上層から出土しており、ほぼ前期後半～中期初頭の資料とみてよい。

以上、磨製石器の型式分類を行った。上記の石器類は、型式的には北部九州域における該期の様相と高い類似性をもつようであり、北部九州の文化圏として捉えられる。ただし、各器種の石材の割合から、前期における小地域性を抽出しうる。以下に、小地域性抽出のための課題を挙げる。

課題1：石庖丁の搬入石材（頁岩質砂岩、立岩産赤紫色泥岩）、在地石材の比率

課題2：両刃石斧の④類（今山産玄武岩製）とその他の石斧の比率

課題3：片刃石斧類の層灰岩、ホルンフェルス製とそれ以外の石材の比率

頁岩質砂岩製石庖丁、今山産太形蛤刃石斧、層灰岩製片刃石斧は北部九州一円に分布しており、石器の大文化圏を形づくる要素となっている。これらと、他の石材から作られた磨製石器の比率を小地域ごとに検討し比較することで、細かな地域性が抽出できる可能性がある。

このうち、幸津遺跡の石器で検討できるのは、課題1であり、他地域の遺跡と比較を試みたい。SD01環濠中下層出土の石庖丁は、5点中3点が頁岩質砂岩製、2点が片岩製で、立岩産石庖丁は未出土である。同じ鳥栖地域の八並金丸遺跡では、確実に前期後半～中期初頭に比定される12点のうち、頁岩質砂岩が10点、2点が片岩である。2遺跡で比率に差はあるが、少なくとも鳥栖地域では、頁岩質砂岩が主で、片岩が従、赤紫色泥岩はみられないと言える。次に、佐賀平野の吉野ヶ里遺跡では、頁岩質砂岩と片岩の比率は八ツ並金丸遺跡と類似するが、立岩産石庖丁が流通する点で異なる。小郡には該期に立岩産石庖丁が流通しており、当時の流通経路に関係する可能性がある。また、筑後市の常用長田遺跡[注8]では、片岩と頁岩質砂岩の比率が逆転し、6割が片岩製である。このように、石材の割合によって各地で小地域性を抽出することができる。特に、片岩製石庖丁の割合は、頁岩質砂岩（剥片、製品のどちらであるか不明）、立岩産石庖丁の搬入量の多寡や、片岩産地との距離と密接に関係する可能性があり、非常に重要である。今後、遺跡数を増やして緻密な検討を行う必要がある。

表6　前期後半～中期初頭における石庖丁の石材

地域	遺跡名	頁岩質砂岩	片岩	立岩産赤紫色泥岩	その他	総　数
鳥栖	幸津遺跡	3	2	0	0	5
	八ツ並金丸遺跡	10	2	0	0	12
佐賀	吉野ヶ里遺跡SD0001	13	1	3	0	19
筑後	常用長田遺跡H15年度報告分	3	6	0	1	10
唐津	菜畑7層上層	7	0	0	0	7

C　打製石器の諸問題

打製石器は、磨製石器に較べ多数出土した。石材の選択、製作技法について検討を行う。

・石材の使い分けについて

出土した打製石器は、スクレイパーと使用痕のある剥片（UF）、調整剥片（RF）、楔形石器であり、石鏃は出土していない。出土した器種は、腰岳産黒曜石と多久産または三日月町産の安山岩（通称サヌカイト）を石材として用いている。以下に中下層から出土した打製石器の石材の割合を器種ごとに示す。

スクレイパー　　：５点　　全て安山岩
使用痕のある剥片：14点　　黒曜石10点　安山岩４点
楔形石器　　：１点　　安山岩
調整剥片　　：２点　　全て安山岩
石核　　：13点　　黒曜石11点　安山岩２点

このように、スクレイパーには安山岩が用いられ、使用痕のある剥片は、黒曜石が中心に用いられるという石材の選択がみられる。また、使用痕のある剥片と黒曜石の石核の数量の多さは、対応関係にあり、使い捨てる用途で大量に製作されたと考えられる。

・製作技法について

打製石器のうち、黒曜石は縦長剥片が主流である。安山岩は縦長剥片、横長剥片、１：１の剥片と多様な種類がある。そして、大半は背面に２種類の剥離をもつ。

①縦方向の剥離をもつもの　②周縁から剥離が施されるもの

次に、石核をみると、剥離の方法によって３種類が存在する。

ア：作業面を入れ替えずに周縁に打面を転移ながら打撃を加えるもの
イ：打面を転移せず、作業面を入れ替えるもの
ウ：打面・作業面を入れ替えながら打撃を加えるもの

①はイに対応し、②はアとウに対応する。黒曜石の石核はア・イ・ウがあり、安山岩の石核ではイ・ウが存在する。割り取られた剥片のうち、スクレイパーは押圧技法で刃部が作り出される。刃部の部位と、形状は多様であり、剥片の形状によって任意に整形されたと考えられる。

これら３つの剥片の割り取り方法は、橘昌信氏の十郎川技法と対応するものであり、縄文時代晩期から弥生時代前期まで継続するようである（橘1987）[註9]。ただし、かなりランダムな要素が強く、あまり製作技法にとらわれず製作され、使い捨てられたと考えるべきであろう。このような打製石器の製作の様相は、玄界灘沿岸部や有明海沿岸部でも同様に報告されており、弥生時代前期段階には北部九州一円に広がっていた可能性が高い（橘1987、児玉2006[註10]、敦賀2005[註11]）。

D　まとめ

・石器組成は、打製利器、特に使用痕のある剥片の割合が高い。狩猟具・武器の中で小型円礫が多数みられる。
・磨製石器の型式は、前期の北部九州地域圏に一般的にみられる様相である。石材で、頁岩質砂岩製石庖丁、立岩産石庖丁、今山産太形蛤刃石斧、層灰岩・ホルンフェルス製片刃石斧とその他の在地産磨製石器の比率を小地域ごとに比較する必要がある。

・打製石器は、スクレイパーなどの大型品に安山岩が用いられ、小型の使用痕剥片には黒曜石が用いられる。製作は十郎川技法の延長上で、北部九州一円に広がる可能性がある。

註

1：収穫具は石庖丁、狩猟具・武器は石製投弾、加工具１はスクレイパー、UF、RF、楔形石器、加工具２は砥石、調理具は磨石、紡績具は紡錘車を指す。

2：小郡市教育委員会2003『三沢北中尾遺跡１地点　環濠編』小郡市文化財調査報告書第181集

3：佐賀県教育委員会2003「第１分冊　八ツ並金丸遺跡（集落）」『柚比遺跡群３』佐賀県文化財調査報告書第155集

4：佐賀県教育委員会2005『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区弥生前期環濠出土の土器と石器－』佐賀県文化財調査報告書第163集

5：下條信行1994『弥生時代・大陸系磨製石器の編年網の作製と地域間の比較研究』平成５年度科学研究費補助金（一般研究Ｃ）研究成果報告書

6：下條信行1997「柱状片刃石斧について」『古文化論叢－伊達先生古希記念論集－』伊達先生古希記念論集刊行会

7：下條信行1996「扁平片刃石斧について」『愛媛大学人文会創立二十周年記念論集』愛媛大学人文会

8：筑後市教育委員会2003「常用長田遺跡」『筑後西部第２地区遺跡群（Ⅵ）』筑後市文化財調査報告書第50集

9：橘昌信1987「縄文晩期および弥生時代の剥片石器－宇木汲田遺跡を中心に－」『岡崎敬先生退官記念論集　東アジアの考古と歴史』岡崎敬先生退官記念事業会

10：児玉2006「大江前遺跡出土石器群の考察」『西九州自動車道建設に係る文化財調査報告書（3）大江前遺跡』佐賀県文化財調査報告書第167集　佐賀県教育委員会

11：敦賀2005「第2節　剥片石器・礫石器」『吉野ヶ里遺跡－田手二本黒木地区弥生時代前期環濠出土の土器と石器－』佐賀県文化財調査報告書第163集　佐賀県教育委員会

報 告 書 抄 録

ふりがな	さいついせき
書名	幸津遺跡
副書名	九州新幹線建設に係る文化財調査報告書
巻次	1
シリーズ名	佐賀県文化財調査報告書
シリーズ番号	第169集
編集者名	細川 金也
執筆者名	細川金也・田中健一郎・西田和己・兒玉洋志
編集機関	佐賀県教育委員会
所在地	〒840-0041　佐賀市城内一丁目1番59号　　Tel. 0952 (25) 7232
発行年月日	西暦2007年3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
幸津遺跡	鳥栖市 幸津町	410213	2062 3092 4031 5043			平成16年 12月13日 ～ 平成17年 2月25日	850m²	九州新幹線 建設事業

所収遺跡名	種別	時代	遺構	遺物	特記事項
幸津	集落	弥生 古墳 古代 近世	環濠 竪穴住居 土坑 掘立柱建物	弥生土器 石器 土師器 須恵器	弥生時代前期の環濠 古墳時代前期の土器埋納土坑

幸津遺跡調査前風景（遠景）南から

幸津遺跡調査前風景（近景）南から

幸津遺跡全景（北上空から）

幸津遺跡全景（上空から）

SD01環濠全景（北西から）

SD01環濠土層A断面（南東から）

SD01環濠土層Ｂ断面（南東から）

SH07竪穴住居跡全景（北東から）

SH06・05竪穴住居跡全景（東から）

SX11～15土坑（東から）

SH08竪穴住居跡全景（北東から）

SX12土坑北壁（南から）

SX13土坑半裁状況（南東から）

SX02土器埋納土坑（北から）

SX03土坑土器埋納土坑

SX04土器埋納土坑（北東から）

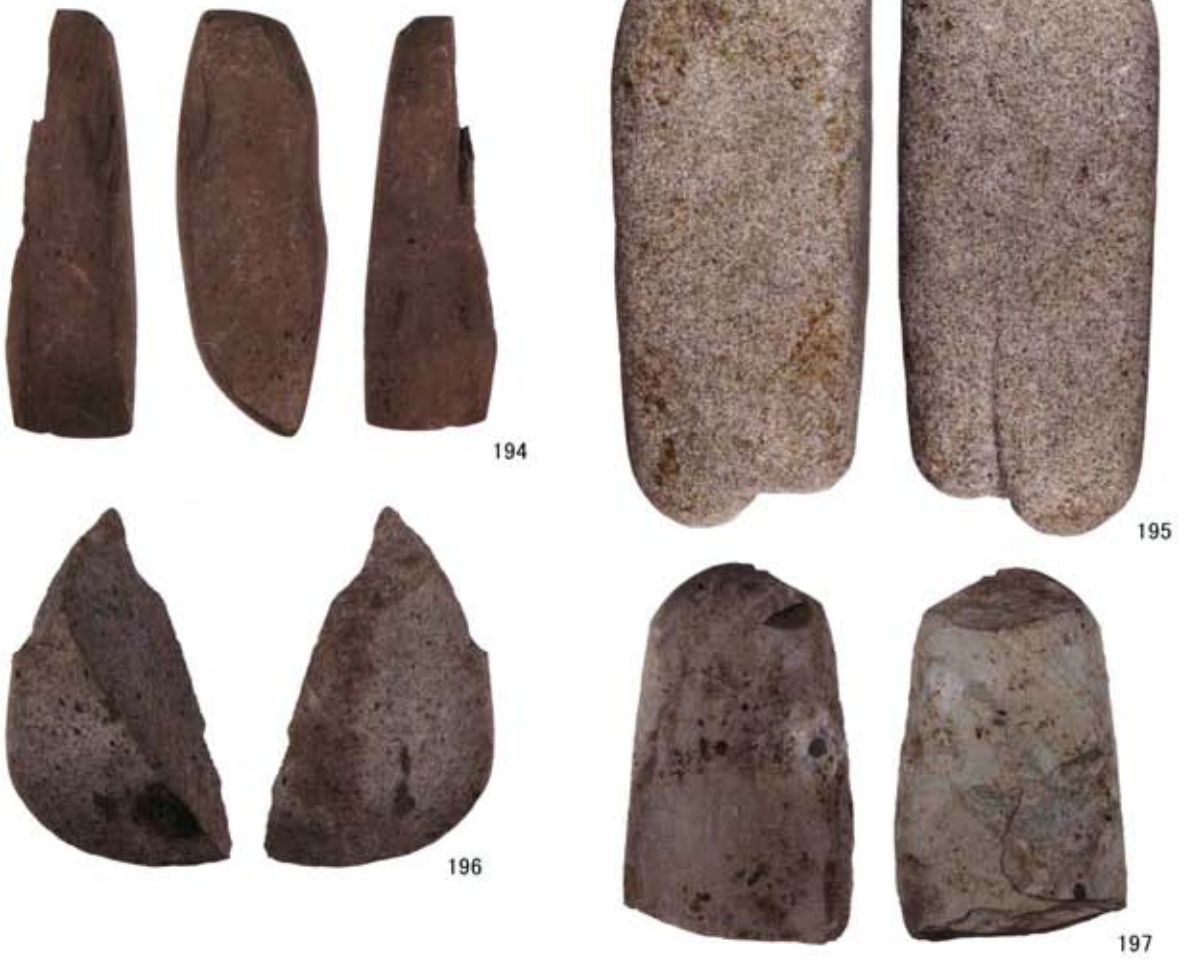
SD01環濠出土土器①

SD01環濠出土土器②／SX02～SX04土器埋納土坑出土土器

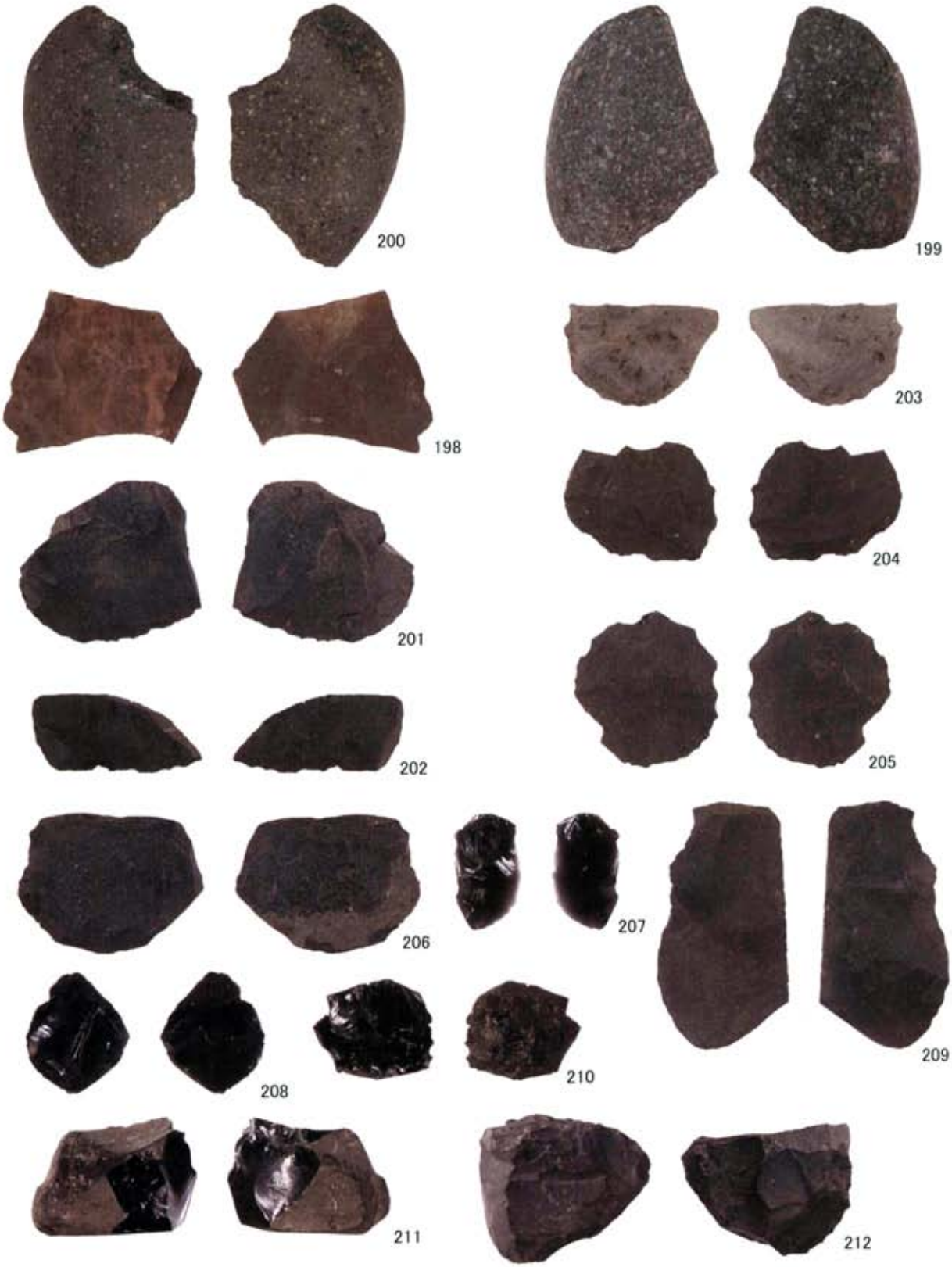
SH07竪穴住居跡／SX013土坑／包含層・検出面出土土器

191

192 193


194 195 196 197

SD01環濠出土石器①



SD01環濠出土石器②

213

214

215

216

219

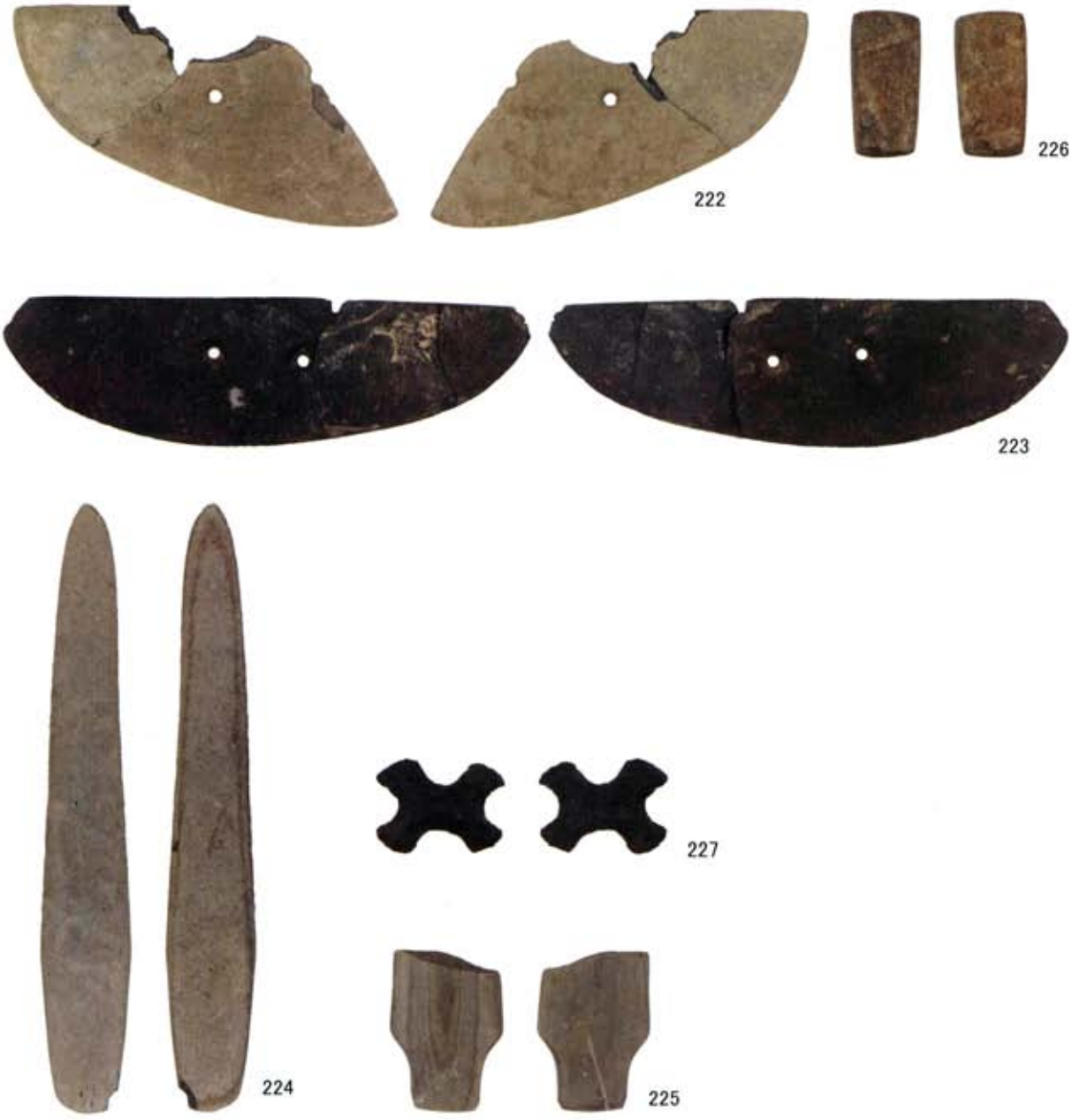
220

217

221

218

SD01環濠出土石器③



その他の遺構・包含層出土土器

佐賀県文化財調査報告書第169集
九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書1
幸津遺跡

発　行　日　平成19年３月
編集・発行　佐賀県教育委員会
佐賀市城内一丁目1-59
印　　刷　山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5

環境にやさしい
再生紙を使用しています